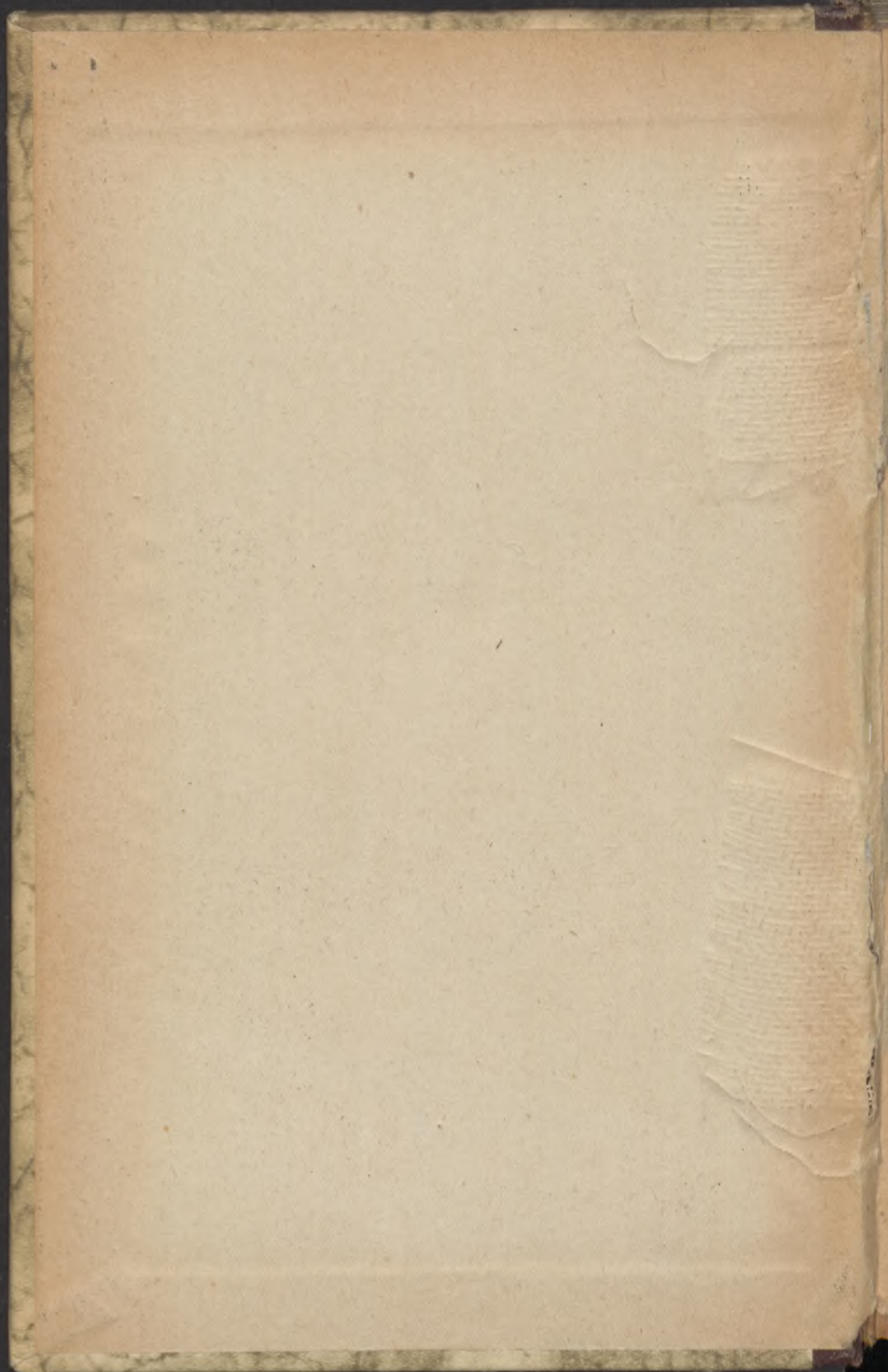


264052



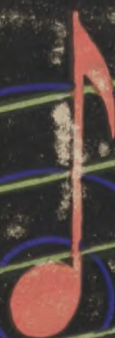


MEHELY



# ZENEKÖNYV

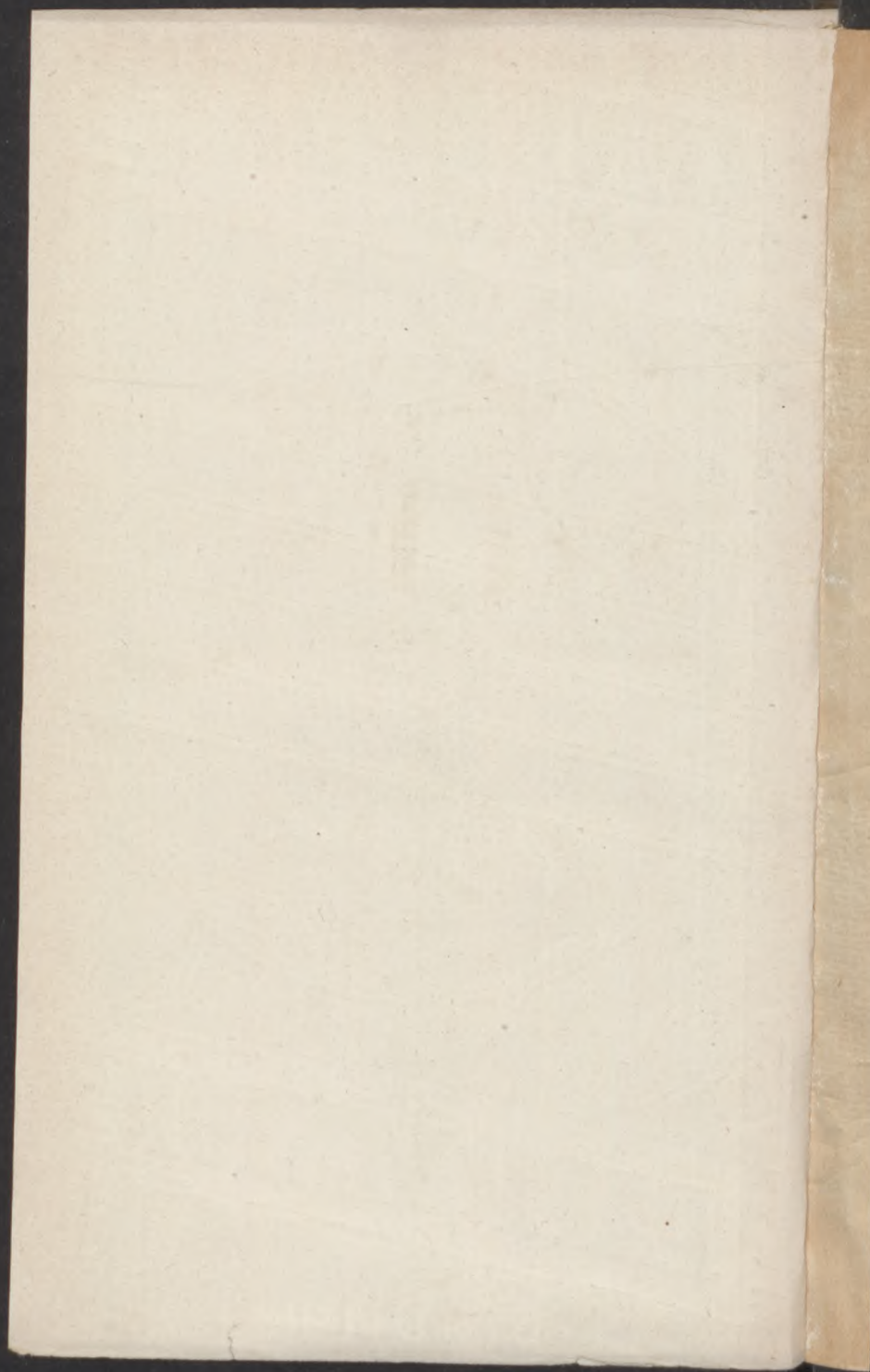
TANULMÁNYOK  
KAMARAZENE



MEHÉLY

IRTA  
**PAPP VIKTOR**

STADIUM





ac 1944. II. ~~10~~ ~~11~~ ~~12~~ ~~13~~ ~~14~~ ~~15~~ ~~16~~ ~~17~~ ~~18~~ ~~19~~ ~~20~~ ~~21~~ ~~22~~ ~~23~~ ~~24~~ ~~25~~ ~~26~~ ~~27~~ ~~28~~ ~~29~~ ~~30~~ ~~31~~ ~~32~~ ~~33~~ ~~34~~ ~~35~~ ~~36~~ ~~37~~ ~~38~~ ~~39~~ ~~40~~ ~~41~~ ~~42~~ ~~43~~ ~~44~~ ~~45~~ ~~46~~ ~~47~~ ~~48~~ ~~49~~ ~~50~~ ~~51~~ ~~52~~ ~~53~~ ~~54~~ ~~55~~ ~~56~~ ~~57~~ ~~58~~ ~~59~~ ~~60~~ ~~61~~ ~~62~~ ~~63~~ ~~64~~ ~~65~~ ~~66~~ ~~67~~ ~~68~~ ~~69~~ ~~70~~ ~~71~~ ~~72~~ ~~73~~ ~~74~~ ~~75~~ ~~76~~ ~~77~~ ~~78~~ ~~79~~ ~~80~~ ~~81~~ ~~82~~ ~~83~~ ~~84~~ ~~85~~ ~~86~~ ~~87~~ ~~88~~ ~~89~~ ~~90~~ ~~91~~ ~~92~~ ~~93~~ ~~94~~ ~~95~~ ~~96~~ ~~97~~ ~~98~~ ~~99~~ ~~100~~ ~~101~~ ~~102~~ ~~103~~ ~~104~~ ~~105~~ ~~106~~ ~~107~~ ~~108~~ ~~109~~ ~~110~~ ~~111~~ ~~112~~ ~~113~~ ~~114~~ ~~115~~ ~~116~~ ~~117~~ ~~118~~ ~~119~~ ~~120~~ ~~121~~ ~~122~~ ~~123~~ ~~124~~ ~~125~~ ~~126~~ ~~127~~ ~~128~~ ~~129~~ ~~130~~ ~~131~~ ~~132~~ ~~133~~ ~~134~~ ~~135~~ ~~136~~ ~~137~~ ~~138~~ ~~139~~ ~~140~~ ~~141~~ ~~142~~ ~~143~~ ~~144~~ ~~145~~ ~~146~~ ~~147~~ ~~148~~ ~~149~~ ~~150~~ ~~151~~ ~~152~~ ~~153~~ ~~154~~ ~~155~~ ~~156~~ ~~157~~ ~~158~~ ~~159~~ ~~160~~ ~~161~~ ~~162~~ ~~163~~ ~~164~~ ~~165~~ ~~166~~ ~~167~~ ~~168~~ ~~169~~ ~~170~~ ~~171~~ ~~172~~ ~~173~~ ~~174~~ ~~175~~ ~~176~~ ~~177~~ ~~178~~ ~~179~~ ~~180~~ ~~181~~ ~~182~~ ~~183~~ ~~184~~ ~~185~~ ~~186~~ ~~187~~ ~~188~~ ~~189~~ ~~190~~ ~~191~~ ~~192~~ ~~193~~ ~~194~~ ~~195~~ ~~196~~ ~~197~~ ~~198~~ ~~199~~ ~~200~~ ~~201~~ ~~202~~ ~~203~~ ~~204~~ ~~205~~ ~~206~~ ~~207~~ ~~208~~ ~~209~~ ~~210~~ ~~211~~ ~~212~~ ~~213~~ ~~214~~ ~~215~~ ~~216~~ ~~217~~ ~~218~~ ~~219~~ ~~220~~ ~~221~~ ~~222~~ ~~223~~ ~~224~~ ~~225~~ ~~226~~ ~~227~~ ~~228~~ ~~229~~ ~~230~~ ~~231~~ ~~232~~ ~~233~~ ~~234~~ ~~235~~ ~~236~~ ~~237~~ ~~238~~ ~~239~~ ~~240~~ ~~241~~ ~~242~~ ~~243~~ ~~244~~ ~~245~~ ~~246~~ ~~247~~ ~~248~~ ~~249~~ ~~250~~ ~~251~~ ~~252~~ ~~253~~ ~~254~~ ~~255~~ ~~256~~ ~~257~~ ~~258~~ ~~259~~ ~~260~~ ~~261~~ ~~262~~ ~~263~~ ~~264~~ ~~265~~ ~~266~~ ~~267~~ ~~268~~ ~~269~~ ~~270~~ ~~271~~ ~~272~~ ~~273~~ ~~274~~ ~~275~~ ~~276~~ ~~277~~ ~~278~~ ~~279~~ ~~280~~ ~~281~~ ~~282~~ ~~283~~ ~~284~~ ~~285~~ ~~286~~ ~~287~~ ~~288~~ ~~289~~ ~~290~~ ~~291~~ ~~292~~ ~~293~~ ~~294~~ ~~295~~ ~~296~~ ~~297~~ ~~298~~ ~~299~~ ~~300~~ ~~301~~ ~~302~~ ~~303~~ ~~304~~ ~~305~~ ~~306~~ ~~307~~ ~~308~~ ~~309~~ ~~310~~ ~~311~~ ~~312~~ ~~313~~ ~~314~~ ~~315~~ ~~316~~ ~~317~~ ~~318~~ ~~319~~ ~~320~~ ~~321~~ ~~322~~ ~~323~~ ~~324~~ ~~325~~ ~~326~~ ~~327~~ ~~328~~ ~~329~~ ~~330~~ ~~331~~ ~~332~~ ~~333~~ ~~334~~ ~~335~~ ~~336~~ ~~337~~ ~~338~~ ~~339~~ ~~340~~ ~~341~~ ~~342~~ ~~343~~ ~~344~~ ~~345~~ ~~346~~ ~~347~~ ~~348~~ ~~349~~ ~~350~~ ~~351~~ ~~352~~ ~~353~~ ~~354~~ ~~355~~ ~~356~~ ~~357~~ ~~358~~ ~~359~~ ~~360~~ ~~361~~ ~~362~~ ~~363~~ ~~364~~ ~~365~~ ~~366~~ ~~367~~ ~~368~~ ~~369~~ ~~370~~ ~~371~~ ~~372~~ ~~373~~ ~~374~~ ~~375~~ ~~376~~ ~~377~~ ~~378~~ ~~379~~ ~~380~~ ~~381~~ ~~382~~ ~~383~~ ~~384~~ ~~385~~ ~~386~~ ~~387~~ ~~388~~ ~~389~~ ~~390~~ ~~391~~ ~~392~~ ~~393~~ ~~394~~ ~~395~~ ~~396~~ ~~397~~ ~~398~~ ~~399~~ ~~400~~ ~~401~~ ~~402~~ ~~403~~ ~~404~~ ~~405~~ ~~406~~ ~~407~~ ~~408~~ ~~409~~ ~~410~~ ~~411~~ ~~412~~ ~~413~~ ~~414~~ ~~415~~ ~~416~~ ~~417~~ ~~418~~ ~~419~~ ~~420~~ ~~421~~ ~~422~~ ~~423~~ ~~424~~ ~~425~~ ~~426~~ ~~427~~ ~~428~~ ~~429~~ ~~430~~ ~~431~~ ~~432~~ ~~433~~ ~~434~~ ~~435~~ ~~436~~ ~~437~~ ~~438~~ ~~439~~ ~~440~~ ~~441~~ ~~442~~ ~~443~~ ~~444~~ ~~445~~ ~~446~~ ~~447~~ ~~448~~ ~~449~~ ~~450~~ ~~451~~ ~~452~~ ~~453~~ ~~454~~ ~~455~~ ~~456~~ ~~457~~ ~~458~~ ~~459~~ ~~460~~ ~~461~~ ~~462~~ ~~463~~ ~~464~~ ~~465~~ ~~466~~ ~~467~~ ~~468~~ ~~469~~ ~~470~~ ~~471~~ ~~472~~ ~~473~~ ~~474~~ ~~475~~ ~~476~~ ~~477~~ ~~478~~ ~~479~~ ~~480~~ ~~481~~ ~~482~~ ~~483~~ ~~484~~ ~~485~~ ~~486~~ ~~487~~ ~~488~~ ~~489~~ ~~490~~ ~~491~~ ~~492~~ ~~493~~ ~~494~~ ~~495~~ ~~496~~ ~~497~~ ~~498~~ ~~499~~ ~~500~~ ~~501~~ ~~502~~ ~~503~~ ~~504~~ ~~505~~ ~~506~~ ~~507~~ ~~508~~ ~~509~~ ~~510~~ ~~511~~ ~~512~~ ~~513~~ ~~514~~ ~~515~~ ~~516~~ ~~517~~ ~~518~~ ~~519~~ ~~520~~ ~~521~~ ~~522~~ ~~523~~ ~~524~~ ~~525~~ ~~526~~ ~~527~~ ~~528~~ ~~529~~ ~~530~~ ~~531~~ ~~532~~ ~~533~~ ~~534~~ ~~535~~ ~~536~~ ~~537~~ ~~538~~ ~~539~~ ~~540~~ ~~541~~ ~~542~~ ~~543~~ ~~544~~ ~~545~~ ~~546~~ ~~547~~ ~~548~~ ~~549~~ ~~550~~ ~~551~~ ~~552~~ ~~553~~ ~~554~~ ~~555~~ ~~556~~ ~~557~~ ~~558~~ ~~559~~ ~~560~~ ~~561~~ ~~562~~ ~~563~~ ~~564~~ ~~565~~ ~~566~~ ~~567~~ ~~568~~ ~~569~~ ~~570~~ ~~571~~ ~~572~~ ~~573~~ ~~574~~ ~~575~~ ~~576~~ ~~577~~ ~~578~~ ~~579~~ ~~580~~ ~~581~~ ~~582~~ ~~583~~ ~~584~~ ~~585~~ ~~586~~ ~~587~~ ~~588~~ ~~589~~ ~~590~~ ~~591~~ ~~592~~ ~~593~~ ~~594~~ ~~595~~ ~~596~~ ~~597~~ ~~598~~ ~~599~~ ~~600~~ ~~601~~ ~~602~~ ~~603~~ ~~604~~ ~~605~~ ~~606~~ ~~607~~ ~~608~~ ~~609~~ ~~610~~ ~~611~~ ~~612~~ ~~613~~ ~~614~~ ~~615~~ ~~616~~ ~~617~~ ~~618~~ ~~619~~ ~~620~~ ~~621~~ ~~622~~ ~~623~~ ~~624~~ ~~625~~ ~~626~~ ~~627~~ ~~628~~ ~~629~~ ~~630~~ ~~631~~ ~~632~~ ~~633~~ ~~634~~ ~~635~~ ~~636~~ ~~637~~ ~~638~~ ~~639~~ ~~640~~ ~~641~~ ~~642~~ ~~643~~ ~~644~~ ~~645~~ ~~646~~ ~~647~~ ~~648~~ ~~649~~ ~~650~~ ~~651~~ ~~652~~ ~~653~~ ~~654~~ ~~655~~ ~~656~~ ~~657~~ ~~658~~ ~~659~~ ~~660~~ ~~661~~ ~~662~~ ~~663~~ ~~664~~ ~~665~~ ~~666~~ ~~667~~ ~~668~~ ~~669~~ ~~670~~ ~~671~~ ~~672~~ ~~673~~ ~~674~~ ~~675~~ ~~676~~ ~~677~~ ~~678~~ ~~679~~ ~~680~~ ~~681~~ ~~682~~ ~~683~~ ~~684~~ ~~685~~ ~~686~~ ~~687~~ ~~688~~ ~~689~~ ~~690~~ ~~691~~ ~~692~~ ~~693~~ ~~694~~ ~~695~~ ~~696~~ ~~697~~ ~~698~~ ~~699~~ ~~700~~ ~~701~~ ~~702~~ ~~703~~ ~~704~~ ~~705~~ ~~706~~ ~~707~~ ~~708~~ ~~709~~ ~~710~~ ~~711~~ ~~712~~ ~~713~~ ~~714~~ ~~715~~ ~~716~~ ~~717~~ ~~718~~ ~~719~~ ~~720~~ ~~721~~ ~~722~~ ~~723~~ ~~724~~ ~~725~~ ~~726~~ ~~727~~ ~~728~~ ~~729~~ ~~730~~ ~~731~~ ~~732~~ ~~733~~ ~~734~~ ~~735~~ ~~736~~ ~~737~~ ~~738~~ ~~739~~ ~~740~~ ~~741~~ ~~742~~ ~~743~~ ~~744~~ ~~745~~ ~~746~~ ~~747~~ ~~748~~ ~~749~~ ~~750~~ ~~751~~ ~~752~~ ~~753~~ ~~754~~ ~~755~~ ~~756~~ ~~757~~ ~~758~~ ~~759~~ ~~760~~ ~~761~~ ~~762~~ ~~763~~ ~~764~~ ~~765~~ ~~766~~ ~~767~~ ~~768~~ ~~769~~ ~~770~~ ~~771~~ ~~772~~ ~~773~~ ~~774~~ ~~775~~ ~~776~~ ~~777~~ ~~778~~ ~~779~~ ~~780~~ ~~781~~ ~~782~~ ~~783~~ ~~784~~ ~~785~~ ~~786~~ ~~787~~ ~~788~~ ~~789~~ ~~790~~ ~~791~~ ~~792~~ ~~793~~ ~~794~~ ~~795~~ ~~796~~ ~~797~~ ~~798~~ ~~799~~ ~~800~~ ~~801~~ ~~802~~ ~~803~~ ~~804~~ ~~805~~ ~~806~~ ~~807~~ ~~808~~ ~~809~~ ~~810~~ ~~811~~ ~~812~~ ~~813~~ ~~814~~ ~~815~~ ~~816~~ ~~817~~ ~~818~~ ~~819~~ ~~820~~ ~~821~~ ~~822~~ ~~823~~ ~~824~~ ~~825~~ ~~826~~ ~~827~~ ~~828~~ ~~829~~ ~~830~~ ~~831~~ ~~832~~ ~~833~~ ~~834~~ ~~835~~ ~~836~~ ~~837~~ ~~838~~ ~~839~~ ~~840~~ ~~841~~ ~~842~~ ~~843~~ ~~844~~ ~~845~~ ~~846~~ ~~847~~ ~~848~~ ~~849~~ ~~850~~ ~~851~~ ~~852~~ ~~853~~ ~~854~~ ~~855~~ ~~856~~ ~~857~~ ~~858~~ ~~859~~ ~~860~~ ~~861~~ ~~862~~ ~~863~~ ~~864~~ ~~865~~ ~~866~~ ~~867~~ ~~868~~ ~~869~~ ~~870~~ ~~871~~ ~~872~~ ~~873~~ ~~874~~ ~~875~~ ~~876~~ ~~877~~ ~~878~~ ~~879~~ ~~880~~ ~~881~~ ~~882~~ ~~883~~ ~~884~~ ~~885~~ ~~886~~ ~~887~~ ~~888~~ ~~889~~ ~~890~~ ~~891~~ ~~892~~ ~~893~~ ~~894~~ ~~895~~ ~~896~~ ~~897~~ ~~898~~ ~~899~~ ~~900~~ ~~901~~ ~~902~~ ~~903~~ ~~904~~ ~~905~~ ~~906~~ ~~907~~ ~~908~~ ~~909~~ ~~910~~ ~~911~~ ~~912~~ ~~913~~ ~~914~~ ~~915~~ ~~916~~ ~~917~~ ~~918~~ ~~919~~ ~~920~~ ~~921~~ ~~922~~ ~~923~~ ~~924~~ ~~925~~ ~~926~~ ~~927~~ ~~928~~ ~~929~~ ~~930~~ ~~931~~ ~~932~~ ~~933~~ ~~934~~ ~~935~~ ~~936~~ ~~937~~ ~~938~~ ~~939~~ ~~940~~ ~~941~~ ~~942~~ ~~943~~ ~~944~~ ~~945~~ ~~946~~ ~~947~~ ~~948~~ ~~949~~ ~~950~~ ~~951~~ ~~952~~ ~~953~~ ~~954~~ ~~955~~ ~~956~~ ~~957~~ ~~958~~ ~~959~~ ~~960~~ ~~961~~ ~~962~~ ~~963~~ ~~964~~ ~~965~~ ~~966~~ ~~967~~ ~~968~~ ~~969~~ ~~970~~ ~~971~~ ~~972~~ ~~973~~ ~~974~~ ~~975~~ ~~976~~ ~~977~~ ~~978~~ ~~979~~ ~~980~~ ~~981~~ ~~982~~ ~~983~~ ~~984~~ ~~985~~ ~~986~~ ~~987~~ ~~988~~ ~~989~~ ~~990~~ ~~991~~ ~~992~~ ~~993~~ ~~994~~ ~~995~~ ~~996~~ ~~997~~ ~~998~~ ~~999~~ ~~1000~~ ~~1001~~ ~~1002~~ ~~1003~~ ~~1004~~ ~~1005~~ ~~1006~~ ~~1007~~ ~~1008~~ ~~1009~~ ~~1010~~ ~~1011~~ ~~1012~~ ~~1013~~ ~~1014~~ ~~1015~~ ~~1016~~ ~~1017~~ ~~1018~~ ~~1019~~ ~~1020~~ ~~1021~~ ~~1022~~ ~~1023~~ ~~1024~~ ~~1025~~ ~~1026~~ ~~1027~~ ~~1028~~ ~~1029~~ ~~1030~~ ~~1031~~ ~~1032~~ ~~1033~~ ~~1034~~ ~~1035~~ ~~1036~~ ~~1037~~ ~~1038~~ ~~1039~~ ~~1040~~ ~~1041~~ ~~1042~~ ~~1043~~ ~~1044~~ ~~1045~~ ~~1046~~ ~~1047~~ ~~1048~~ ~~1049~~ ~~1050~~ ~~1051~~ ~~1052~~ ~~1053~~ ~~1054~~ ~~1055~~ ~~1056~~ ~~1057~~ ~~1058~~ ~~1059~~ ~~1060~~ ~~1061~~ ~~1062~~ ~~1063~~ ~~1064~~ ~~1065~~ ~~1066~~ ~~1067~~ ~~1068~~ ~~1069~~ ~~1070~~ ~~1071~~ ~~1072~~ ~~1073~~ ~~1074~~ ~~1075~~ ~~1076~~ ~~1077~~ ~~1078~~ ~~1079~~ ~~1080~~ ~~1081~~ ~~1082~~ ~~1083~~ ~~1084~~ ~~1085~~ ~~1086~~ ~~1087~~ ~~1088~~ ~~1089~~ ~~1090~~ ~~1091~~ ~~1092~~ ~~1093~~ ~~1094~~ ~~1095~~ ~~1096~~ ~~1097~~ ~~1098~~ ~~1099~~ ~~1100~~ ~~1101~~ ~~1102~~ ~~1103~~ ~~1104~~ ~~1105~~ ~~1106~~ ~~1107~~ ~~1108~~ ~~1109~~ ~~1110~~ ~~1111~~ ~~1112~~ ~~1113~~ ~~1114~~ ~~1115~~ ~~1116~~ ~~1117~~ ~~1118~~ ~~1119~~ ~~1120~~ ~~1121~~ ~~1122~~ ~~1123~~ ~~1124~~ ~~1125~~ ~~1126~~ ~~1127~~ ~~1128~~ ~~1129~~ ~~1130~~ ~~1131~~ ~~1132~~ ~~1133~~ ~~1134~~ ~~1135~~ ~~1136~~ ~~1137~~ ~~1138~~ ~~1139~~ ~~1140~~ ~~1141~~ ~~1142~~ ~~1143~~ ~~1144~~ ~~1145~~ ~~1146~~ ~~1147~~ ~~1148~~ ~~1149~~ ~~1150~~ ~~1151~~ ~~1152~~ ~~1153~~ ~~1154~~ ~~1155~~ ~~1156~~ ~~1157~~ ~~1158~~ ~~1159~~ ~~1160~~ ~~1161~~ ~~1162~~ ~~1163~~ ~~1164~~ ~~1165~~ ~~1166~~ ~~1167~~ ~~1168~~ ~~1169~~ ~~1170~~ ~~1171~~ ~~1172~~ ~~1173~~ ~~1174~~ ~~1175~~ ~~1176~~ ~~1177~~ ~~1178~~ ~~1179~~ ~~1180~~ ~~1181~~ ~~1182~~ ~~1183~~ ~~1184~~ ~~1185~~ ~~1186~~ ~~1187~~ ~~1188~~ ~~1189~~ ~~1190~~ ~~1191~~ ~~1192~~ ~~1193~~ ~~1194~~ ~~1195~~ ~~1196~~ ~~1197~~ ~~1198~~ ~~1199~~ ~~1200~~ ~~1201~~ ~~1202~~ ~~1203~~ ~~1204~~ ~~1205~~ ~~1206~~ ~~1207~~ ~~1208~~ ~~1209~~ ~~1210~~ ~~1211~~ ~~1212~~ ~~1213~~ ~~1214~~ ~~1215~~ ~~1216~~ ~~1217~~ ~~1218~~ ~~1219~~ ~~1220~~ ~~1221~~ ~~1222~~ ~~1223~~ ~~1224~~ ~~1225~~ ~~1226~~ ~~1227~~ ~~1228~~ ~~1229~~ ~~1230~~ ~~1231~~ ~~1232~~ ~~1233~~ ~~1234~~ ~~1235~~ ~~1236~~ ~~1237~~ ~~1238~~ ~~1239~~ ~~1240~~ ~~1241~~ ~~1242~~ ~~1243~~ ~~1244~~ ~~1245~~ ~~1246~~ ~~1247~~ ~~1248~~ ~~1249~~ ~~1250~~ ~~1251~~ ~~1252~~ ~~1253~~ ~~1254~~ ~~1255~~ ~~1256~~ ~~1257~~ ~~1258~~ ~~1259~~ ~~1260~~ ~~1261~~ ~~1262~~ ~~1263~~ ~~1264~~ ~~1265~~ ~~1266~~ ~~1267~~ ~~1268~~ ~~1269~~ ~~1270~~ ~~1271~~ ~~1272~~ ~~1273~~ ~~1274~~ ~~1275~~ ~~1276~~ ~~1277~~ ~~1278~~ ~~1279~~ ~~1280~~ ~~1281~~ ~~1282~~ ~~1283~~ ~~1284~~ ~~1285~~ ~~1286~~ ~~1287~~ ~~1288~~ ~~1289~~ ~~1290~~ ~~1291~~ ~~1292~~ ~~1293~~ ~~1294~~ ~~1295~~ ~~1296~~ ~~1297~~ ~~1298~~ ~~1299~~ ~~1300~~ ~~1301~~ ~~1302~~ ~~1303~~ ~~1304~~ ~~1305~~ ~~1306~~ ~~1307~~ ~~1308~~ ~~1309~~ ~~1310~~ ~~1311~~ ~~1312~~ ~~1313~~ ~~1314~~ ~~1315~~ ~~1316~~ ~~1317~~ ~~1318~~ ~~1319~~ ~~1320~~ ~~1321~~ ~~1322~~ ~~1323~~ ~~1324~~ ~~1325~~ ~~1326~~ ~~1327~~ ~~1328~~ ~~1329~~ ~~1330~~ ~~1331~~ ~~1332~~ ~~1333~~ ~~1334~~ ~~1335~~ ~~1336~~ ~~1337~~ ~~1338~~ ~~1339~~ ~~1340~~ ~~1341~~ ~~1342~~ ~~1343~~ ~~1344~~ ~~1345~~ ~~1346~~ ~~1347~~ ~~1348~~ ~~1349~~ ~~1350~~ ~~1351~~

Z



# ZENEKÖNYV

## TANULMÁNYOK KAMARAZENE

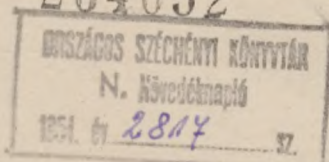
IRTA:  
PAPP VIKTOR



---

STÁDIUM SAJTÓVÁLLALAT RÉSZVÉNYTÁRSASÁG  
BUDAPEST

264052

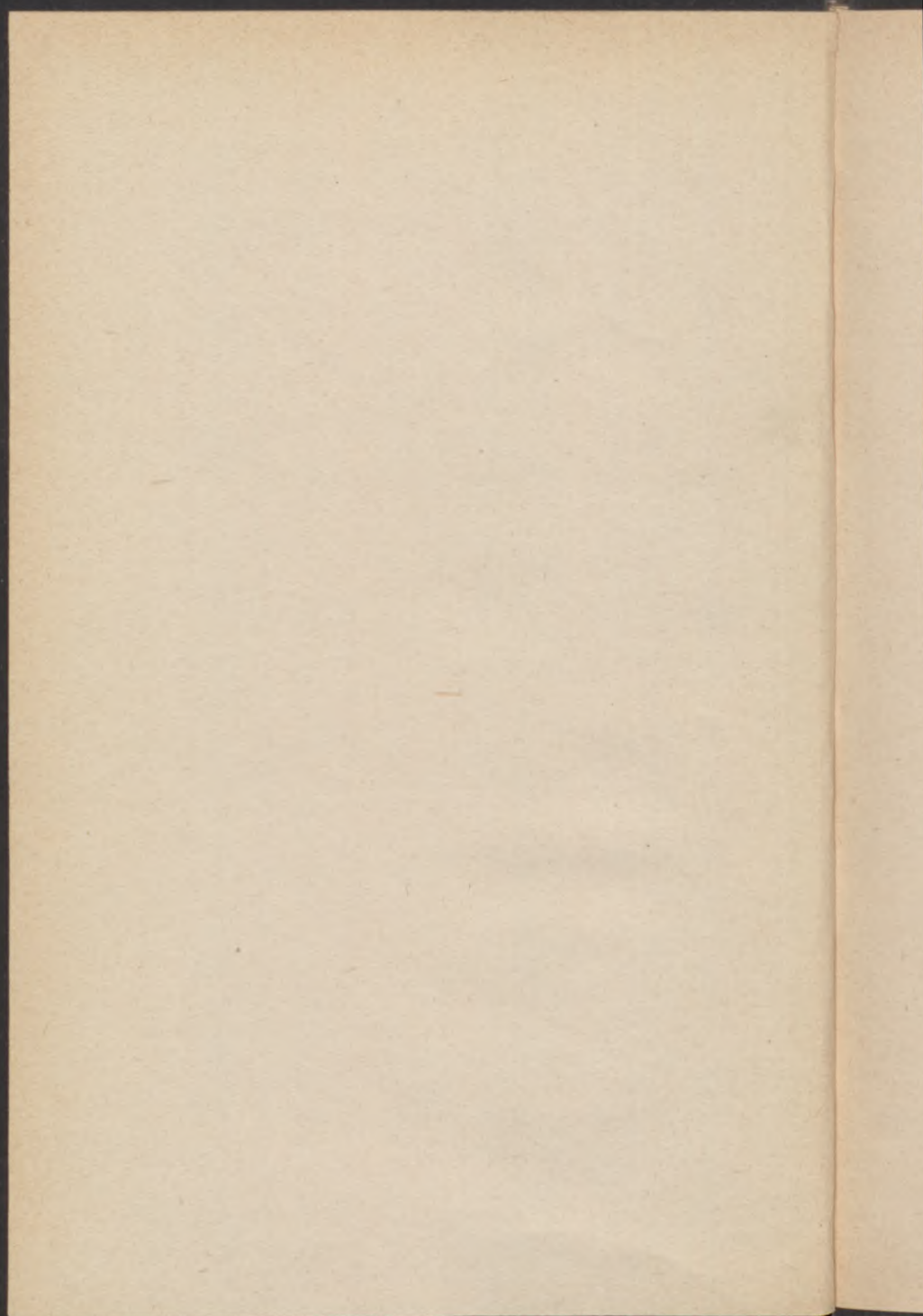


Felelős kiadó: Tamás Kálmán igazgató.

Stádium Sajtóvállalat Rt., Budapest, V., Honvéd-utca 10.  
Felelős: Győry Aladár igazgató.



TANULMÁNYOK  
KAMARAZENE





## ERKEL FERENC SZÁRMAZÁSA

(Halálának félszázados évfordulóján)

1943 június 15-én volt *Erkel* Ferenc halálának félszázados évfordulója. Ötven év távlatából az értékelés igazságosabb, mert a kultúra kincseinek elrétégeződésében segít az idő.

Romain Rolland írja: «Oly nehéz egy egyéniséget megítélni. Minden ember rejtély, nemcsak másoknak, de önmagának is. És mégis kénytelenek vagyunk ítélni: erre szükség van, hogy élhessünk.»

*Erkel* Ferenc felé vetítve ezeket a szavakat, annál szükségesebb az értékelés, mert a szakirodalomban se alakja, se munkálkodása nem áll azon a magaslaton, amelyet megérdemel.

\*

Kultúrtörténetünk csaknem teljes egészében: nemzeti történet. A magyar lángész legtöbbször azzal a küldetéssel jön, hogy nemzeti, politikai céljainknak zászlóvivője legyen. *Erkel* Ferenc a muzsika fenséges nyelven erősítette törekvéseinket.

A nemzet nagy ébresztőinek zenei vezére ő. Működése a nemzet szívének dobbanása. Kölcsey, Petőfi, Arany, Vörösmarty, Munkácsy, Jókai neve mellé kell

iktatni az *Erkel*-ét, — olyan érdemeket szerzett a magyar művészet legválságosabb, de talán éppen ezért, leglendületesebb századában.

A magyart a megpróbáltatás óráiban mindig különleges zene kísérte. A török időkben Tinódi és a históriás ének szegődik a politikai élet mellé, a Rákóczi-időktől kezdve a kuruc zene, az abszolutizmus idején: *Erkel* Ferenc.

*Erkelt* a kor, a nemzeti közvélemény nevelte nagy zeneszerzővé. Annnyira együtt érzett a nemzettel, mint kívüle egyetlen zeneköltőnk sem.

Legnagyobb érdeme, hogy megteremtette a magyar operát. A magyar opera fejlődésében érdekes, hogy akkor, amikor faji zenénkben még alig tisztultak ki a legegyszerűbb műformák és műfajok, mikor dalirodalmunk nemzeti jellegének főbb vonásai még bizonytalanok, mikor hangszeres zenénk még gyermekkorát éli, mikor nálunk zenei kultúráról alig lehet beszélni, majdnem minden előzmény nélkül megterem a magyar opera. Ezzel a magyar zenetörténet elébe vágott a természetes fejlődésnek, ami a művésztörténetben ritkaság, mert szimfónikus kultúra nélkül el nem képzelhető olyan összetett műfaj, mint az opera. Ez a kivételesség csak a magyar és a régebbi orosz zenekultúrában található.

*Erkel* Ferenc nemcsak megteremtette a magyar operát, de ő ennek a műfajnak mindmáig legnagyobb képviselője. A *Hunyadi László* és a *Bánk bán* ma is a világ bármelyik színpadán feltűnnék, annyira elevenen élő, művészi, magyar muzsika.

Tudjuk, hogy olyan hatalmas művészeti megnyilatkozás, mint az opera, nem támadhatott egy em-



ber ötletéből és munkájából. Évszázadokon keresztül száz és száz muzsikus dolgozott azon. A zeneművészetben is van kapcsolódó, folyamatos fejlődés. A szellem országútján akadnak aztán kiugró, nagy egyéniségek, akik több érdemre nézhetnek vissza *egyedül*, mint az előző idők halvány munkásainak százai. Ez az igazság *Erkel* teremtmény munkásságára is érvényes. A lángész tulajdonképpen legtöbbször összefoglaló, de mert a teremtmény gényűz küldötte, századokat ugorhat előre.

*Erkel* a verbunkos-stílus és a népdal anyagát az olasz és francia opera formáival összeegyeztette, hozzáadta a maga nagy lelkét s ezzel százszoros hatványra emelte az őt előző idők zenei eredményeit. Így alkotta meg első operáit, a stílusban még egyenetlen *Báthory Máriá-t* (1840) s így teremtette meg két nemzeti operánkat, a *Hunyadi László-t* (1844) és a zeneileg ennél is magyarabb: *Bánk bán-t* (1861).

*Erkel* érdemei akkor méltányolhatók kellően, ha felidézzük korát.

A magyar zeneélet az 1830-as években minden volt, csak nem magyar. Az arisztokrácia s a nagyobb vagyonú nemesség Bécsből vagy Prágából hozatott zenemestereket. Ezek főként a német, olasz, esetleg francia zenét ismerték. A magyar zenét *Bihari*, *Csermák*, *Lavotta* szerzeményei képviselték. A verbunkos, mint «nemzeti érvényűvé emelkedett népszerű zenestílus», csaknem az egész XIX. század uralkodó magyar zenéje. A népdal szerényen meghúzódott az árnyékában, mellyel senki sem törődött. Mikor *Mátray Gábor* 1833-ban megindította az első magyar szépirodalmi lapot, a *Regélő-t* és a

Honművész-t, mellékletként egy füzet dalt így bocsátott közre: «Eredeti magyar nóták, Rossini «Szevillai borbély» című és «A tolvaj szarka» című operáiból vett motívumokból». Ez az adat nemcsak mulatságos, de megdöbbentő is. Micsoda erő, micsoda zsenialitás kellett ahhoz, hogy a népdal egy évtizeddel később eljusson a Hunyadi László «Hattyúdal»-áig, vagy a Bánk bán «Szép szemeknek ragyogása» kezdetű kórusig!

A Hunyadi László és a Bánk bán sikerét alig lehet érzékeltetni. Titka abban rejlett, hogy a két operát Erkel és a nemzet együtt írta. A két operával Erkel a nemzet zenei lelkiismeretévé vált. Meg is tett mindent, amit egy lelkiismeretes ember nemzetéért tehet. Évtizedekig a Nemzeti Színház első karnagya, majd a m. kir. Operaház első zeneigazgatója, a Filharmóniai Társaság megalapítója és első elnöke, a Zeneakadémia igazgatója, az Országos Daláregyesület karnagya, — nem volt olyan zenei mozgalom, munka és eredmény hazánkban, amelyben haláláig részt ne vett volna. Működésének hatása kortársaira olyan erős és mély volt, hogy csaknem mindnyájan az ő szelleméből szakadtak ki. Így a magyar romantika másik két nagy neve, Mosonyi Mihály is benne gyökerezik, sőt bizonyos mértékig a Magyar Rap-szódíák hőse, Liszt Ferenc is.

Semmiféle művészeti értékelő összehasonlítás sem szerencsés a nagyok közt, de ha már összekerült ez a két név, nem hallgathatjuk el, hogy Liszt volt a nagyobb, de Erkel — a magyarább.

Erkel rendkívüli hatására csak egy adattal világítunk rá. A Báthory Mária bemutatója, vagyis 1840





ERKEL FERENC

PAPP V. TULAJDONA





óta, *Erkel* életében magyar szerzők 39 operát írtak. Ezzel szemben a *Báthory Mária* előtti időből 2 operáról tud a szakirodalom. *Erkel* halála óta az 1930. évig magyar szerzőknek 30 operája került bemutatásra. Ezeknek a fele *Erkel* hatását le nem tagadhatja. Nagy neveink közül *Hubay Jenő* (A falu rossza, Lavotta szerelme); gróf *Zichy Géza* (Rákóczi trilógia); *Szabados Béla* (A bolond, Mária, Fanni); *Dohnányi Ernő* (A vajda tornya); *Poldini* (Farsangi lakodalom); *Kacsóh Pongrác* (János vitéz, Rákóczi) — *Erkel* tudomásulvétele nélkül nem írhatták volna meg műveiket, vagy legalább is nem úgy írták volna meg, ahogy azokat ismerjük. Abban is *Erkel* működésének hatását látjuk, hogy a zenei folklóre-tudomány kifejlődött. Ennek a tudománynak *Erkel* életében híre-hamva sem volt. A népzenenek semmiféle rendszerezésére se gondoltak. *Erkel* az első, aki a népdalt és a népi dalt dallamösztönének erejével megbecsülte, felkarolta s művészetének tengelyévé tette. Ő volt a zenei folklóre-tudomány előtt az első magyar zenei folklorista.

*Erkel* művészete hosszú életének utolsó negyedében kissé hanyatlott, de az a fény, amely a *Báthory Mária*-ból kicsapott, máig világít. Az utolsó századforduló éveiben ez a fény a művészetünkön eluralgó nemzetköziség folytán, megtört. Volt idő, hogy félszázan sem ültünk az Operaházban egy március 15-iki *Hunyadi László* vagy *Bánk bán* előadáson. De a nemzet lelkiismerete csak tetszhalott volt, hamar rátalált a mellőzött zsenire s az utolsó három évtizedben, amint a nemzeti szellem erősödik, dédelgető szeretettel hódol *Erkel* géniuszának. Telve a színház, ha műveit adják.

*Erkel* szelleme örökösnek nemzete zenéje felett. A nemzet, — miként száz évvel ezelőtt — ismét rátalált zeneköltőjére, akinél *zenei nagyjai közül jobban nem szeretett és nem szeret egyet sem*.

Ez a szeretet az *Erkel* Ferenc halála óta eltelt félszázad legörvendetesebb tünete.

*Erkel* Ferenc halálának ötvenedik esztendőjében meghúzzuk a költővel az emlékezés harangját:

Minthogyha itt egy nemzet énekelne,  
S egekbe szálló hymnusza e karnak  
Istent dicsérné, hogy az Ő kegyelme  
*Erkel* Ferencet adta a magyarnak.

(*Kozma Andor*)

\*

Érintettük, hogy az *Erkel*lel foglalkozó irodalom szegény és megbízhatatlan. Szinte érthetetlen, hogy arról a mesterről, akinek magyar műzenénk megalapozását köszönhetjük, alig akad tudományos hi-telességű feljegyzés, értékelés, tanulmány. Még az *Erkel*-bibliográfiát sem állították össze, nemhogy komoly életrajzát tudnánk gyermekeink, vagy a külföldi érdeklődők kezébe adni. Sok magyar zenei nemtörődömség miatt szégyenkezhetünk, egyenetlen zeneéletünk hiányai sokszor kirívóak, de ahogy zenei irodalmunk *Erkel* Ferencsel bánt, fájdalmas és szégyenteljes.

Hogy a zárkózott, szűkszavú, sőt utolsó éveiben kissé reményvesztett *Erkel* életében műveiről és működéséről megfelelő monográfia nem jelent meg, — talán érthető, de hogy a halála óta eltelt ötven év alatt a vele foglalkozó irodalmi termés ennyire szegényes, — bántó igazságtalanság.



Erkel Ferenc halála után egy évvel megjelent Schunda V. József hangszergyáros kiadásában id. Ábrányi Kornél: *«Erkel Ferenc élete és működése»* című 220 oldalas «kultúrtörténeti korrajz»-a. Ez az egyetlen Erkel-monográfia félszáz év óta. Hiányos, rendszertelen mű. Felemlítjük ugyancsak Ábrányinak *«A magyar zene a XIX. században»* című munkáját, 1900-ban jelent meg, Rózsavölgyi kiadásában.

Mészáros Imre és Isov Kálmán: *«A Filharmóniai Társaság multja és jelene»* című 1903-ban megjelent albuma is foglalkozik Erkelrel.

Isov Kálmán: *«Erkel Ferenc»* tanulmányát találjuk a Budapesti Szemle 1910. évi évfolyamában.

Az *Erkel Ferenc emlékkönyv* 1910-ben, a Pátria Irodalmi Vállalat kiadásában jelent meg, 244 oldalon. Komoly, nagyobbarányú mű. Legértékesebb az Erkel-irodalomban.

Hézagpótló munka az 1921-ben a Nemzeti Múzeum kiadásában megjelent *Erkel Ferenc* levelezését tartalmazó kötet. Isov Kálmán állította össze. *«Zenei kéziratok jegyzéke»* című sorozat, I. Zenei levelek (első füzet).

Ezzel az utolsó ötven év Erkelről szóló jelentősebb irodalmát felsoroltuk. Összefüggő, értékelő mű nincs. De van egy 28 év óta közkézen forgó és zeneiskoláinkban is használatos, tankönyvnek készült *«Általános zenetörténet»*, melyben a szerző ennyit tanít Erkelről (II. kötet, 259. oldal):

*«Erkel (1810—1893) a magyar nemzeti opera első nagy mestere. A «Hunyadi László»-n kívül szerzője a «Bánk bán»-nak (más dalművei: «Báthory Mária», «Sarolta», «Dózsa György», «Brankovics György»,*

«Névtelen hősök», «István király») és szerzője a Kölcsey-féle Himnuszak. — Ez a három és fél sor is jegyzetként szerénykedik a könyvben, abban a könyvben, amelynek vagy 20.000-nyi sorából három és fél jutott *Erkel* Ferencnek.

Az irodalom *Erkel* Ferenc őseiről keveset tud. Id. Abrányi Kornél *Erkel-monográfiájában* erről csupán ennyit olvashatunk (13. oldal): «*Erkel* Ferenc 1810 november 7-én született Békésgyulán, ahol atyja a gróf Wenckheim-család uradalmi tisztje volt. Az *Erkel*-család már akkor ama polgári családok közé tartozott, melyekben a zene a lelki szórakozás, a magasabb műveltség s a finomabb műérzék kielégítésére szolgált. Ferenc atyja s nagybátyja, Rudolf is szenvedélyes művelője volt a zenének.»

Isoz Kálmán tanulmányában ezt írja (Budapesti Szemle, 1910. év):

«...akadtak, akik *Erkel* magyarságát kétségbe vonták. Pedig bizonyos, hogy *Erkel* Józsefet, az apát, Wenckheim gróf 1807 körül hozta magával Gyulára nem külföldről, hanem Sopron megyéből, a Dunántúlról. — A családban fennmaradt hagyomány szerint a legtávolabbi ősöket Hollandiában kell keresnünk; és valóban, 1711-ben indexre kerül egy egyházi kérdésekkel foglalkozó könyv, melyet I. C. van *Erkel* írt. Másfelől anyakönyvileg igazolt tény, hogy *Erkel* József felesége magyar nő: Ruttkay Klára volt, s kettejük fia Ferenc, tíz testvér között másodszülött gyermekük.»

Leginkább figyelemreméltó *Kereszty* István közlése, aki az *Erkel*-emlékkönyvben így ír (Emlékkönyv, 103. és 104. oldal):



«Újabb adat a magyarságnak sokszor bebizonyított beolvasztó erejéhez, hogy Erkelék — családjukban élő hagyomány szerint — Hollandiából származtak. Bellaagh Aladár tanár lelt egy pápai indexben hollandi nyelvű hitvitázó könyvet, amelynek szerzője I. C. van Erkel. Ez a «van» előszócska — írja Kereszty — nemességre vall, a műnek címe pedig arra, hogy a szerző — mint a megmagyarosodott család is — katolikus volt. (A könyv címe: «Protest van de Rooms-Catholyke Clergie der voornaemste steden van Zuijt-Holland...» Ez a könyv 1711 április 15-iki pápai dekrétummal került a tiltott könyvek bűnlajstromába.) A magyar opera megteremtőjének atyja, akinél régibb ősré a család nem emlékszik — írja Kereszty — a Wenckheim grófok mezőgazdaságát kormányozta; Németalföld a növénytermesztés klasszikus hazája, valószínű tehát, hogy ez alatt a szög alatt kell néznünk a család bevándorlását, illetőleg behívását és itt letelepültét. A grófi archivum talán nyújthat bővebb felvilágosítást.

A nagyapa, Erkel József (a gyulai plébánia anyakönyve «*Erkl*»-nek ismeri nevének írását), Gyulán a németek kántora és tanító volt. Wenckheim József gróf hozta magával Sopronból 1807—1808 táján és annyira szerette, hogy minden gyermekének keresztapja lett; második fiát, Jánost, jószágigazgatói állásba emelte, sőt ennek halála után egyik fiát, Jánost, találta apja méltó utódjának. (Erkel Terézia férje, Farkas Zsigmond is jószágkormányzó volt a gyulai, öccse, Béla, pedig a dobozi uradalomban.)

Erkel József megmaradt kántornak haláláig. Neje

nemes Ruttkay Klára volt. Legalább is 85 évet élt, 1865 május 7-én húnyt el.

Erkelék rendkívül szűkszavúak — folytatja Kereszty. — Ilyen volt a leghíresebb, legnagyobb családtag éppen úgy, mint a legnévtelenebb, mindig. Sem szóval, de még tettel sem iparkodott egyikük sem szolgálni a maga bárminemű érdekeit. «Történjék, ami éppen történhetik», ez volt az egész család életfilozófiája. Törtetni? A viláért sem!

Mindenekelőtt ezt kell tudnia az utókornak. Mert ez a fő kútfeje annak, hogy az Erkelekről egyáltalában oly keveset, szégyenletesen keveset tud a magyar kultúra, mely pedig végzetlenül le van kötelezve nemcsak Erkel Ferencnek, hanem családjának is.»

Az itt elmondott Erkelre vonatkozó származási adatok tévesek, mert néhány évvel ezelőtt levelet kaptam Kemény Lajos pozsonyi városi ny. főszámvévőtől, melynek kezdő sorai:

«A szerencsés véletlennek köszönhetem, hogy városi levéltárunkban XVII. századbeli Erkel-adatokra akadtam. E nyomon tovább kutatva, a plébánián, a gimnáziumban, kiderült az az eddig nem ismert tény, hogy Erkelék Pozsonyból származnak és régen magyaroknak vallották magukat.»

Kemény Lajos rövid idő múlva a Komáromban megjelent «Nemzeti Kultúra»-ban (1933. évf., 2. sz.) «Az Erkel-család pozsonyi származása» címen értékes tanulmányt adott közre. Összefoglalva ismertetem.

Kemény Lajos kutatásai után az irodalom több adata megdőlt. Megdőlt mindenekelőtt az, hogy az Erkel-



család idegen származású. *Nem! az Erkelek magyarországiak, pozsonyiak, magyarok.* A család hollandiai eredete nem fogadható el, mert az Erkel név a pozsonyi levéltár 1439—1491-ig használt telekkönyvében már előfordul. A fóliáns XXI. pagináján Péter Erkel háztulajdonos neve olvasható, aki ingatlana után minden karácsonykor tartozott a Klarissza zárdának 11 dénárból és egy élő tyúkból álló cenzust fizetni. Erkel Péter nevével 1506-ban ismét találkozunk Vogt Frigyes ispotálymester számadáskönyvében (a pozsonyi Szent László polgári ispotály irattárában őrzik), mely szerint Erkel Péternek a «Schuster-dűlőben» szülöje volt, mely után a Szt. László ispotálynak fizetett cenzust. Ennek az Erkel Péternek Pozsonyban több szülöje volt, módos ember lehetett. A szülőképés Erkelek neve a XVIII. század utolsó negyedéig megtalálható a pozsonyi telekkönyvekben.

Ezek szerint többé nem vitás, hogy az Erkelek Pozsonyból és nem Sopronból kerültek Békésgyulára. A pozsonyi telekkönyvekkel szemben álló, szájról-szájra adott homályos adat egy 1711-ben Hollandiában élt J. C. van Erkel nevű névrokonról, *kétszáz évvel későbbi*, mint a pozsonyi. Ilyen módon a családi hagyomány szétfoslott, de ha még valamikor beigazolódnék is, az a család, mely csaknem ötszáz éven át Magyarországon él: az magyar család, kiváltképpen akkor, ha ősük közül az utolsó ötöt — mint az Erkeleknél — az anyakönyvek magyar nyelvűeknek tüntetik fel.

Kemény Lajos tanulmányában felsorolja a XV. és XVI. századbeli Erkeleket. A XVII. századból nem talált az Erkelekről feljegyzést. Ez a további kutatás

feladata lesz, de nem valószínű, hogy a régi Erkel-család és az 1744-ben felbukkanó *Erkl* Mátyás szőlőműves közt fel nem található az összeköttetés. Valószínűtlen, hogy a régi-régi Erkel-családi adatok s a Szent Márton plébánia anyakönyveiben 1744-től megtalált rendszeres és sorozatos bejegyzések nem azonos családról szólnának. De ha így volna, akkor is becsesek a most közölt családtörténeti újabb adatok, mert hatvan évvel világítanak előbbre. 1744-től szakadatlan sorban megszerkeszthető a zenész Erkelek nemzetség-fája.

1757-ben esküszik meg *Erkl* Vilmos Handl Fülöp építőmester leányával. A férj neve mellett a foglalkozás rovatban «Musicus apud Notredamus» bejegyzés áll. Ő időrendben az *első muzsikus Erkel*. Vilmos három fia közül *József szintén muzsikus*.

József 1787-ben vette nőül Engl Zsófiát, Engl János György kelmefestő leányát. Négy gyermekük született. 1787 október 29-én született József, akit II. Józsefnek jelölünk. Atyja a pozsonyi iskolákba járatta. A «Primaria Schola Vernakula»-ban *Klein* Henrik volt a zenetanítója. Ez a II. József Erkel Ferenc apja. Így található meg a kapcsolat, hogy az apa, mikor fia számára jó zenetanítót keresett, miért vitte gyermekét az ősi családi Pozsony városába, a nagyhírű és kiváló *Klein* Henrikhez, Beethoven barátjához.

A pozsonyi bencések gimnáziumában négy osztályt végzett II. József az 1801–1804 években. Jól tanult és anyanyelvén atyja a magyart íratta be: «Ex lingua hungar, nativa ei est.»

I. Erkel József valószínűleg a Pálffy grófi csa-



lád révén jutott a Wenckheim grófok pártfogásába, akik fiát, a fiatal Józsefet, gyulai uradalmukba vitték, a német iskola kántortanítójának. Fiatalon házassodott. Ruttkay Ádám leányát, Klárát, vette feleségül. Kilenc gyermekük közül Ferenc 1810 november 7-én született.

Ferencet atyja maga kezdte tanítani. 1822-ben Pozsonyba vitte, a bencések gimnáziumának grammatikai osztályába. A tehetséges, nyílteszű fiú itt négy éven át kitűnően tanult. Száznolc osztálytársa között az első félévben magaviseletből prima, vallástanból huszonharmadik, tanulmányokból tizenhatodik, a magyar nyelvből és irodalomból huszonnegyedik eminens osztályzatot kapott, a második félév végén még tíz hellyel feljebb klasszifikálták és ezt az osztályozást megtartotta, sőt még javította is. *Nemzetiségét atyja magyarnak*, saját foglalkozását az első évben «Docens schola trivialis in Gyula», a második évben «musicus», a harmadik évben «notarius ibidem»-nek íratta be. E szerint tehát az elemi iskola vezetésén kívül zenét is tanított s az akkori szokás szerint a községi jegyzői teendőket is ellátta Gyulán.

*Erkel* Ferenc pozsonyi tartózkodása arra az időre esik, amikor a városnak a napoleoni háborúk óta szunnyadó zenei élete újból virágzásnak indul. Az egyházi zene magasabb színvonalra emelését *Klein* Henrik kezdi meg.

A pozsonyi zenészek olyan tekintélyes számban voltak már együtt, hogy a nyelvmesterekkel egyesülve, *Schodel* József kezdeményezésére, megalapíthatták 1817-ben a «Művészek és Nyelvmesterek Egyesület»-ét, amely ma is fennáll.

A fiatal *Erkel* Ferenc Pozsonyban mély és maradandó benyomásokat nyert, megismerkedett az úttörők műveivel, fejlődött, teremtett és műveiben a nemzeti ritmus plasztikus hangsúlyozásával rövidesen túlszárnyalta azokat.

Az *Erkel*-irodalom még nincsen kimerítve, talán az új adatok (különösen a genealógiai psychoanalitika szempontjából) a *zenei tehetség átöröklődése* tekintetében a kutatóknak újabb irányt mutatnak munkájának folytatására.



## SZÁZÉVES A HIMNUSZ ZENÉJE

Nemzeti imádságunk, a *Himnusz* zenéje száz esztendő. A szövege százhuszonegy. Mindkettő a nemzeti fellendülés idején született. Abban a korban, amikor a magyar nyelv kivirágzik, megépítik a Nemzeti Színházat, a Lánchidat, Széchenyi megalapítja a Magyar Tudományos Akadémiát, Petőfi lánglelke világít, a Szózat lelkesít, a Hunyadi László opera hódít s Liszt Magyar Rapszódiait írja. 1825-től 1849-ig olyan volt Magyarország, mint egy nagy kert, melyben piros-fehér-zöld színű virágok napról-napra nyílnak s pompáznak.

A *Himnusz* zenéje — csakúgy, mint másik nemzeti imánké, a *Szózat*-é — pályázat eredménye. A kettő közt egy év telt el. Egyik mű sem hódított egyszerre, lassan ment át mindkettő a nemzet vérébe. Az első években — mondhatni — csak helyi sikereket értek el, de mikor a megkínzott nemzet felett derengeni kezdett az ég, ez a két dallam kísért a világosságot.

Mindkét nemzeti imánk megszületése a lelkes magyarnak, Bartay Andrásnak, érdeme. Övé a kezdeményezés és megvalósítás s *Vörösmarty* Mihályé,

Egressy Béné, Kölcsey Ferencé, Erkel Ferencé a művészi kivitelezés tökéletessége s érte — a halhatatlanság koszorúja.

Bartay András 1843-tól 1845-ig a Nemzeti Színház igazgatója és bérelője volt. Rövid igazgatásához nagy érdemek fűződnek. Szigligeti Ede népszínműveit s a magyar operákat pártfogásába vette, jelentős pályázatok kiírásával erősítette és táplálta a magyar szellemet. A Himnusz pályázati hirdetésének szövege egymagában elismerésreméltóan jellemzi Bartay működésének lényegét. A *Honderű*, 1844 tavaszeli (március) 9-iki számában olvassuk:

«Miként tavaly, úgy ez idén is meggyőződése (a Nemzeti Színház igazgatóságának) az, hogy *a nemzeti színház' köréhez tartozik, költőink' jelesebb lyrai költeményeinek becsét minél inkább emelni, terjedését és életbe jutását a nemzetben elősegíteni*, s ezt leginkább elérhetőnek véli, ha az illy költemények ének és zenére tétetnek, s ezt évenként tenni szándékozván, ez évben ismét 20 arany pályadíjat tűz ki a legjobb népmelódiáért — *Kölcsey Ferencz koszorús költőnk', Hymnusára ének és zenekarra téve*. Ezen Hymnus olvasható Kölcsey összes munkái 1-ső kötetének 113-dik lapján. (A pályaművek beküldésének határnapja 1844-ki tavaszutó' 1-ső napja.)

Mindhárom rendbeli pályaművek tisztán és idegen kézzel leírva és lapozva, a szerző nevét magában foglaló jelíges levéllel ellátva, egyenesen alulírthoz küldessenek. Költ Pesten, télutó' (febr.) 29-én, 1844.

*Bartay András nemz. színházi igazg.»*

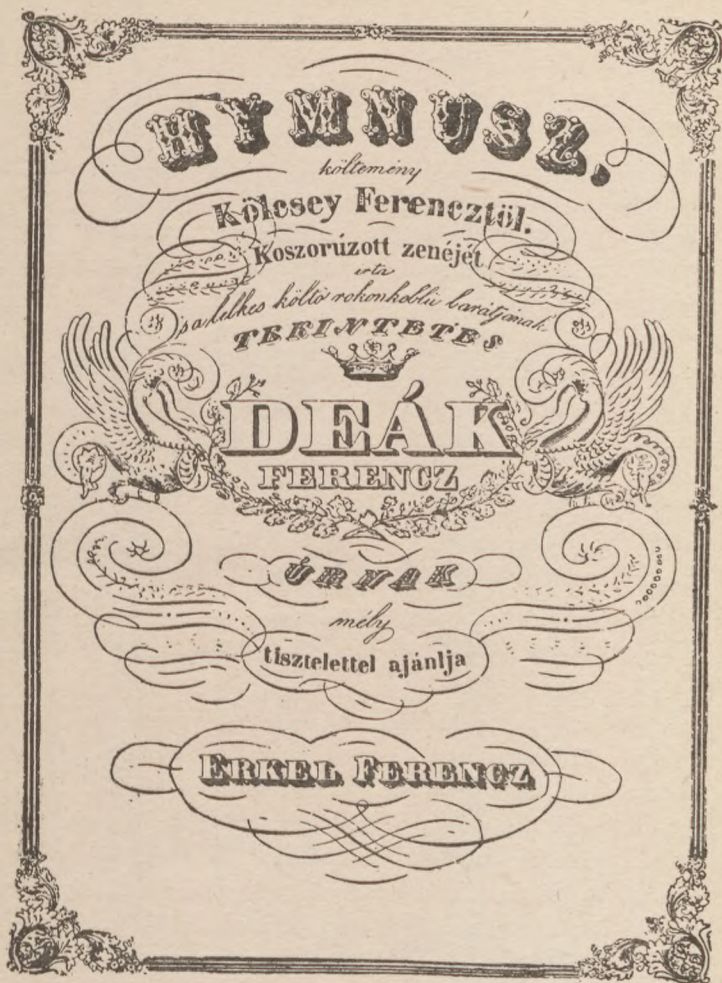




KÖLCSEY FERENC







A Hymnus első kiadásának címlapja.  
(Nemzeti Múzeum könyvtára.)

Bartay András az országépítő magyarok közül való volt. Széplakon, Abauj vármegyében, 1798-ban született, előkelő nemesi családból. Hivatalnoki pályára nevelték. Fiatalon a fővárosba került s huszonkét éven át egyik legtevékenyebb tisztviselője Pest városának. «Hivatala mellett mint szenvedélyes, tehetséges és alaposan képzett zenész, nemcsak zeneszerzéssel foglalkozott, hanem társadalmi téren is egyik harcosa a nemzeti zenének. Már 1829-ben több füzet népdalt adott ki saját költségén zongorára alkalmazva, mi akkoriban nem kis feltűnést okozott s nem kevés vállalkozási bátorságra mutatott. 1830-ban V. Ferdinánd király koronázási ünnepélyére pedig egy nagy koronázási misét írt, melyet Pozsonyban előadtak. 1834-ben adá ki «Magyar Apollo» című zeneelméleti könyvét, mely e nemben a legelső volt. 1836-ban «Aurélia» című operát írt, melyet a német színpadon adtak elő.

A pesti állandó magyar színház megnyitása után (1837), abban «Csel» című első magyar víg operával lépett fel.

József nádor névünnepére nagy vocál-misést s halála emlékére nagy oratoriumot írt, mely 1847. Pozsonyban saját igazgatása mellett elő is adatott. Az 1848-iki események után elhagyta hazáját s több évig Párizsban tartózkodott, hol több hangversenyt rendezett, sőt a «Theatre lyrique» számára balletteket is írt, melyek elég sikert arattak. Később Hamburgba költözött, hol szintén zeneszerzéssel foglalkozott. Ez időszakba esnek ily című nagyobb zene-költeményei, úgymint két oratorium: «Árpádok népe és Budavár ostroma a törökök alatt»; ezenkívül egy



magyar opera ily címen: «A magyarok Nápolyban.» Viszontagságos és sokat hányatott életének a halál Mainzban vetett véget 1856 okt. 4-én.» (Ságh József: «Magyar Zenészeti Lexicon» Budapest, 1879, 38., 39.1.)

Bartay neve a *Szózat* és a *Himnusz* zenéjének százados évfordulója idején mind jobban fényesedik.

A *Honderű* szépirodalmi, művészeti és divatlap 1844 tavaszutó (május) 18-iki számában olvassuk:

«Nemzeti színház. Kölcsey Ferenc koszorús köl-tőnk' *Hymnus*-ára ének és zenekarra téve, a leg-jobb népmelódiáért kitett 20 arany pályadíjra, a ki-tűzött határnapig következő jelíges pályaművek érkez-tek az igazgatóságához: 1. «Itt az írás, forgassátok érett észszel, józanon» Kölcsey. 2. «Ó boldog nép! az ég takargat téged. A csendes békesség lakik hazád-ban, örvendetes hang zengedez hegyedben.» 3. «Isten áldd meg a magyart! Jó kedvvel, bőséggel» Kölcsey. 4. «Szomorú a magyar nóta.» 5. «Mindegy az áldo-zat, ha nagy, vagy kicsiny, ha mindene az áldozónak» Kisfaludy. 6. «Szánd meg Isten a magyart.» 7. «Szen-teld, óh magyar! hazádnak kebled' szent érzelmeit.» 8. «Bár babérrel nem illettek, csak a gúnytól kímél-jetek» Egy régi író. 9. «Onérzet, te vagy a diadal-mas' bére, nem a díj» Kölcsey. 10. «Ha a próba nem használ, ártani nem fog.» 11. «Aki a széppel köti össze a jót, az bölcs, az igaz poéta. Ez dicső érdem, s ez az égi bélyeg a remek elmén» Berzsenyi. 12. «Onérzés, te vagy a diadalmas bére, nem a díj» Kölcsey. 13. «Minden pálya dicső, ha belőle hazádra derül fény» Kölcsey. Az eredményről annak idejében értesíttetni fog a t. cz. közönség. Pesten, tavaszutó' 5-kén 1844.

*Szigligeti, titoknak.*

A *Honderű* 1844 nyárelő (június) 22. számában olvassuk:

«Nemzeti színház. A Kölcsey Ferenc' *Hymnusára* érkezett 13 népmelódiai pályamű megbírálására, s az illetőnek a 20 darab arany pályadíj' odaítélésére az igazgatóság által következő t. cz. urak kérettek és nyertek meg; elnökül: Petrichevich Horváth Lázár, jegyzőül: Nádaskay Lajos, bíráló tagokul: Binder Sebestyén, Braeuer Ferencz, Kaiser Ferencz, Mátray Gábor, Schindelmeisser Lajos, Winkler Angelo, Vörösmarty Mihál és alulírt. Ezen t. cz. urak nyárelő' 15-kén összegyülekezvén, s a bírálathoz fogván, legnagyobb örömmel tapasztalák, hogy ez idei pályaművek közt több igen jeles találtak, s bírálaton aluli egy sincs. — A 20 darab arany jutalom egyhangulag az első szám alatti, a következő jeligés pályaműnek íteltetett oda: «*Itt az írás, forgassátok — Érett észszel józanon. Kölcsey*», mint a melly a mellett hogy magyar jellemű s a költemény szellemét leginkább megközelítő, a két főkivántatóságot is, t. i. a dallamegyszerűséget és hymnusi emelkedettséget legszerencsésebben megközelíté. E mellett dícsérettel megemlitendőknek íteltettek a következő pályaművek (13 közül hat.); a 3-dik szám alatti: 'Isten áldd meg a magyart Jó kedvvel bőséggel. Kölcsey'; a 4-dik szám alatti: 'Szomorú a magyar nótá'; a 6-dik szám alatti: 'Szánd meg Isten a magyart'; a 11-dik szám alatti: 'Aki a széppel köti össze a jót, az bölcs, az igaz poéta. Ez dicső érdem, s ez az égi bélyeg a remek elmén; Berzsenyi'; a 12-dik szám alatti: 'Önérzés, te vagy a diadalmas bére, nem a díj. Kölcsey' s végre a 13-dik sz. alatti: 'Minden pálya dicső, ha belőle



hazádra derül fény. Kölcsey' jelmondatuak. — Ezen népmelódiák, a nemzeti színház' ének- és zenekara által betanultatván, nem sokára elő fognak adatni; midőn a pályadíjnyertes és dícsérettel említett pályaművek' jeligés levelei felbontatván, a pályanyertesnek a díj is át fog adatni. Pesten nyárelő' 16. 1844.

*Szigligeti, titoknok.*»

Az egykorú tudósítások legjobban megvilágítják a *Himnusz* történetét. A Vahot Imre szerkesztésében megjelenő *Pesti Divatlap* című társadalmi, szépirodalmi és művészeti hetilap, melynek 1844-től 1846-ig (tehát éppen a Himnusz-pályázat idején) *Petőfi* volt a segédszerkesztője, — első és második számában így ír:

*Pesti Divatlap*, 1844 nyárhó (július) 1. hetében (1. sz.). «A Kölcsey „Hymnusz”-ának népmelódiájára, a szini igazgatóság által kitett 20 darab arany pályadíjt, classicus zenészünk, Erkel Ferencz nyeré el, a 6, dícséretre méltatott mű szerzői: Egressy B., Molnár, Travnyik, Éliás és Seiler (2 dolgozat szerzője). Ezen művek f. hó 2-kán adattak elő, ének- és zenekísérettel a nemzeti szinpadon szép számu közönség előtt.»

*Pesti Divatlap*, 1844 nyárhó 2. hetében (2. sz.)

«Nemzeti Színház.

Nyárhó 2.

*Tudtán kívül kém*, s felvonások előtt és után a Kölcsey «hymnusára» érkezett pályaművek előadása. — Miután a már e lapunkban említett 6, dícséretre méltatott hymnus-dalt az operai choris eléneklé, s

ezek közt *Egressy* Bénéit és *Travnyikét* leginkább megtapsolá; elvégre a játék után *Erkel* Ferencz pályanyertes műve adaték elő, melly *nemzeti szelleme, magasztos művészi kifejezése, s hathatós harmoniája által egyaránt kitűnő, de magán viselvén a hymnus szelleméhez alkalmazott templomi zene bélyegét, a nép ajkán viszhangra fog találni.* Ez alkalommal színpadunkon a titoknok egész ünnepélyességgel olvasá fel a műbírák jegyzőkönyvét és a rendezőség szinte ünnepélyesen bontogató fel a névrejti jeligés levélkéket.»

Még egy tudósítás:

*Pesti Divatlap*, 1844 nyárutó (augusztus) 2. hetében (6. sz.).

«*Sissói Imre* pozsonyi tudósítása júl. 28-áról. Júl. 28-án a városi redutteremben *Seyler Károly*, a „híres zongorász” hangversenyezett. Műsoron *Seyler* hymnusa is szerepelt, „*de biz ez Erkel melodiájához nem is hasonlítható*”».

Igy indult el a *Himnusz* útjára, de hosszú idő telt el, míg a nemzet közkincsévé, imájává vált. *Berzeviczy Albert* írja («Az abszolutizmus kora Magyarországon» II. köt. 416. l. 1925), hogy a *Himnusz* és a *Szózat* éneklése csak 1859-ben kezd hazafias szokássá válni. Tüntetnek vele összejeveteleken, sőt az utcán is.

A *Himnusz* születésének történetét leghitelesebben természetesen maga *Erkel* Ferenc mondta el. Családtagjai közül négytől (*Erkel* Gyula, *Erkel* István, *Erkel* Sári és *Erkel* Jenő) hallottam az *Erkel* Ferenc-től nekik átadott azonos szavakat. *Erkel* egyszerű,



szerény, puritán ember volt. Mindenik Erkel rendkívül szűkszavú — írja Kereszty István («Az Erkel-család krónikájához»). «Ilyen volt a leghíresebb, legnagyobb családtag éppen úgy, mint a legnévtelenebb — mindig; sem szóval, de még tettel sem iparkodott egyikük sem szolgálni a maga bárminemű érdekeit. «Történjék, ami éppen történhetik», — ez volt az egész család életfilozófiája; törtetni? a világért sem! — Mindenekelőtt ezt kell tudnia az utókornak» — amikor az Erkelekről ítélik.

A *Himnusz* keletkezésének történetét Erkel elmondta Gárdonyi Gézának s idők folyamán néhány más ismerősének is. Gárdonyi a nevezetes beszélgetést megírta (Fabó Bertalan: «Erkel Ferenc Emlékkönyv» 1910. 212. l.). Gárdonyi puritán természete az Erkelével vetekedett. Miért volna tehát történeti legenda (amint többen állítják) a *Himnusz* történetének Erkeltől hallott elmondása? Ha a zenetudomány az ilyen elbeszéléseket mellőzte volna, vagy mellőzné, anyagának jó hányadával szegényebb lenne és sok mestermű keletkezését homály fedné. Olvassuk el tehát Gárdonyi Géza szószerint idézett írását:

«Erkel elhallgatott, hogy kipihenje a huszonöt szót, amit egymásután mondott el. Aztán csendesebb hangon folytatta:

— Én nem pályáztam. Eszem ágába se volt, hogy pályázzak. A *Himnuszra* se pályáztam volna. Hanem egyszer az történik velem, hogy megfog az utcán, a lakása előtt Bartay.

Felhí és azt mondja odafenn:

— Írtál-e himnuszt?

— Nem. Nem is írok. Egressynek hagyom ezt az örömet. Neki az effélékben kedve telik.

— Hát ő megírta már?

— Nem tudom. Csak annyit tudok, hogy pályázik és engem megkért, hogy írjam át zenekarra. De napról-napra halogatja. Pedig most jut eszembe, hogy holnap már lejár a pályázat.

— És te nem veszed észre, hogy ez szándékosság?

— Micsoda szándékosság?

— Hát az, hogy neked eszedbe se jusson pályázni.

— De ha nem is akarok.

— Kell! Nem érted és nem érzed, hogy ez a pályázat nem a nyomorult aranyaknak szól, hanem az örökkévalóságnak? Amelyik dalt megjutalmazták, azt meg is szentelik. Egy hét múlva milliók ajka zengi vissza. És az lesz a dalok dala, az örökkévaló, a halhatatlan, a szerzőjével együtt.

Ezt mondva, — folytatta Erkel — betuszkolt engem a mellékszobába, ahol egy kopott zongora sárgállott. Odatett egy ív kótapapírost, melléje a szöveget.

— Csináld meg rögtön.

— De, bátyám, hova gondol! Nem szivar-sodrás az, hogy csak úgy rögtön.

— Meg kell csinálnod!

— Nem lehet. Késő már!

Felelet helyett egyet lépett. Kifordult az ajtón, s rám fordította a kulcsot. Még csak annyit hallottam, hogy: alászolgája.

Allok mint Nepomuki János. Hallom, hogy a



külső ajtó is csukódik, záródik. No, kutyateremtette: szépen vagyunk!

Csend van. Ülök és gondolkodok: hát hogy is kellene azt a himnuszt megcsinálni? Elém teszem a szöveget. Olvasom. Megint gondolkodok.

És amint így elgondolkozom, eszembe jut az én első mesteremnek a szava, aki Pozsonyban tanított. Azt mondta: fiam, mikor valami szent zenét komponálsz, mindig a harangok szava jusson először eszedbe.

És ott a szoba csöndességében megzendülnek az én fülemben a pozsonyi harangok.

Áhítat száll meg. A kezemet a zongorára teszem és hang-hang után olvad. Egy óra nem telik belé, megvan a himnusz, úgy amint ma ismerik.

Akkorra már visszajött Bartay is. Eljátszottam neki. Szépnek mondotta.

Hazamegyek. Leírom zenekarra. Másnap benyujtom.

Elérkezik a döntés napja. A színház ünnepi díszben. Mert, hogy szavamat ne felejtsem, nem választott pályabírák döntöttek, hanem maga a közönség.

Elkezdjük. A közönség figyelemmel hallgatja ezt is, azt is. De nem melegszik.

Végre az enyimre kerül a sor. Engem a harangszóra való gondolat annyira eltöltött, hogy a zenekari átiratban is harangszóval kezdtem.

Ez már előre hatott.

Az addigi dallamok mindenféle csiri-csári nóták; semmi mély érzés; semmi himnuszi szárnyalás. Az én dallamom egyszerre áhítatra kelt minden-

kit. Az arcok megmerevednek. A szemek megtelnek könnyel.

És alighogy az utolsó sor elhangzik, a tapsolásnak és éljenzésnek orkánja rázza meg a színházat.

Az enyim lett a dicsőség.»

Igy mondta el Erkel a Himnusz keletkezésének történetét s így írta meg azt Gárdonyi Géza. Erkel vagy Gárdonyi tévedett. A Himnusz pályázaton választott pályabírák döntöttek, a közönség lelkesedése csupán megkoszorúzta a pályabírák ítéletét.



## AZ ISMERETLEN ERKEL

«A magyar szellem történetének egyik legjelentősebb korszaka a múlt század első fele, melynek legszebb adománya a nemzeti öntudat politikai, társadalmi, gazdasági, irodalmi és művészeti téren való újraébredése.

Zeneköltészetünk felemelkedésének is döntő korszaka volt a múlt század első fele s ebben a vezetőszerpet a magyar társadalomra is bámulatos hatást gyakorló *Erkel* Ferenc játszott.

A politikai, irodalmi és művészeti magyar romantika teljes kibontakozásával esik egybe *Erkel* Ferenc fellépése.

Operáinak szelleme hiánytalanul magán viseli a kor magyar romantikájának hangulatát. Érdemes megállapítani, hogy *Erkel* tudatosan igyekezett felhasználni népzeneink egyes dallam-motívumait és hangulatban, érzésben sikerült hűen kifejeznie e korszak magyarságának lelkiállapotát. Meg kell gondolnunk azt is, hogy *Erkel*nek magának, minden komolyabb zenei előzmény, illetőleg hagyomány nélkül kellett utat törnie a magyar opera megteremtése terén.

Bármely oldalról is nézzük *Erkel* munkásságát s bármily szempontból is értékelik munkásságának

eredményeit, mindenképpen a legnagyobb elismerés és őszinte hála hangján kell Erkel Ferencről megemlékeznünk. Semmi kétség nem fér ahhoz, hogy ő a magyar opera alappilléreinek lerakója. Igen nagy érdemeket szerzett azzal is, hogy a Filharmóniai Társaságot 1853-ban megalapította. Ezeknek a filharmóniai hangversenyeknek ő volt a karmestere, művészeti vezetője és szellemi irányítója. De igen eredményesen működött, mint a Liszt Ferenc elnökletele alatt létesített Zeneakadémiának első igazgatója és «zongorakiművelési» tanára is. Legnagyobb jelentőségét azonban mégis nemzeti imánk, a *Himnusz*, megjelenésében kell látnunk. Az «Isten, áldd meg a magyart» hangjainál minden magyar egynek, elválaszthatatlannak érzi magát. Erkel Ferenc a Himnusz akkordjaival lépett be a minden magyarok szívébe s ezzel biztosított magának helyet a magyar örökkévalóságban.»

Ezeket a szavakat Szinyei-Merse Jenő mondta el, Erkel Ferenc halálának félszázados emlékünnepe.

\*

A zenetörténetből több olyan zeneműről tudunk, amelyet emberöltőkön át senki sem hallott, mert egyetlen példány sincs belőlük, elvesztek vagy lapanganak.

Erkel Ferenc művei közül nem egyet ért ez a sors. Erkelről a zenetörténet azt tudja, hogy a *Himnusz*-t, nyolc operát, egy szimfónikus nyitányt, néhány népszínműhöz kísérőzenét és karműveket írt. De írt még mást is. *Hegedű-darabot, zongora fantáziákat, sőt nótát is.* Ezekről a zenetörténet nem tud,



vagy megbízhatatlan közléseket ad. Erkel műveinek hiteles számadója nem volt, sőt szégyenünkre, ma sincs.

Hat ismeretlen vagy elfelejtett Erkel-művet gyűjtöttünk össze.

Az elsőnek címe:

### HATTYÚDAL

Hunyadi László című Operából  
zongorára  
szerző és

Brassai Samu

Barátjának ajánlá

Erkel Ferenc

a nemzeti magyar Színház első karnagya

Wagner József sajátja  
Pesten

Ez a kóta a *Hunyadi László* «Hattyúdal»-ának első kiadása. A Nemzeti Múzeum könyvtárában pihent évtizedeken át.

Erkel kiváló zongoraművész volt, mesteri készsége ebből a művből is kitetszik. Értékes zongorafantázia. Hangversenydobogóról sohasem hallottuk, mintha meg sem írta volna Erkel Ferenc. Dallamát az operából mindenki ismeri, de a mű ebben a formájában csaknem ismeretlen, mindenesetre elfelejtett.

A «Hattyúdal» a *Hunyadi László* opera negyedik felvonásának bevezető zenéje. A dalmű börtönjelenetének magyar zenekari kesergője. Tulajdonkép-

pen szabad fantázia. Hullámzó érzések, egy megalázott magyar szív rezdülései sírnak, reménykednek a szeszélyesen torlódó, hol nekilendülő, hol ellassuló ütemekben. Búcsú az élettől, búcsú a szerelemtől, eltemetett vágyak, tervek, remények, megölt érzelmek, aztán hit, bizalom, vigasz váltakozik a dallamokban, mint a siralomházban ülő szívében a könny és a remény.

A régi kóta ajánlása Brassai Sámuelnek szól, a nagy polihisztnak, aki kitűnő és szenvedélyes zenész volt. Erkelnek «legrégibb és legállandóbb» barátja, amint Erkel jubileumára (1888) írt levelében mondta magáról. Tíz évvel idősebb Erkelnél s három évvel túlélte a magyar opera nagymesterét. Kölcsönösen sokat tanultak egymástól. Kolozsvárott elválhatatlanok s mikor Erkel Pesten működött, évtizedeken át talán egyetlen Erkel-hangversenyről sem hiányzott. Elutazott egy-egy zenemű meghallgatásáért Kolozsvárról Berlinbe, Münchenbe, Bécsbe. Többször láttam fel-tűnő, magas, szakállas, tiszteletreméltó alakját a budapesti hangversenyeken. Egyik ilyen alkalommal méltósággosan tapsolt a fiatal Dohnányi Ernő később világhírt szerzett kiváló művének, *c-moll zongorás-ötösé-nek*.

\*

Évekkel ezelőtt egy zongorakótát kaptam Erkel Ferenc unokájától, *Erkel Jenőtől*. Idegen, megtévesztő címlapba burkolva. Az Erkel-hagyatékából került elő. Rajta fakó tintával felírás: «Bülow. Hunyadi.» Rájöttünk, hogy Bülow *Hunyadi László* zongorafantáziája. Hiteles és pontos címdala:



MARCHE  
heroique  
d'apres  
des motifs populaires  
hongrois.  
Paraphrase brillant  
pour  
piano  
par  
H. G. de Bülow  
Pest  
Rózsavölgyi és Társa  
kiadása.

A fantáziáról a *Zenelap* (1894. II. 20.) ezt írja:  
«Bülow Budapesten legelőször 1851-ben volt és hazánkat Liszt meghívására kereste fel. A művészek ösztönével szerette dallamaink gazdagságát és rövid ittléte alatt vetette papírra azt a bámulatosan átírt magyar ábrándot, melyben a Rákóczi-, Hunyadi- és Klapka-indulók páratlan kontrapunktirozással kapcsolódnak egymásba.»

A kótán évszám nincs, de bizonyos, hogy a zongoraművet Bülow 1851-ben írta és jelentette meg a Rózsavölgyi-kiadónál. Nem találunk feljegyzést arról, hogy Bülow Hunyadi-induló fantáziáját a szerzőn kívül valaha is játszotta volna valaki. Magyar- és idegennyelvű lexikonok sem tudnak semmit a műről. A kóta példát mutat arra, miként kallódhatnak el a zeneművek.

Ma már kevesen tudják nálunk, hogy ki volt Bülow? Zongoraművész, karmester, a korabeli zene-

életnek egyik legkimagaslóbb vezéralakja. Liszt Ferenc nagy tanítványai közt is talán a legkiválóbb. Liszt leányának, Cosimának, első férje. Bülow többször járt hazánkban. Először 1851-ben, aztán 1853-ban. Ekkor Pozsonyban és Sopronban is zongorázott. Pesten a Nemzeti Színházban és a Tigris-szálló termében tartotta hangversenyét. Harmadszor 1865-ben járt Pesten, innen eljutott Liszttel Szekszárdra, Esztergomba s 1872-ben, 1876-ban, 1881-ben és 1884-ben hangversenyezett még Budapesten. Változó, de mindig komoly sikerrel. Pesti barátai közé tartozott Kertbeny Károly, Doppler Ferenc, Dunkel János, Volkmann Róbert és Erkel Ferenc.

A Hunyadi László-induló zongorára való feldolgozásának, alkalmoszerűségének külső körülményeit nem ismerjük, de megvilágításul érdemes elolvasni a *Zeneirodalmi Szemle* (1895. I. 25.) kis cikkét. Címe: «Rákóczi-induló és a cenzúra.» Alcíme: «Egy ismeretes ismeretlen naplójából». Az «ismeretes ismeretlen» alighanem id. Ábrányi Kornél.

«Bülow 1851-ik évi pesti tartózkodása alkalmával Erkel «Hunyadi» indulóját zongorára átírta és szellemes módon beleszőtte az akkor üldözött Rákóczi-induló egyik motívumát, még pedig akként, hogy azt a balkéznek osztotta be. Cenzúra lévén, az akkori kiadók még a zeneművek kefelenyomatát is kötelesek voltak a nyomtatási engedély elnyerése céljából a rendőrségnek bemutatni. Ez megtörtént a Bülow-féle zongora átíráttal is. A cenzor egy nyersmodorú, mindenki által rettegett pap volt, aki nagyon művelt ember lehetett, de a zenéhez, mint a következők tanúsítják, édeskeveset értett. Elolvasta (?) a művet



s megadta a kinyomatási engedélyt. Mialatt ez megtörtént, Bülow már elutazott volt, én azonban megígértem neki, hogy a darabot megjelenése után nyilvánosan eljátszandom. Erre csakhamar nyílt is alkalom s én előadtam az indulót, természetesen a szerző intenciójának megfelelően, balkézzel a Rákóczi-thémát erősen kiemelve s örvendő, hogy mily hatást fogok kelteni a forradalmi dallammal! De alig, hogy végeztem, már jött a Szt. Hermandad egy rendőrbiztos képében s barátságosan intett, hogy kövessem őt. A rendőri hivatalban azonban éktelen lármával fogadott az én Albá-m, rám rivallva: «Maga szerencsétlen, mit merészelt? Maga a Rákóczit improvizálta!»

Minden mentegetődzésem, hogy az eljátszott darab a cenzúra kezéből került ki, hasztalan volt s csak befolyásos pártfogómnak köszönhettem, hogy merész vállalkozásomért fogsággal nem büntettek meg.»

A mű szellemes, virtuóz zongoradarab. Az ellenpontozó művészet egyik figyelemreméltó példája. Ute-meiben a Rákóczi-induló töredékei hol itt, hol ott bukkannak fel s kapcsolódnak az uralkodó Hunyadi-indulóhoz. (Közben megjegyezzük, hogy a Zeneirodalmi Szemle idézett közlője téved, mert a Klapka-indulót Bülow nem dolgozta fel zongoraművében.)

\*

A Dózsa György dalműből feldolgozott átirat nem ismeretlen, de elfelejtett kóta. A *Zenészeti Lapok* 1867 január 6-iki számának mellékleteként jelent meg, tehát három hónappal a bemutató előtt.

Címoldala:

RÓZSA VÉGBÜCSÜJA

magándal

«Dózsa György» című dalműből

4-dik felvonás 9-ik jelenet

szerző és zongorára átírta

Erkel Ferenc.

Énekli

Pauliné Markovits Ilka.

A *Dózsa György* sorrendben Erkel ötödik operája. Szövegét Jókai azonos című drámájából *Szigligeti* írta. Mindössze tízszer játszották a régi Nemzeti Színházban. A tárgy feldolgozása nem volt szerencsés s az akaratlan wágneri hatás nyűgözte Erkel szellemének magyar szárnyalását. De zenei szempontból hódító részleteket találunk a dalműben. Ilyen például Rózsa, a fő hősnő, szerelmi boldogságának ecsetelése, megható haldoklása. Drámai erő feszíti a zongorát, Rózsa búcsúzkodó magándalát, villámlás, menydörgés, vihar kíséri a színpadon. A zongoraművész s a zenedramatikus Erkel ereje fogott össze ebben a hangszer-fantáziában.

\*

Erkel Ferenc nyomtatásban fennmaradt első szerzeménye: Erkel és Vieuxtemps: *Magyar fantáziája*. Hangversenykrónikánk tanúsága szerint a kompozíció 91 évvel ezelőtt hangzott el utoljára nálunk. Eredeti címe:



DUO BRILLANT  
en forme de Fantasia  
sur des aires hongrois  
concertant  
pour  
Piano et Violin  
dédié  
a Madame la Baronne  
Fery D'Orczy  
née Comtesse de Pejacsevich  
par

F. Erkel, et H. Vieuxtemps

(Magyarul: *Magyar fantázia zongorára és hegedűre.*)

E mű kótája ritkaságok közé tartozik. A mainzi Schott zeneműkiadó cég jelentette meg, és pedig két egymásutáni kiadásban. Ilyen külföldi kótasikerben kevés magyar mű részesült. Vieuxtemps külföldön jártában is állandóan játszott. Olyan népszerűvé vált, hogy első kiadása pár hét alatt elfogyott. Ma a második kiadás példánya is ritkaság számba megy.

Vieuxtemps nevét a magyar közönség ismeri, hatásos hangversenydarabjait ma is játsszák. Virtuóz játéka lázba hozta Pestet, amit az is mutat, hogy négy hét alatt nyolc koncertet rendezett Erkelrel együtt a fővárosban, sőt nagyobb vidéki városainkat is felkereste.

Vieuxtemps a francia (belga) hegedűiskolának vezéralakja. Ez az iskola a külső mutatóságra, csillogásra, könnyedségre fektette a fősúlyt. Vieuxtemps

művei a virtuóz-irodalom legjobb termékei közé tartoznak. Hat hegedűversenye közül a *d-moll* legelterjedtebb, de az *A-durt* és az *E-durt* is többször hallottuk idők folyamán, főként és emlékezetesen Kubelik előadásában. Vieuxtemps nevét az a magyar szín is díszíti, hogy tanítványa volt Hubay Jenő, aki később barátja és segítőtársa, bizalmasa s művészeti hagyatékának Aggházy Károllyal együtt rendezője.

A nagy francia mester Pesten könnyen rátalált Erkelre, a kiváló zongoraművészre. Akkoriban szokás volt, hogy a világjáró hangversenyezők együtt működtek a helybeli művészekkel s ahol őket szívesen fogadták, a dobogón az illető nemzet zenéjével kedveskedtek a közönségnek. Így született meg Erkel és Vieuxtemps *Magyar Fantáziája*. A mű mutatja Erkel magyar szellemét és zongoraművészi nagy készségét. Vieuxtemps csillogását is megrögzítette a kóta. A dallamok eredetiek, feldolgozásuk: *variációs fantázia*. Széles, rubátószerű bevezetés után az első, majd a második témához fantázia modorban felépített változatok kapcsolódnak, majd a második téma feszegettebb, kötöttebb formájú variációi következnek s friss Fináléval (Presto) végződik a mű.

A Magyar Fantázia bemutató előadása 1837 február 26-án volt. Erkel kísérte Vieuxtempst. A hangversenyről a Honművész ezt írta:

«Erkel úr által magyar themákra szerzett igen csinos változatokat játszott a szerző úr fortepianón s Vieuxtemps úr hegedűn orchestrum kísérete mellett. Nem is említjük a zajos tapsokat, melyekben a versenytagok úr ma ismét részesült. A terem tele volt hallgatókkal.»



Vieuxtemps 1837-ben még hét hangversenyt adott Pesten. Az elsőt 1837 február 14-én «a városi kisebb teremben», ezen Erkel már közreműködött; a másodikat 1837 február 21-én a «városi kisebb táncteremben»; a harmadik a *Magyar Fantázia* bemutatása; a negyediket 1837 március 2-án a Városi (német) Színházban, Tábornszky János első hegedűs javára; az ötödiket 1837 március 7-én a nagy redoute teremben «a pesti jótékony asszonyi egyesület és vakok intézetének jövedelmére»; a hatodikat 1837 március 12-én Budán (erről közelebbit nem tudunk); a hetediket 1837 március 15-én a Városi (német) Színházban, (Pfeiffer Antal fuvolás javára); a nyolcadikat 1837 március 19-én, ugyancsak a Városi (német) Színházban Wagner József gordonkaművész javára. «A már néhányszor hallatott magyar témákra írt változatokat játszotta Erkelrel.» Ezeken a hangversenyeken mindig Erkel volt a társa Vieuxtempsnak.

Hat év múlva, 1843-ban is járt Pesten Vieuxtemps. Január 27-én hangversenyt adott a Nemzeti Színházban. Műsorán állott Erkel és Vieuxtemps «Mezei bokrétája» — amint a műsor nevezte —, vagyis *Magyar Fantáziája*.

\*

A Nemzeti Zenede 1942—43-as Évkönyvében «Erkel Ferenc „Kemény Simon” operája» címen értékes tanulmányt közölt, mely szerint Erkelnek nem 8, hanem 9 operája van, (az «Erzsébet» című, úgynevezett «dízoperá»-t nem számítva, mert azt a Doppler-testvérekkel együtt írta s alkalmi munka). Az opera címe: *Kemény Simon*. Fiatalabbkori mű. Szövegkönyvét Jókai Mór írta, 1853

körül. A szövegekönyv a Jókai-összkiadásban megtalálható s maga Jókai is említette a jubiláló (1888) Erkel köszöntő beszédében. «Egy félszázados életpályán mint stádium-mutató emlékkövek állanak Erkel megalkotott művei... S az emlékkövek sora még nincs bezárva. A szent láng még nincs kialvó félben. Unnepelt zeneköltőnk most is egy új zenemű alkotásában lelkesül, amelyhez *egyszer, valamikor ifjú fővel én írtam a szöveget. A darab hőse Kemény Simon, a címe «Immetullah»*. (Immetullah ugyanis az opera hősnőjének neve s az irodalomban az opera mindkét néven szerepel.)

A szövegekönyv tehát megvan. De hol a zene? Nem tudjuk, legjobb esetben lappang, ha meg nem semmisült. Kutatjuk tovább, mert a Zenelap szerint (1893 november 14.) «Erkel Ferenc zenei hagyatékában több apróság között *egy teljesen befejezett dalmű zongorakivonatát találták*, melyet az agg mester súlyos betegsége miatt már nem hangszerelhetett meg.»

A *Kemény Simon* rejtélyes sorsú operájából egyetlen részletet ismerünk, *Immetullah* románcát. Ez nyomtatásban fennmaradt. «Eperjes, Nagykároly, Torockó tűzkárosultjainak felsegélyezésére» Jókai szerkesztésében *Segítség!* című díszalumban jelent meg, melynek zeneműmelléklete (Magyar Nemzeti Múzeum Orsz. Széchenyi Könyvtára) a *Románc*-ot tartalmazza. Szövege ez:

A boldogságot én  
Nem ismerem —  
Boldog Damaskus rózsá berkein



Ki jára ott?,  
 Hafiznak sírján, melyre rózsza hull,  
 Ki álmodott?,  
 Ki fürde Gangesz kék hullámiban,  
 Pihent a pálma édes árnyiban?  
 Én jártam, én pihentem, én fürödtem ott!  
 — A boldogságot én nem ismerem,  
 nem ismerem, nem ismerem.»

\*

Az 1910-ben megjelent «Erkel Ferenc Emlékkönyv» 107. oldalán («Az Erkel-család krónikájához») Kereszty István, közelmúltban elhunyt, érdemes zenei írónk ezt közli: «Van Erkelnek egy magyar dala, Blahánénak írta: első szövegsora: *«Késő ősznek hideg szele...»* Megjelent egy háromkötetes műben, melynek címlapján az örökifjú énekművész neve is szerepel. Erkel családjának adata; másutt semmi nyomára nem akadtam» — írja Kereszty. Majd folytatja: «Ki tud erről a dalról? Kinek van meg? S ki olyan önzetlen tisztelője akár a halhatatlan zeneköltőnek, akár méltó tolmácsának, hogy a ritkaságszámbamenő zeneművel örök megőrzés, vagy éppen sokszorosítás végett a nemzet szellemi kincsesházának, a Magyar Nemzeti Múzeumnak, átadja?!»

A Kereszty által pongyolán meghatározott «háromkötetes mű» címe: «*A Tolonc. Tóth Ede pályanyertes népszínművének összes kedvelt dalai. Énekhangra zongorakísérettel alkalmazta Erkel Gyula. Budapest, Táborosky és Parsch kiadása.*» A dal a füzet 5. száma. *Dallama Erkel Ferencé*, amint a kiadvány jelzi. Ezenfelül nem tehető fel, hogy Erkel Ferenc ne tiltakozott volna a dal szerzősége ellen a meg-

jelenéskor, hiszen 1876-ban, a *Tolonc* bemutatása idején (május 26.), alkotóerejének teljében volt s még 18 évig élt és működött. De a hitelesség nem vitatható azért sem, mert a *Tolonc* dalait Erkel Ferenc fia, Gyula, alkalmazta színpadra, tette le zongorára a kiadvány számára. Erkel Gyula apjának több munkájában mindig a fiú gondosságával működött közre.

Az Erkelről szóló megbízhatatlan irodalomban azt is olvastuk, hogy Erkelnek a «*Késő ősznek hideg szele...*» kezdetű az egyetlen magyar nótája. Ez nem áll, mert Erkel Ferenc 7 színpadi műhöz írt kísérezénét, vagy betétszámokat. A hét mű a Nemzeti Színház Múzeumában levő anyag szerint:

1. *Kalandor*. Pilisi Ney Ferenc népszínműve. Színre került 1844 február 24.

2. *Egy szekrény rejtelsei*. Szigligeti népszínműve. Színre került 1846 február 28.

3. *Két pisztoly*. Szigligeti népszínműve. Színre került 1844 március 9.

4. *A zsidó*. Szigligeti népszínműve. Színre került 1844 július 27.

5. *Nemesek hadnagya*. Kovács Pál drámája. A dalok szövegét Czuczor Gergely írta. Színre került 1844 augusztus 22.

6. *Rab*. Szigligeti színműve. Színre került 1845 június 2.

7. *Salvator Róza*. Degré Alajos melodráma. Színre került 1855 december 29.

A 7 színpadi műben összesen 48 rövidebb-hosszabb dallam rejtőzködik. Tudományos tisztázásra vár, hogy ezekből melyik és mennyi a hiteles Erkel-dallam.



Feltehető, hogy több népszerű nótánknak Erkel Ferenc a szerzője, mert életének 20-as, 30-as éveiben nótá-zongorázásáról tudunk, mindig vonzotta őt a népdal, a nóta, a magyar dal, hiszen 66 éves korában nótát írt Blaháné számára a *«Késő ősznek hideg szele...»* kezdetűt.

A nóta szövegét *Tóth Ede* írta (*«Tóth Ede művei. Aigner-féle kiadás I. kötet»*).

«Késő ősznek hideg szele csapkodja arcomat,  
Egy-egy hulló hervadt levél mutatja sorsomat.  
Megsárgulok, elhervadok én is nem sokára;  
És ráírják, hogy «itt nyugszik» sírom fejfájára.

Jaj, de még a temetőnek nincsen oly mély sírja,  
Amely az én bánatomat eltemetni bírja.  
Visszajár az éjfél táján ahhoz a legényhez,  
Aki miatt hasonlítok ősi falevélhez.»

A *«Segítség!»* című díszalumból közöljük a nóta zenéjét, Erkel Gyula zongoraletétjében:

V.  
Késő ősznek hideg szele.

Andante. Erkel Ferencől.

Ének.

1. Késő ősznek hideg szele.  
2. Jaj de még a te me-tőnek

Zongora.

csap - kod - ja ar - czo mat, Egy - egy bul - ló  
nín - esen oly mély sir ja. A mely az éu

her - vadt le - vél mu - tat - ja sor - so - mat.  
bá - na - to - mat el - te - met - ni - bir - ja.



Meg - vár - gu - lok, el - her - va - dok én is nem so -  
 Vis - sza - jár az éj - fél tá - jon ah - hoz a le -

*pp*

ká - ra, És rá ir - ják, hogy „itt nyug - szik“  
 gény - hez, A ki mi - att, ha - son - li - tok

*pp*

ej - rom fej - fá - já - ra.  
 Ó - sai fá - le - vél - hez.

*pp*

*Cimbalom.*

*dim.*

*pp*

## A SZÓZAT SZÁZÉVES ZENÉJE

(Emlékezés Egressy Bénire)

A *Szózat* zenéje száz éves. Egy dallam életében nem nagy idő, de benne zeng az évszázadok sora. Tizenkilenc üteme a magyar mult, a magyar jelen és a magyar jövő. Muzsikáló szimbólum. «Fájdalmaink enyhítője, örömeink gyarapítója, a nemzet béke- és hadidala s imádsága.»

Szent melódia! Költői: *Egressy Béni és Vörösmarty Mihály.*

\*

*Egressy Béni* első teljesebb életrajza:

*Egressy Galambos Béni* Borsod vármegyében, Sajókazincon született 1814 április 21-én. Atyja *Egressy Galambos Pál* ref. lelkész, anyja *Juhász Julianna*. Az *Egressy-család* 1639-ben nemességet kapott. A család teljes neve: *Egresi és Galambos Egressy*. *Egressy Páléknak* hat gyermekük volt. Köztük *Egressy Gábor*. A magyar színészet történetének egyik leg-  
ragyogóbb neve. Művészete a magyar színjátszás legnagyobb magaslatát érte el.

Az *Egressy-fiúk* atyja mennydörgő hangú, kiváló szónok volt, figyelemreméltó zenei tehetséggel.





VÖRÖSMARTY MIHÁLY



me  
ját  
fo  
ko  
kó  
let  
let  
18  
ze  
tag  
su  
bö  
Kö  
tan  
gy  
me  
én  
go  
lel  
lán  
dát  
va  
ját  
cze  
tru  
jél  
az  
ér  
gy  
inc  
ve



megáldva. Hegedűn, fuvolán és zongorán ügyesen játszott. Béni iskoláit otthon, majd Miskolcon a református gimnáziumban 1823—1829-ig és Sárospatakon 1829—1831-ig járta. Sárospatakon a gimnáziumi kórusban tenorista. Atyja korai halálával abba kellett hagynia a tanulást. Segédtanító, «praeceptor» lett 1831-ben az abauj-vármegyei Szepsiben, majd 1833 elején Mezőcsáton. Bátyja, Gábor, a báró Berzeviczy igazgatása alatt működő kassai színtársulat tagja volt. Béni testvérét meglátogatva, a színtársulatnál ragadt s 1834-ben beállt kardalosnak. Különböző színtársulatokkal bekóborolta a magyar vidéket. Közben szorgalmasan bővítette ismereteit. Megtanult olaszul, franciául és németül. Latinul már gyermekkorában tudott. Megismerkedett a zene elemeivel, tenorista szeretett volna lenni. Hogy az olasz énekművészetet elsajátítsa, 1838-ban Milánóig gyalogolt kardalos társával, *Havi Mihállyal*. «E célra lelkesülten, dagadó kebellemel, lohadt erszénnyel indulánk» — írta volt. — «Balaton-Füreden megállapodánk egészségi tekintetből, de a nagyobb rugó más vala: a nagy útra pénz kellett. Mi megrohantuk a játékszínt, hangversenyt hirdeténk. Felcizfráztuk a czédulát minél ritkább virágokkal, falusi színésztruppok szokásaként, hogy mindenki szemébe tűnjék, s a művészetet, bocsásson meg annak Isten, most az egyszer pénzkeresési móddá törpítők. Célunk elérésére ezenfelül némely lelkesek még 80 forintot gyűjtének, s mi azt gróf Ráday Gedeontól, mint az indítványtevőtől — tisztelet neki s a többinek — átvévők.»

Egressy Milánóban nélkülözések közt másfél évig

szorgalmasan tanult. Szép hangja volt, de «ezüst-csengésű hangját elveszté; e vesztes fájdalma együtt élt vele.»

Milánóból hazatérve, 1843-ban a Nemzeti Színház kardalosa lett és zeneszerzéssel foglalkozott. A Nemzetiben bátyjával, Gáborral együtt színészkedett, kisebb szerepeket játszott, de mint színész meg sem közelítette testvérét. 1838-ban operaszöveget írt Erkel Ferenc számára, a *Báthory Mária*-t. 1843-ban ugyancsak Erkel számára a *Hunyadi László*-t és 1850 végén a *Bánk-bán*-t. Ennek bemutatóját nem érte meg, mert Erkel operája a politikai helyzet miatt tízenegy évig a zeneköltő fiókjában hevert. A *Hunyadi* és a *Bánk-bán* nemzeti operánkká vált. Művészi együttérzésben élt a nagy zeneköltővel s írókészségével — ha nem is volt jeles költő — ki tudta egészíteni Erkel lényét, segítségére tudott lenni az alkotásban.

Az 1840-es évek elején megnősült, König Rózát vette feleségül. Házassága nem volt boldog.

1843 gazdag, jelentős év Egressy életében. Az operaszöveg és több kiváló dal mellett megírta a *Szózat* zenéjét, mellyel a nagyarányú pályázaton első díjat nyert. Ezzel Egressy neve egyszerre szélteben ismertté lett s elfoglalta helyét a magyar zenetörténet egyik legdicsebb lapján.

Egressy 1848-ig állandóan Pesten élt. 1848-ban beállt honvédeknek, főhadnagy lett s a szabadságharc végén Jókai szerint Komáromban kapitulált Klapka seregével. Szabadságharcbeli szerepléséről másik feljegyzés, hogy «Kápolnánál sebet kapott és megsántult. Tehetetlen testi állapotában felgyógyulásáig Bor-





sodban, Ónodra vonult egy barátjához, hol Dávid zsoltárainak orgonára tételével foglalkozott, mely művét eredeti kéziratban a Nemzeti Múzeumnak ajánlódokozta, valamint hangszerzeményeinek mindegyikéből is egy-egy példányt, hogy legalább egy hangmester legyen ott képviselve, mert kívüle más nincs.»

Lehet, hogy a két adat nem ellentétes, de még nem sikerült tisztázni. Mindenesetre látható, hogy Egressy ízzó magyarságát tettekkel is bizonyította.

A szabadságharc után Egressy ismét a Nemzeti Színházhoz szerződött, de a hadjáratban kapott betegségéből nem épült fel teljesen s 1851 július 19-én, 37 éves korában meghalt Pesten. A Kerepesi temetőben nyugszik.

\*

*Egressy*, a muzsikus, naturalista volt. Példázza mutatja, hogy a tehetség a zeneművészeti érvényesüléshez szükséges dologbeli készség hiányán is győzedelmeskedni képes. Tudott egy kicsit zongorázni, orgonázni, hegedülni, fogyatékosan összhangosítani, de a mai zeneakadémiai növendékek ezekben magasán felette állanak. Nem tudott hangszerelni s általában kótaország bonyodalmaiban bizonytalanul járt. És mégis száz év múlva is gyönyörködünk alkotásaiban. A *Szózat*-ban több zenei hiba van, de az összhátás fenséges.

Id. Ábrányi Kornél írja, hogy Egressy «olyan gazdag természetes dallamérzéssel, magyar zenei érzéssel és istenáldotta költői ihlettel volt megáldva, aminővel kevesen az egész lefolyt században. Maradandó becsű termékeket hagyott hátra. A korabeli

zenészek tudásbeli magasságára nem tudott emelkedni, de ezt bőségesen pótolta nála a *közvetlenség ereje.*»

*Egressy* kiváló zeneköltő volt. Az «Ereszkedik le a felhő; Juhászlegény, szegény juhászlegény; Ez a világ amilyen nagy; Kis szekeres, nagy szekeres; Kis furulyám szomorúfűz ága; A virágnak megtiltani nem lehet; Télen-nyáron pusztán az én lakásom... dallamát *Egressy* írta.

Ezek a magyar lélek dalai.

Aztán *Egressy* írta Szerdahelyi Józseffel együtt 1848-ban a «Nemzeti dal» zenéjét, ő írta a «Komáromi emlék»-et, a «Komáromi utóhangok»-at, «Klapka-induló» néven ismerik («Fel, fel vitézek a csatára» kezdetű, utólag írt szövegének szerzője *Thaly Kálmán*) s mindezek koronájaként ő írta a *Szózat* zenéjét.

Rendkívül termékeny volt. Az említetteken kívül számos színdarabhoz, népszínműhöz írt zenét, sok csárdást, körmagyart és nótát. Kiadott szerzeményeinek száma közel félszáz, kéziratban maradt vagy 15 (legtöbbje karmű) s ezenfelül Dávid zsoltárai közül 53-at s a Dícséreték közül 30-at átírt orgonára.

*Egressy* a palotás-zene költője. A verbunkos muzsika formavilágába kapcsolódik, de a XVIII. század mesterkéltségéről és cifrázkodásáról ösztönösen áttért az egyszerűre, a magyarosról a magyarra. Ezen a téren úttörő. Ő az első, akit Petőfi lánglelke zenére ihletett. Ő az első, aki Petőfi-költeményre dallamot írt. A Pesti Divatlap 1844-ben jelenti, hogy Petőfinek «Ezrivel terem a fán a meggy» kezdetű népdalára *Egressy* «igen helyes melódiát készített.»





EGRESSY BÉNI



dalo  
dalo  
detis  
törő  
nek  
része  
több  
moka

nótáj  
lós d  
s van  
füttyö

Lantj  
is ki  
— a

Regél  
mábar  
József  
szerző  
foglal  
vel, n  
dékoz  
egy f  
*Egress*  
repel,  
dás n  
marad  
kiadás



Egressy nem műdalokat, hanem *művészi népdalokat* írt. Új irányt jelölt ki a magyar népdalok szelleme számára. Dalaiban megvan az eredetiség, a találó hangulat és a melegség. Nem sokat törődött mással, mint magával a dallammal, melynek zenei prozódiai s helyesírási vagy kidolgozási részére nem vetett súlyt. Nála minden a dallam, a többi zenei követelmény másodrendű. S ezek a dallamok megfogják a magyarok szívét.

«Télen, nyáron pusztán az én lakásom» kezdetű nótáját 1850-ben Varsóban Hollósy Kornélia I. Miklós cár és udvara előtt tüneményes sikerrel énekelte s van-e olyan paraszlegény, aki nem dúdorássza vagy füttyörészi a «Kis szekeres, nagy szekeres»-t?

Egressy lelke érzelmes, romantikus, csapongó. Lantján nemcsak a szerelem, hanem a nemzeti érzés is kivirágzott. Hazafias lírában a legnagyobb dalnok — a kuruc idők óta.

Nemcsak termelte, de gyűjtötte is a dalokat. A Regélő Pesti Divatlap 1843. évi március 2-iki számában olvassuk: «Egressy Benjamin és Szerdahelyi József nemzeti színészek, dícséretesen ismert hangszerzőink, egy igen-igen jeles és korszerű vállalattal foglalkoznak, t. i. magyar népdalaink összeszedésével, melyeket zenére alkalmaztatva füzetenként szándékoznak kibocsátani.» Ebből a vállalatból mindössze egy füzet jelent meg «Magyar Dalvirágok» címen. Egressy majdnem minden népdalgyűjteményben szerepel, főként Petőfi-dalaival. De műveiből összkiadás nem jelent meg. Dalainak egy része kéziratban maradt. Nem volna-e itt az ideje, hogy kritikai összkiadás készüljön belőlük?

Kit ne érdekelne, hogy *Egressy*, ez a zavaros életű, egyenetlen tehetség, milyen viszonyban állott négy nagy magyar kortársával, *Vörösmartyval*, *Petőfi*-vel, *Erkellel* és *Liszt*tel? Kevés és bizonytalan feljegyzés világít erre, de a kép felvázolható.

*Vörösmarty* 36 éves volt, mikor a «*Szózat*»-ot írta, *Egressy* akkor 22. *Vörösmarty* a nemzet elismert nagy költője. *Egressy* névtelen vidéki énekes színész. Mohón olvasta a költő megjelent műveit, szavalta, dédelgette magában gyönyörű magyar sorait, olaszországi útjára is magával vitte. A *Szózat*-ot megzenésítette három évvel az országos pályázat kiírása előtt (ez a dallam nincs meg). Még egy *Vörösmarty*-verset zenésített az «*Áldozat*» című drámából: *A kancsó kézről-kézre jár* kezdetűt. Nem tudjuk, hogy *Egressy* *Vörösmartyval* milyen személyes érintkezésbe került, de azt tudjuk, hogy a *Szózat* zenésítési pályázatán *Vörösmarty* a «bíráló választmány» egyik tagja volt.

*Petőfi* 21 éves volt, mikor első dalát *Egressy* megzenésítette, *Egressy* 30. *Petőfi* költeményeinek legjobb, legkülönb és legszorgalmasabb zeneköltőjét, *Egressy*ty, — érthetetlenül —, nem sokra értékelte. *Egressy* ennek ellenére sem szűnt meg *Petőfi* költeményeinek hű dalnoka lenni.

*Erkel* 27 éves volt, mikor a Nemzeti Színház kar-nagya lett. Ott ismerkedett meg *Egressy*vel, a kardalossal, aki akkor 23 éves volt. Pártfogásába és barátságába fogadta, de mint zenészt, nem sokra tartotta. Ő, a fölényes, nagy mester, nem szerette a félig-meddig naturalista muzsikust. Operaszövegeit azonban megbecsülte, közös munkájuk eredménye két nemzeti operánk, a *Hunyadi László* és a *Bánk bán*.



Gárdonyi Géza Erkelrel folytatott beszélgetésében azt írja, hogy a nagy operaíró, a nagyszerű zongoraművész, lesújtóan nyilatkozott Egressy zeneszerzőségéről, de hozzátette, hogy «*az ember bámulja, honnan szedte Egressy azt a sok melódiát*».

Erkel az 1843. évi Szózat zenésítési országos pályázaton nem vett részt, de nem is vehetett részt, mert tagja volt a «bíráló választmány»-nak. Megzenésítette ugyan a Szózat-ot, de pályázatra nem adta be. Később, négy év múlva, 1847-ben ez a műve megjelent. Kevesen ismerik. Lelkes, értékes munka, de akkor már Egressy Szózat-át a nemzet minde-  
nik zenésítés fölé helyezte és magáénak vallotta.

Erkel Egressy korai halálát megsiratta.

Liszt 35 éves volt, mikor Egressy dalköltészetével megismerkedett, Egressy 32. Liszt 1846-ban másodszor jött haza. Rendkívül meleg ünnepsé-  
ben részesítették. Ekkor ismerkedett meg Egressyvel és dalaival. Öt hangversenyt adott, melyek mindegyikén magyar dalokat is zongorázott. Ezek későbbi Magyar Rapszódia-inak forrásai. Május 11-én adott hangversenyén *Spanyol Rapszódia*-ja után «Egressy Béninek egy magyar darabját is eljátszotta. mire egy úr lelkesedve felkiáltott:

— Egressy egy szép mondatot mondott, miből Liszt egész beszédet készített.»

Egressy Liszt hazajövetelére köszöntő zenét írt. Teljes címe: «*Fogadj Isten, eredeti magyar nóta zongorára, írta és tisztelete jeléül Liszt Ferencnek ajánlja Egressy Béni.*» Május 13-án tartotta Liszt hangversenyét a József-fiúárvaház («Josephinum») javára. «Többek között Egressy magyar dalára írt változatait

játszotta nagy tetszéssel. A művészt nagyon sokszor kitapsolták, aki karján Egressyvel jelent meg a dobogón — (írja ifj. Somssich Andor: «Liszt élete» c. könyvében, 197. oldal). Ezek a magyar zongoraváltózatok Egressy Lisztnek ajánlott «Fogadj Isten» kezdetű nótájának dallamára készültek.

Egressy «Fogadj Isten» című műve később az elmondottaknál is nagyobb kitüntetésben részesült. Mikor Liszt *Magyar Rapszódia*-it közreadta, a *X. Zongorarapszódia*t tisztán a *Fogadj Isten* dallamából építette fel. Liszt a legelső kiadásban (1847) ezt meg is mondja: «Nach der von Egressy Bény zu meiner Begrüssung in Pesth componirten Original-Weise bearbeitet und dem Componisten freundlichst gewidmet. Franz Liszt.» Liszt feldolgozása és főként ajánlása Egressy művészetének magas elismerése.

Egressy és Liszt többé nem találkozott. Mire nagy és jelentőségteljes idők után hazaérkezett, Egressy már nem élt.

\*

Egressy halhatatlan műve a *Szózat* zenéje.

Bartay András, a Nemzeti Színház igazgatója, 1843 január 26-i keltezéssel pályadíjat tűzött ki a *Szózat* szövegének megzenésítésére. A hirdetésben tudatta, hogy a Nemzeti Színház köréhez tartozónak véli «költőink jelesebb lyrai költeményeinek becsét is minél inkább emelni, terjedését s életbe jutását a nemzetben elősegíteni s ezt leginkább elérhetőnek vélem — hirdeti Bartay —, ha az ily költemények ének és zenére tételnek s ezt évenként tenni szándékozván, a jelen évben 20 arany pályadíjat ajánlok a *legjobb*



**BEOLAT**

Költemény Vörösmartytól.



**DÍJKOSZORÚZOTT ZENÉJÉT**

írta

*Egressy Béni*

nem. H. p.

Wagner Jánosnál beküldve  
PESTEN

AZ ELSŐ KIADÁS CIMLAPJA





A SZÓZAT KÉZIRATA.

"Harcok <sup>rendületlenül</sup> ~~mindig~~  
 helytálló és nagy <sup>nyit</sup> ~~nyit~~ <sup>nyit</sup> ~~nyit~~  
 a Bölcsöd az <sup>nyit</sup> ~~nyit~~ <sup>nyit</sup> ~~nyit~~  
 mely ájól <sup>nyit</sup> ~~nyit~~ <sup>nyit</sup> ~~nyit~~  
 Esza hül a világon e körül  
 Ningen <sup>nyit</sup> ~~nyit~~ <sup>nyit</sup> ~~nyit~~  
 Olyan <sup>nyit</sup> ~~nyit~~ <sup>nyit</sup> ~~nyit~~  
 is elne hálóa kelt.



né  
ha

fog  
ált  
sar  
ug

az  
gró  
Ad  
(M  
Józ  
Józ  
lige  
Wi

ápr  
szár  
szár  
eml  
«A  
adj  
felt  
tik  
kön  
a sz

184  
nő  
lebr  
tude  
szár



*népmelódidéért* Vörösmarty Mihál koszorús költőnk halhatatlan *Szózat*-ára, ének és zenekarra téve».

22 pályamű érkezett be, «közülük a jelesebbek ki fognak szemeltetni s a nemzeti színház személyzete által betanultatván, a nemzeti színpadon nyilvánosan előadatni, s előadásuk után a 20 arany pályadíj ugyancsak az említett műbírák által oda ítéltetni».

A «bíráló választmány» névsora — a Regélő és az Ungar 1843 május 4-i számai szerint — elnök: gróf Festetics Leó, jegyző: Mátray Gábor, tagok: Adler Vince, Balogh István, Bräuer Ferenc, Brand (Mosonyi) Mihály, Erkel Ferenc, Fánecs Lajos, Gaál József, Grill János, Jakab István, Konti Károly, Merkl József, Schindelmeisser Lajos, Schodel János, Sziligeti Ede, Szilágyi Pál, Urbány Ágost, Wimmer N., Winkhler Károly és Vörösmarty Mihály. A bizottság április 28-án döntött az előadandó művekről: a 2. számú pályázatot (jeligéje: «Aki mer, nyer»), a 3. számú pályázatot (jeligéje: «Minden ember legyen ember és magyar») és a 15. számú pályázatot (jeligéje: «A dal ered szívből s szívhez vágy újra repülni») előadják, bár az utóbbi nem felel meg a pályázat előfeltételeinek. A többi pályamű jeligés leveleit elégetik s magukat a pályaműveket a Nemzeti Színház könyvtárában megőrzik (5 éven belül nem adják vissza a szerzőknek, de azok lemásolhatják).

A pályázatok bemutatása a Nemzeti Színházban 1843 május 10-én volt. A három pályamű *A mérges nő* (franciából fordított vígjátékkal) s *Földszint és lebujs* (vígjátékkal) került bemutatásra. — Ember Pál tudósítása szerint a Regélő Pesti Divatlap május 14-i számában: a 2. sz. pályamű («Aki mer, nyer») «se-

hogy sem tetszett», a 3. sz. («Minden ember legyen ember és magyar») alig énekelték el négy sorát, a közönség zajos tapsra tört ki».

A jutalmat nyert mű jeligés leveléből *Egressy* Benjámín neve került ki. A dícséretet nyert második pályamű szerzője *Thern* Károly, a harmadik szerzője *Fáy* Gusztáv volt, de ez már nem jöhetett figyelembe, «mivel a feladat értelmét eltévesztve, nem népdali modorban készült, hanem hangokra és hangszerekre osztott cantata volt» s így jutalomért tulajdonképpen nem is pályázhatott.

*Egressy* dallama kezdetben csekély mértékben nyerte meg a napisajtó tetszését. De «a későbbi kor — írja *Bayer* József — ráczáfolt a kritikusokra, mert mindezek ellenére a *Szózat* szép (bár rhithmikailag nem hibátlan) dallama mégis csak «fájdalmaink enyhítője, örömeink gyarapítója, a nemzet béke- és hadidala és imádsága lett az elnyomás szomorú napjaiban *Erkel* F. *Hymnus*-ával együtt, mely egy évre rá, 1844-ben került elő diadalmasan egy másik pályázat alkalmával. Csak szépségeit látjuk azon a nagy hazafias érzésen át, mely két emberöltő magyarságának hangos szívverését hallja, midőn az «Itt élned, halnod kell...» zeneileg jellemző végütemeiben oly egyszerűen szép befejezést nyer.

De nem vált hátrányára a *Szózat*nak az, hogy a pesti kritika nem lelkesedett, mert *Egressy* műve két hét múlva olyan helyen aratott óriási sikert, ahol máskor magyar szó alig-alig hangzott a színpadról — Pozsonyban. Az előadás napjaiban Pozsony jelentette Magyarország központját, mert ott nyílt meg 1843 május 18-án az országgyűlés és így nemcsak a köve-



teknek, hanem az országgyűlési ifjúságnak is százai magyar életet teremtettek az idegen nyelvű és idegen érzésű koronázó városban.

A pozsonyi magyar színkörben 1843 június 1-én énekelt el első ízben az ott ideiglenesen szereplő magyar színtársulat férfikara a *Szózat*-ot. Az *Egy pohár víz* előadása után, melyben Egressy Gábor mint vendég lépett föl. A Pesti Hírlap pozsonyi levelezője, *Vahot* Imre, a legnagyobb elismerés hangján ezeket írta: «A szívrázó költemény és melódia hallatára egészen el volt ragadtatva a közönség, elannyira, hogy a' végső verseket a' hallgatók közül többen együtt kezdték énekelni a színészekkel, fényes bizonyítványul annak, miszerint a közkedveltségű dal- és zeneszerző, Egressy Benjámin, jeles szerzeménye minden magyar szívet megkapó, minden magyar kebelben visszhangra talál, 's csak olly könnyen énekelhető, mint minden nemzeti dal, melly ezerek, milliók ajkain meghonosult.»

A napisajtó akkori nagy tekintélye mellett szól, hogy Bartay eleget tett a Pesti Hírlap kívánságának, hogy adassa elő Erkel Ferenc pályázatra be nem adott *Szózat* zenésítését. Ez megtörtént, sőt, Egressy is új dallamot szerzett a *Szózat* szövegére s új művét Erkel *Szózatja* mellett ismét a nagyközönség ítélőszéke elé bocsátotta.

A két új pályázó melódia, ünnepélyes alkalommal, V. Ferdinánd nevenapján, május 30-án, került bemutatásra.

Ezen a második versenyen is Egressy *első* melódiája győzött.

\*

A *Szózat* születése lényegesebb mozzanatainak feltárásakor felemlítjük, hogy Egressynek három *Szózat*-zenésítéséről tudunk. Az elsőt 1839-ben, halottak napján tartott hangversenyen adta elő a karszemélyzet a Nemzeti Színházban, Erkel vezetésével. Ez a mű eddig nem került elő. A második dallam a pályakoszorúzott *Szózat*-zenésítés. A harmadik zenésítés 1843 május 30-án, V. Ferdinánd névnapján került előadásra a Nemzeti Színházban, Erkel *Szózat*-zenéjével együtt. Ezt az Egressy-dallamot sem ismerjük, csak annyit tudunk róla, hogy Egressy a Regélő Pesti Divatlap 1843 június 11-i számában heveshangú nyilatkozatot adott közre, hogy ez a *dallama* az «ő tudta és akarata nélkül» került előadásra.

\*

Az irodalom úgy tudja, hogy az országos *Szózat*-pályázatra beérkezett 22 mű közül a dícséretre érdemesítettek kivételével, melyeket 1843 május 10-én a döntéskor előadtak —, *a többi elveszett*. Meglepetésre tarthat számot az a bejelentésem, hogy az elő nem adott 19 mű közül 16-nak teljes kótaanyaga megvan a Nemzeti Színház Múzeumában. A jelígés leveleket megsemmisítették, így nem tudhatjuk a pályázók nevét, de *a pályázati példányok nem veszték el*.

\*

*Jegyzet.* A kultuskormány a Himnusz és a *Szózat* egyöntetű előadását a közelmulthban rendeletileg szabályozta. A rendelethől idézem:

«Egyes énekkarok a *Szózatot* a könnyebb énekelhetőség kedvéért Vörösmarty eredeti szövegének megváltoztatásával ének-





EGRESSY BÉNI SZÜLŐHÁZA

Sajókazinc, Borsod vm. Lebontották 1935-ben





lik. Ezek a szövegváltoztatások sokszor annyira lényegbevágóak, hogy nemzeti hitvallásunk értelmének eltorzítására vezetnek. Az első versszak utolsó sorát például így éneklik: «Itt élned és meghalnod kell.»

A hasonló visszasságok elkerülése végett elrendelem, hogy a Szózat énekes előadásában Vörösmarty szövegét változatlanul meg kell hagyni s azt értelemzavaró hozzátoldásokkal kiegészíteni nem szabad.»

Tehát nem szabad úgy énekelni, hogy «Itt élned és meghalnod kell», — mert:

*«Itt élned-halnod kell!»*

## AGGHÁZY KÁROLY

A magyar zenetörténet szeszélyesen kanyargó útján friss útjelző táblát állítunk fel. Rá van írva: «Ha erre mentek, *Aggházy Károllyal* találkoztok!»

Huszonöt éve halt meg. Nem a közismertek közül való, de olyan érték, akit a magyar kultúra elrétegeződésében előkelő hely illet meg. A negyedszázad csaknem elfeledte, holott *a magyar zeneművészet egyik legtehetségesebb, legmagyarabb és legműveltebb munkása* volt. Azok közé az úttörők közé tartozik, akiknek zeneművészetünk magas színvonala és virágzása nem kis mértékben köszönhető.

«Élete tulajdonképpen a csalódások hosszú láncolata» — mondta róla legrégibb barátja: Hubay Jenő. Mi pedig hozzátesszük: *alkotóművészete a késői elismerés jegyében állt*. Így járt Liszt Ferenc is, aki zenekari műveinek sikertelenségeire fölényes daccal mondta: «Én várhatok». Aggházy szerényen hallgatott és meghalt, nekünk hagyva másfélszáz művét.

*Aggházy Károly* keveset tudott a származásáról. Születése idején nagyszülei nem éltek, régibb felmenőiről is csak keveset hallott. Történethúvár fia, vitéz Aggházy Kamil ny. ezredes, kutatta ki a család multját. A család minden valószínűség szerint az erdélyi Sepsi-



székből származik, ahol állítólag ma is élnek *Aggházyak*. Egyik, a XVIII. században Veszprém vidékére szakadt águkból a művészhajlamú Aggházy György 1830 körül világgá megy s a művészetek klasszikus hazája, Olaszország felé tart. A megélhetés közben szabóiparosnak kényszeríti. Bejárja Itáliát, Ausztriát és Németországot. A szabadságharcban, már mint 31 éves férfi, keszthelyi nemzetőr. Később az osztrák besorozás elől Dombóvárott húzódik meg, *Gyula* fiának megszületése után, 1851-ben, Pestre költözik. Kitűnő megjelenésével, műveltségével és tudásával hamarosan érvényesül. Az elnyomatás alatt a magyar női divat egyik előharcosa, ruhaterveit a pesti divatlapok könyomatos mellékleteiken közlik.

1855 október 30-án születik *Károly* fia. Gyula és Károly rajzolgat, festeget. Gyula hegedülni, Károly zongorázni tanul. Apja, aki közben a Nemzeti Zenede Egyesületnek, majd igazgató választmányának tagja lett, eleinte Bartalus Istvánra bízta Károly oktatását. Később a Nemzeti Zenedébe íratja be, ahol Zapf Antal és Feigler Géza a tanára. Már az első vizsgákon feltűnik zongorajátékával. 14 éves korában a Tábor-szky-cégnél egy kánonja jelenik meg. Az apa ekkor már szép jövedelmének jelentékeny részét költi két művész-fia nevelésére.

Gyula az érettségi után a Nemzeti Színház operai zenekarának hegedűse, de egy szép napon vonóját az ecsettel cseréli fel és Bécsbe, Münchenbe, majd Párisba megy, ahol Munkácsynál fejezi be tanulmányait s a hetvenes évek közepén úgy tér haza, mint az akkor aranykorát élő zsánerfestészet nagy ígérete.

Károly gyöngye erejét megviselik zenetanulmányai

s hogy ezeket folytathassa, kénytelen a gimnáziumból kimaradni. Mint magántanuló azonban ifjú Szathmáry Károly vezetése mellett, széleskörű, általános műveltségre tett szert. 1871-ben Bécsbe megy, ahol Brucknertől tanul zeneszerzést és 1873-ban aranyéremmel kitüntetve tér haza. Volkmann Róbert tanítványa lesz, majd a pesti Hal-téri Zeneakadémián Erkel Ferenc növendéke.

1875 február 18-án az eddigi gyöngybetűk helyett naplójában nagy betűkkel és aláhúzásokkal örökíti meg életének eddig legfontosabb eseményét: *«Délután 2-kor Lisztnél voltam. Az Öreg igen kedvesen fogadott. Tanítványa vagyok! Az Isten jó, hatalmas, legyen áldott az Ő neve!»* Tehetségének és szorgalmának köszönhetette Aggházy, hogy Lisztnak nemcsak tanítványa, hanem kedvence is lett, akit Liszt mindvégig, mindenütt a legmelegebben pártolt.

A következő évben Aggházy Szegeden, a dalosverseny alkalmából rendezett hangversenyen nagy sikert arat. Itt ismerkedik meg Hubay Jenővel, akivel egész életére kiható barátságot köt. 1878-ban Liszt ajánlatára megkapja a főváros Liszt-ösztöndíját és Párisba megy.

Szép, nagy, azúrkék szemével, barna fürtjeivel, délceg, előkelő alakjával, a legjobb fogadtatásban részesül. Az év végén ismét összetalálkozik Hubayval. Ettől fogva elválaszthatatlanok. 1879 elejétől, amikor a Salle Erardban közös hangversenyt adnak és óriási sikert aratnak, a két fiatal magyar művész az egész párisi társaságot meghódítja. A legelőkelőbb szalonok versengtek értük. Némely este két-három helyen is kellett játszaniok. A köztársaság elnökénél, Grévy-





AGGHAZY KÁROLY

26 éves korában

KOZMATA FELVÉTELE, BUDAPEST





nél, Gambettánál, Lessepsnél éppúgy otthon voltak, mint Dumas fiánál, Saint Saësnél, Sarasatenál és Sarah Bernhardtnál, vagy a híres festők: Bataille, Bastien Lepage, Doré és mások irígyelt körében. Az ott élő magyarok közül Munkácsy szalónján kívül Türr István tábornok, Nemeskéri Kiss Miklós, Bertha Sándor és Szarvady estélyein gyakran szerepeltek.

A szegedi árvízkárosultak javára rendezett párisi hanyversenyükről a világ legnagyobb lapjai írtak. Május végén hazalátogattak, hogy megpihenjenek. De anyyira elhalmozták őket meghívásokkal, hogy 35 magyar városban kellett hangversenyezniök. Mindenütt négyesfogat, szerenád, lakomák és bálók. Az elsülylyedt «Arrogante» csatahajó áldozatainak családja javára rendezett margitszigeti ünnepségen, melyre Munkácsy és Türr is hazajött Párisból, Márkus Emiliával és Odry Lehellel együtt léptek fel.

Párisba visszatérve, egyik hangversenyük a másikat követte. Több ízben játszottak a híres csillagász, Flammarion Camille házában, kinek hatása alatt Aggházy élete végéig lelkes műkedvelő csillagász maradt.

1880-ban Csiky Gergely és Almási Balogh Tihamér népszínműveihez Aggházy Hubayval együtt írt zenét, de annak magyaros szellemét az akkori pesti közönség nem igen tudta méltányolni.

Májusban Londonban hangversenyeztek, fényes sikerrel. Innen Brüsszelbe és aztán Kolpachba utaztak, ahol Munkácsy kastélyában két hónapig pihentek és zenélgettek.

A következő évben a nagybeteg Vieuxtemps meghívására Algirba utaztak. Vieuxtemps nemsokára meghalt s hátrahagyott műveit a két barát rendezte

sajtó alá. Ezután a hazatérés következett s vele a babérkoszorúza duó is szétvált. Hubay visszatért Párisba. Aggházy megnősült s a Nemzeti Zenede tanára lett. Kacziányival és Ernyeivel együtt szerkesztett «Harmónia» című zenei szaklapjában feldolgozta külföldi tapasztalatait, «mintegy hatodik érzékével megállapította, hogy az a forrás, melyből tüzes magyar lelke anélkül meríthet, hogy nemzeti mivoltából, fajiságából veszítene, a francia kultúra».

A hazai művészeti lehetőségek azonban nem elégitették ki s így 1883 elején Liszt ajánlatára a berlini Stern-Kullak konzervatórium tanári állását foglalta el. Az ott töltött 6 év alatt sok jeles német művész került ki keze alól. Zeneműveit Németország legnagyobb kiadói adták ki.

1889 elején az északamerikai Cincinnatiba hívják, de Justh Zsigmond tanácsára nem oda, hanem haza készül. Justh hatalmas propagandát csinál mellette, Trefort kultuszminister az átszervezett Zeneakadémián tanári állással kínálja meg, Aggházy tehát családotól visszatér hazájába. Közben Trefort meghal, az utód az előd ígését nem vállalta s így Aggházynak a Nemzeti Zenede és a Zenekedvelők Egyesületének kiművelési osztályával kellett megelégednie. Büszkesége nem engedte, hogy a jóvátételre később tett ajánlatokat elfogadja s halála percéig a két intézet tanára maradt.

Közben 1890-től két évig az Operaház korrepetitora is volt.

1890 után egyre ritkábban szerepelt, mint előadóművész és dirigens.



1902-ben és 1903-ban svájci hangversenykörútra vállalkozik.

Utoljára 1911-ben, mint volt Liszt-tanítvány, játszik a budapesti Liszt-ünnepségeken.

Munkaerejét inkább a tanítás és a zeneszerzés között osztja meg. A tanítás azonban a komponálásban is gátolja s így többnyire csak nyári pihenőit használhatja nagyobb szabású művek megírására.

A világháború kitörése, hadbavonult fiának és vejének sorsa, rongált egészsége teljesen elhallgattatja. Utolsó művének, egy 1915-ben írt *«Győzelmi induló»*-nak csak futólagos vázlata maradt. 1918 nyarán Kőszegre ment, hogy az ottani hidegvízgyógyintézetben keressen gyógyulást idegbántalmaira. Hazatérve, ágyba hanyatlik. A Jendrassik-klinikán meglátogatják a régi barátok, körülveszi családja és néhány hű tanítványa. Egy verőfényes őszi napon, 1918 október 8-án, délután 3 órakor, 63 éves korában, megállt a szíve.

\*

Aggházy hányatott életének ez az első részletes térképe. Az életrajzi térképbe nem rajzolható bele a vándor, az ember. Közelebb hozza őt egyik legjobb barátjának, Justh Zsigmondnak, a kitűnő írónak, Budapestről Berlinbe, 1889 január 21-én kelt, Aggházyhoz intézett — most először nyilvánosságra adott — levele:

«Édes Károly!

Tulajdonkép furcsa az nagyon, hogy én e percben leülök levelet, meleg, baráti s lehető legbizalma-

sabb levelet írni valakinek, kit még két hete éppen csak hogy híréből ismertem.

Életemben ez először történt. Ennél többet nem is mondhatok. De talán mégis. El kell mondanom még, hogy úgy érzem, eddigi életemben mindig hiányzott egy ember, ki oly meleg kedélyű legyen, mint a déli napsugár és amellet mély, mint egy téli éjszaka. Akinek nevetése jól essék nekem s akinek fájdalma összhangban legyen — a nevetésével.

Aki úgy hasson, mint egy pajtás s azért elmerüljön (ha ilyen pillanat vesz rajtunk erőt) a művészet tengerszemébe, kinek tréfájából a szíve, szívéből filozófiája s a filozófiájából a művészete érez-  
zék ki, — szóval valaki, ki olyan legyen, mint te vagy.

Most úgy érzem, hogy eddigi életemből hiányoztál nekem. Pedig éltem, háromszor, tízszer annyit, mint ahány az éveimnek száma.

Élek tíz helyett s nem élek magamnak. Többet sokkal, mint más ember s azért mégis csak párhuzamosan az élettel.

Rohanva így az űrben — reád is rádtaláltam. Eggyel több a «fajtá»-ból.

A játékod hozott össze. Ha játszol, valamit keresztül érzek iramlani a szívemen, ami nagyon hasonló — önmagamhoz.

És most az, ami összehozott, maradt belőled itt csak. Egy pár teleírt lap, sorozata a compositióknak, — egyéniséged egy része. S a másik csak hiányzik nekem. Nos, eggyel több, amit majd pótolni kell mindannak, ami magát az életet, — a valóságos (nem az «out of the world») életet nem pótolja.



Találkozunk-e még valaha? Ki tudja? Valószínűleg nem. Az élet nagyon egyöntetű. On n'est pas ici pour s'amuser.

Csak dolgozzál sokat. A talentumodért szerettelek meg s ma, midőn már tán talentumod nélkül is megszerettelek volna, arra kérlek, ápold, fejleszd, érzem, több vagy, mint magad is hinnéd.

Amit Mednyánszkyban, mint festőben, a fiatal Apáthyban, mint íróban, azt látom, benned, mint zenészben, — az *anyag nagyságát*. A humuszt, amely többet ígér, mint a többiek már nagy mesterséggel, bajjal felnevelt kis palántái.

Arra persze nem jogosítottál fel, hogy így beszéljek, mégis megtettem. Mi mind ki vagyunk a csüggedés veszedelmének téve, szenvedünk, kételkedünk magunkban, nem árt néha a mások bizodalma.

És te egyik vagy azok közül, akiket nem első látásra ismer meg az ember.

A téglapiros muskátlik tűnnek fel előbb egy üveg-házban s nem a félszínű, elmosott orchideák. Mert hát az optika is embercsinálta, emberi dolog. Légy boldog! Úgy, ahogy tőled telik, tekints a lelked világába, ha a külső tán ingani kezd, ha a lelki világ is rendül, csak dolgozzál, s add ki azt, ami túlárad benne, így aztán mindent megbír az ember, elviseli az élet kis és nagy nyűgeit, el az elhagyatottságot (te ezt nem ismered — csókold meg a Toto homlokát helyettem is, de nyugodtabban, derültebben, mint én tenném), elviseli azt, hogy szeretni született s hogy a szív termi a szeretet oldalán a szenvedést is, el azt is, hogy minden porszemért küzdenünk kell s mégis e porszemekből lesz a sár is, elviseljük azt,

hogy az a világ, amelyet a lelkünk mélyébe fújt a természet vak ereje, magasztosabb, semhogy boldogtalanná ne tenne. Ezt kívánom neked a holnapra, — az életre. Engem? — Istenem, én reám akkor gondolj majd, ha tán az élet ólomsúlyával nagyon is reád nehezedik. Akkor tán majd megmutathatom azt, hogy az idő fictio, hogy kéthetes barátság több rokonszám, érzést hozhat össze, mint egy olyan, amelyet tán egy közös élet folytonossága nevelt fel azzá.

Nyitva áll lelked előttem, látlak magam előtt.

Nagyon ki vagy az életnek szolgáltatva, ezért féltlek is — s ezért említettem előbb azt az időt, amidőn tán még szükséged is lehet reám. Ezért ne feledj el. Én most végzek, adj néha hírt magadról — dolgozzál sokat és — gyere majd vissza. A helyed üresen áll — még nálam is. Látod, az önzés megszólalt, leteszem a tollat.

Az Isten áldjon.

*Justh Zsigmond.*»

Justh Zsigmond Aggházyval sűrűn levelezett. Az érdekes sorok majd nyilvánosságra kerülnek, de addig is néhány kiragadott részlet:

«A dalod gyönyörű, gyönyörű, olyan mély a zenéje... Aggházy Károly megtalálta az utat, amelyen repülnie kell. Ez az út visz felfelé és lefelé... egyaránt... kívül a világon» (1889. Szent-Tornyáról Berlinbe küldött levél).

«Károly!, mit nem adnék azért, ha nyugodtan odahajtvá fejemet (fáradt, kifárasztott fejemet) a zongorád párkányához, hallgathatnám játékodat s azután megsímogatnád homlokomat, szeretettel, mele-



gen, testvéreileg...» (1889 március 8. Budapestről Berlinbe küldött levél.)

«Legelőbb is köszönet gyönyörű két dalodért. Cebrián Róza grófnő énekli őket a szalonokban, mindenkinek nagyon tetszik és most az egynek, a «mindenkinek», jó ízlése van. Olyan par excellence Aggházy-művek, hogy nem is mint darabokat, de mint lényed részeit szeretem.» (1889 április 1. Budapestről Berlinbe küldött levél.)

Justh Zsigmond sorait olvasva, szinte mellettünk áll Aggházy.

\*

A zenetörténet távlatokból ítél. Az Aggházy halála óta eltelt huszonöt év azt mutatja, hogy Aggházy Károly a magyar zeneművészet előző nagy századában *különálló egyéniség*. Nem gyökerezik senkiben, bár a magyar zenei eredményeket felszívta magába. *Különálló egyéniség* azért, mert alkotásaiból mindenütt kitetszik, hogy az a forrás, amelyből tüzes magyar lelke meríthet, anélkül, hogy magyar fajiságából, nemzeti voltából veszítene: *a francia kultúra*. Liszt és Hubay elvétele francia hatást mutat, *Aggházy tudatosan jár magyar lélekkel francia úton*. *Ő az első, aki műveiben ezt a távlatot megnyitja*, amelyben később Szabados Károly s főként Szabados Béla neve csillan meg.

Aggházy Károly elsősorban zongoraművész volt. Meghódította hazáján kívül Berlint, Londont, Párist. Nem tartozott a megszokott zongoraművészek közé, akik mindig egyformán jól adják elő a műsorra tűzött szerzeményeket. Ihlet nélkül nem tudott ját-

szani. Ennek hiányában egykedvű volt a játéka, de hangulatba jött, a legnemesebb zongoraművészetet képviselte. Finom, meleg, *magyar* (mert van ilyen) zongorahangja elszállt, de itt maradtak zongoraművei. Összesen 130, kis részben kiadatlan alkotás. *Magyar Esté*-i méltó folytatásai Liszt rapszódiainak s *f-moll Elégia*-ja a nemzeti irány egyik legszebb megnyilvánulása. A világháború kitörése előtt egy amerikai pályázaton *Zongora-szvit*-jével díjat nyert — 1500 pályázó között.

*Alkotó-művészetében* a zongoraművek vezetnek, de minden műfajban jelentős kótákat hagyott hátra. Kamara-, kar- és szimfónikus művei értékben máig sem kisebbedtek. Két operát is írt és 32 szép dalt.

Pedagógiai munkásságát sem szabad érdemei felsorolásánál ki nem emelni.

Művei jegyzéke:



JEGYZÉK

AGGHÁZY KÁROLY

ZENEMŰVEIRŐL

Összeállította: vitéz Aggházy Kamil  
1943

RÖVIDÍTÉSEK:

z: zongora, zk: zongorakiséret, h: hegedű,  
kézir: kézirat, Harm: Harmónia, Art. P.  
Society: Art Publication Society, Saint Louis  
MO. U. S. A. 1913, vezpld: vezérpéldány,  
szól: szólam, hangszerpéldány, 4kéz: 4 kezes,  
ny: nyomtatott.

# AGGHÁZY KÁROLY ZENEMŰVEI

## I. Műszámmal

Sorszám	Műszám	Műfaj	C í m	Kiadó
1.	1.	zenekar	Andante és scherzo	kézirat
2.	2.			
3.	3.			
4.	4.			
5.	5.	dal zk.	10 magyar dal (az Aggházy-albumban is)	Harm
6.	6.	z	Nocturne	Kahnt
7.	7.	zh	Puszta-Klänge, Sonate dramatique, Concert duo, Hubay Jenővel	Kahnt Schott
8.	8.	z	Toquade	Kahnt
9.	9.	z	Etude de concert	Bote Bock
10.	10.	z	Fantasiestücke	Kahnt
11.	11.	z	Drei ungarische Tänze	Kahnt
12.	12.	z	Kleine Rapsodien	Kahnt
13.	13.	z	Poems hongroises	Bote Bock
14.	14.	z	Fantasie in Form von Variationen ... (az Aggházy-albumban is)	Harm
15.	15.	z 4 kéz	Danse de nocés (az Aggházy-albumban is)	Harm
16.	16.	z	Moments caractéristiques (az Aggházy-albumban is)	Harm
17.	17.	énekkar	5 magyar férfinégyes (az Aggházy-albumban is)	Harm
18.	18.	z 4 kéz	Rondo all' Ongharese. — Marcia	Bote Bock
19.	19.	z 4 kéz	Suite hongroise	Bote Bock
20.	20.	z	Variations sur le thème un fièvre brulante de l'opéra (az Aggházy-albumban is)	Harm



Sorszám	Műszám	Műfaj	C í m	Kiadó
21.	21.	z	Etude de concert	Bote Bock
22.	22.	z	Ländlerstimmungen	Harm
23.	23.	dal zk.	Öt dal	Rózsavölgyi
24.	24.	z	Fünf Ländler	Hainauer
25.	25.	vonós- négyes	Vonósnégyes	kézirat
26.	26.	z	Trois Mazurkas	Hainauer
27.	27.	z	Quatre caprices	Hainauer
28.	28.	z	Musique de pantomime	Hainauer
29.	29.	z	Trois pièces intimes	Hainauer
30.	30.	dal zk.	Sechs Lieder	Kiesler
31.	31.	dal zk.	Sechs Lieder	Kiesler
32.	32.	dalmű	Maritta, a korsós Madonna 2 felvonás, előadva 1897	zkiv. Kunosi, partit. M. kir. Operaháznál
33.	33.	z	Trois pièces	Bárd
34.	34.	karének	8 férfinégyes	Pesti könyvny.
35.	35.	z	Magyar hangulatok	Pesti könyvny.
36.	36.	zk. zenekar	Rákóczi gyászinduló	Pesti könyvny.
37.	37.	zk. zenekar	Gyászhangok Rákóczi...	Pesti könyvny.
38.	38.	z	Trois amusements	Rozsnyai
39.	39.	z	8 kétszólamu	Rozsnyai
40.	40.	z	12 bevezető tanulmány Bach S. 3 szólamu inven- cióhoz	Rózsavölgyi
41.	41.	z	4 Klavierstücke	Rahter
42.	42.	z	In the forest	Art. P. Society
43.	43.	zongora ötös	Zongoraötös	kézirat

# AGGHÁZY KÁROLY ZENEMŰVEI

## II. Műszám nélkül

Sorszám	Műszám	Műfaj	C i m	Kiadó
44.		z h duo	Abendstimmung (Impression du soir)	Schott
45.		z kánon	Albumblatt (Canon)	Táborszky
46.		nép- színmű	és Hubay Jenő. Borzáné Marcsája (Almási Balogh T. szöve.)	Táborszky
47.		dal zk	Este van már... románc (Vargha Gyula)	Harm.
48.		z	Hősi alagya. — Vigasztaló (Magyar zenekölt. kiállítási albuma)	Rózsavölgyi
49.		z	In der Ferne	Weinholtz
50.		z	Munkácsy-nóta	Harm.
51.		dal zk	Ninon (Musset szövege)	Harm.
52.		z	Sárosi nóta	Harm.
53.		z	Serenata allaitarra	Weinholtz
54.		z	Soirées hongroises I.	Bárd
55.		z	Soirées hongroises II.	Bárd
56.		dal zk	Cinka Panna dala (a 37. műből)	Rozsnyai
57.		z	Gavotte-musette	Rozsnyai
58.		dal zk	Will ruhen...	Weinholtz
59.		z h duo	Fantaisie tziganesque	Choudens
60.		z	4 Rapsodien	Rozsnyai
61.		z	Könnyű rapszódia	Rozsnyai
62.		z	2 soirées hongroises III.	Rozsnyai
63.		z	Elégia (Kern; modern ma- gyar zene)	Rozsnyai
64.		dal zk	Mint a harmat..... (12 dal sorozatból)	Harm.
65.		2 z	Mozart. C-dur koncert	Univ. Edit.



Sorszám	Műszám	Műfaj	C í m	Kiadó
66.		2 z	Mozart. D-moll koncert	Univ. Edit.
67.		z	La danse de la petite sorciere.	Figaro Illustré de Noel 1897.
		z	Feladvány	
		z	Compositions de... Album de piano	Bote Bock
68.	nép- színmű		Szép leányok. (Csiky Ger- gely szövege)	
69.	z		Romance	Megjelenésükről nincs adat
70.	z		Scherzino	
71.	z		Sonata I.	
72.	z		Sonata II.	
73.	z		Le désir	
74.	z		Fuga	
75.	dal zk		Mädchen mit den roten Lippen (Heine)	
76.	z		Douleur	
77.	z		Consolation	
78.	szimf.ének költemény		Rákóczi (Kováts Gyula szövege)	
79.	női kar		Hervadás-feltámadás	
80.	férfi kar		Temetésre szól az ének (Petőfi szövege)	
81.	férfi kar		Nagyon boldog vagyok...	
82.	z		Fantasie für Klavier	
83.	férfi kar		Ima a hazáért. (Zempléni A. szövege)	
84.	... kar		Ave Maria	
85.	zenekar		Suite ?	
86.	z		Preludium und Fuge	
87.	dal zk		Rózsafának ... (Varga Gyula szövege)	

Sorszám	Műszám	Műfaj	C í m	Kiadó
88.		z h	Gavotte-humoresque (csello-kvintett kísérettel)	Megjelenésükről nincs adat.
89.		z	M. Friedemann Bach: Orgelkoncert	
90.		dalmű	Ravennai nász. 2 felvonás. előadatlan (Orbán Dezső szövege)	





SZÉKÁCS ALADÁR

FAYER FELVÉTELE, WIEN



nag  
A  
koz  
nek  
rés

ház  
de  
Fer  
kat  
gat  
hár  
virá  
gat  
sasá  
már  
felt  
Kac  
játé  
és  
Laj  
Bél



## SZÉKACS ALADÁR

Erjedő, mozgalmas idők voltak. A művészetek nagy százada, a tizenkilencedik, elmúlt és jött az új. A századvég termékenyítő levegője átcsapott a sorakozó évekre s költészetnek, irodalomnak, művészetnek olyan lendületet adott, amilyenben azóta se volt részünk.

Jókai még élt, Ady tör előre; kész az Országház, a Halászbástya, a Curia, Munkácsyt temetjük, de fest helyette Székely Bertalan, Lotz, Szinyei-Merse, Ferenczy Károly; Zala, Fadrusz mintázza a szobrokat; az Operaházat Keglevich vezeti és Káldy igazgatja; Kerner a karmester; annyi a hangverseny, hogy három is esik egy napra; a magyar zeneművészet kivirágzik; Dohnányi meghódítja az országot és hódítgatja a külföldet; a Hubay—Popper vonósnégyes társaság még megtartja emelkedett szellemű estéit, de már nyomukban a Waldbauer—Kerpely kvartett; feltűnik Bartók és Kodály; Szabados, Huszka, Kacsóh, Lehár a magyar operettet és könnyedebb daljátékot viszi diadalra; fellendül a műdal-irodalom és Fráter Lóránd, Dóczy József, Dankó Pista, Pete Lajos, Balázs Árpád kezén megújhodik a nóta. Radics Béla és Magyar Imre a kedvelt cigányprímás. Az

előkelőbb házakba beköltözik a zeneművészet. A palotákban estélyeket, hangversenyeket tartanak színvonalas műsorokkal.

Ebben a keretben élt egy zárkózott lelkű, kellemes, szép, magyar férfiú: *Székács Aladár*. Bíró volt a budapesti törvényszéken, majd a kir. Táblán, a Curián, a Közigazgatási Bíróságnál tanácselnök, a Trianon utáni Nemzetközi Döntőbíróság tagja s a jogtudomány elismert európai szakembere. Ideális bíró, ideális magyar és szívvel-lélekkel muzsikus. Gordonkaművész, jó zongorázó és zeneszerző. Sokkal jelentősebb zeneszerző, mint ahogy kora tudta. Alkotásai bizonyítják, mert azok vagy négy évtizeden át éltek, élnek ma is és nem fognak elkallódni. Egy időben népszerűek voltak ezek a kóták, de két nagy háború fojtogatta szellemüket. A magyar kultúra igazságtévő elrétegződésében megfelelő helyre kell őket állítani.

\*

Székács Aladár mindenütt ott volt, ahol jó zenét lehetett hallani. Egyedül ritkán járt, kiváló muzikusok, írók, festők, szobrászok keresték a barátságát. Közvetlen környezete, úgyszólván mindennapi társa: Bakonyi Károly, Horvay János, Fráter Lóránd, Fráter Béla, Bárczy István, Bárczy Gusztáv, Buttykay Ákos, Nemes Lajos, Kacsóh Pongrác, Petrovics Elek, Huszka Jenő, dr. Kerekess László, Igyártó Zoltán s legbensőbb barátja: Rottenbiller Fülöp és felesége.

Rottenbiller igazságügyminiszteri államtitkár volt. Művelt, melegszívű, zeneértő úr. A felesége kitűnő





SZÉKÁCS ALADÁR

Hervai János szobrászművész alkotása

KISZER NÁNDOR FÉNYKÉPFELVÉTELE, BUDAPEST





énekesnő. Ő adta elő legszebben Székács dalait. A nemes házizenélésben a fővárosi szalonok közül a Rottenbilleréké elől járt. Sok író, művész megfordult itt. A legszívesebb vendéglátás, magasrendű zenélés fogadta őket. Székács Aladár talán náluk érezte magát legjobban. A halkszavú ember itt felengedett. Minden mondata magvas, sokatmondó. Zenéről mindig belső ízzással beszélt.

\*

Összeállítottuk Székács Aladárnak a zenei szakajtóból hiányzó életrajzi adatait. Budapesten, 1872-ben született. Középiskoláit Nagyszébenben s Budapesten végezte. Az egyetemet ugyanitt. Gimnazista korában kezdett foglalkozni zenével. Egyetemi éveivel párhuzamosan elvégezte a Zeneakadémiát.

Zeneszerzést Beliczay Gyulától tanult. Zongorázási készsége felülmúlta az átlagot. 1940 június 2-án halt meg, Budapesten.

Ezek közé a lexikoni szavak közé elfér közel fél-száz műdal, néhány zongoradarab, pár gordonkamű, egy opera, a *«Hamupipőke»* és egy *«Delilah»* című könnyedebb daljáték.

A *«Delilah»* és a *«Hamupipőke»* nem került előadásra. A *«Delilah»* töredék, de a *«Hamupipőke»* — úgy tudjuk — teljesen kész opera, bár a zenei hagyatékban csak töredékeit találtuk.

A *«Hamupipőke»* kedvelt témájából két jóbarát, Székács Aladár és Buttykay Ákos egyidőben írt operát. Egyik sem tudott a másik tervéről és munkájáról. Buttykay előbb nyújtotta be művét az Operaházhoz,

mint a barátja. Erre Székács Aladár be sem adta operáját és sohasem beszélt róla senkinek.

\*

Ha Székács Aladár művészi és emberi jellegzetességeit csak érintjük is, szólnunk kell róla, mint szónokról.

A Székács-család az ország társadalmában hosszú időn át nagy szerepet játszott. Székács Aladár apja, Székács Ferenc, a Pesti Törvényszék elnöke, majd kúriai bíró volt; Székács József evangélikus püspök, Aladárnak nagyapja; a püspök fia, Székács István, híres mintagazda, a vármegyei életben vezető egyéniség. Székács Elemér, a magyar búzanemesítő, Székács Aladárnak testvérébátyja. A tehetség nyugtalansága, íme, benne élt a családban.

Székács Aladár nemcsak kiváló bíró, kiváló zenész, de kiváló szónok is volt. Ezt a tehetségét alighanem nagyapjától örökölte. Székács püspököt ugyanis páratlan szónoki képességéért az «ország papja»-nak nevezték.

Egyszer a püspök valami hivatalos ügyben Szabadkára utazott. A szerbek meglepetésszerűen testületileg kimentek elébe a vasúthoz és *baldachim* alatt kísérték be az evangélikus püspököt a görögkatolikus templomba, ahol beszélnie kellett, mert hallani akarták az «ország papja»-t.

A szónoklat a szó formaművészete, a dal a zene legközvetlenebb formája. A két művészetben összefüggéseket lehet találni.

\*



Székács Aladár egyike a legértékesebb újabbkori magyar műdalköltőknek. Zenei arcképéhez dalai adják a legjellegzetesebb vonást.

Szemérmes lírikus. Halkan, nemesen dalol. Szereti a melos hajlékony mozgását, bátor szökkenését s ellanyhuló báját. A melódia, harmónia és ritmus örökérvényű szabályainak nagy tisztelője.

Dalai mindig *előkelők*. Műgond és lélek tartja nemes színvonalukat és őrzi azokat a hervadástól.

## FILTSCH KÁROLY

### Chopin magyar tanítványa

A Chopinről szóló irodalomban néhány elbujtatott sort találunk egy magyar származású fiúcskáról, aki Chopinnek legjobb és legkedvesebb tanítványa volt. Chopin életírói közül néhányan, — mint Karasowski, Lenz, Huneker — szűkszavúan szólnak erről a gyermekről, kinek halványuló képét az egykorú német, francia, angol és magyar hírlapok meglepő tudósításai megnagyítják. Egyedül az a tény, hogy valaki Chopinnek elismerten legjobb tanítványa volt, — minden figyelmünket felkeltheti, hát még a róla itt-ott felbukkanó szavak érdekes tartalma?

Olvassuk el a legrégibbet, amit róla Mátray Gábor Honművész című lapja 1835 június 18-án ír: «*Muzsikai lángész* (— a cím). Az Erdélyi Híradó-nak legközelebbi 44-ik számában említés tétetik *Filtsch* Károly 5 esztendőes fiúról, Filtsch József úrnak, Erdélyben élő szászsebesi (ágostai vallású) papnak gyermekéről, ki renkívüli muzsikai tehetségére nézve csudás lángeszűnek mondathatik, mit bebizonyított a kolozsvári hangászati társaság termében, hol bámulásra méltólag játszott nemrégiben a fortepianón és phys-





FILTSCH KÁROLY  
Chopin magyar tanítványa





harmonikán (harmonium). A zömök, ép testű, eleven, nagy, fekete szemű gyermek egy év óta tanul atyjától klavírozni. Csak hét hangra terjedő ujjával bámulandó ügyességet mutat a játszásban, a tactust pontosan tartja meg; kitalálja mily hangnemből játszanak valamit, sőt a lágy és kemény hangnemekre átmenezt is meghatározva mondja meg. A transponálást is tudja. Énekel apróbb népdalokat s maga játsza hozzá a klavir-kíséretet. Beszél magyarul s németül.»

Hat év mulva ugyancsak a «Homművész»-ben (1841 június 20. szám) ezt találjuk: «Pesten az erdélyi születésű, tíz évű kis művész, *Filtsch* Károly (mint halljuk, egy szász lelkész fia), ki egy erdélyi főrendű dáma pártfogása alatt Bécsben nyeré zenészi műveltségét, június 11-én adá a kis redutteremben első hangversenyét a jótékony asszonyi egyesület javára, igen szép számú közönség előtt... *Méltóan várhatni, hogy belőle Erdélynek Lisztje válhatik.*»

A Regélő, Pesti Divatlap 1843 szeptember 27-iki számában ezt olvassuk: «Egy londoni levelező írja az «Ost és West» című újságban kis hazánkfiáról: «Ha ítéletem tökéletesen nem csal, úgy e gyermekben egy genius szendereg, mely egykoron csodaerővel fejtendi ki magát s hivatva van új költészetet lelkes hangokban kiömlasztani, vagy inkább; zenét tisztán mennyei költészetté varázsolni, mert szeméből a szellemi élet egész világa sugárzik s ifjú homlokán látszólag tündököl a teremtmény erő fönsége. Ófelsége, az angol királynő, aranylánccal kedveskedék neki s mások által több igen nagy kitüntetésekben részesült.»

Íme, olyan három egykorú tudósítás, melyet sem a magyar, sem az általános zenetörténet nem ismer.

Ha semmi mást sem olvashatnánk a kis Filtsch Károlyról, meggondolkoztatna a «Honművész» jósló mondata, hogy belőle «*Erdély Lisztje válhatik*». Rendkívüli gyermek az, kiről öt éves korában ezt nyomtatják le, kinek Erard, a híres párisi zongoragyáros, 3200 frank értékű díszzongorát ajándékoz újévre s akiről az angol kritika azt jegyzi fel, hogy Angliában ő tette ismertté és kedveltté Chopin műveit. A londoni «Musical World» meggyőződéssel mondja és indokolja, hogy «*Filtsch Károly egyike a legcsodálatraméltóbb jelenségnek, amit a művészettörténet felmutat... Mozart, Mendelssohn és a mi Benetünk (William Sterndale), a zenetörténet e három csodája, nem ígért többet, mint Filtsch Károly.*» Liszt Ferenc, mikor először hallotta játszani e fiúcskát, így kiáltott fel: «*Ha ez a gyermek művész-körútra indul, én becsukhatom a boltomat.*»

Chopinnek két nyilatkozata maradt ránk Filtsch Károlyról. Az egyik saját írásában. A «Fidelio» partitúrájára, melyet Chopin ajándékba adott Filtschnek, a zongora legnagyobb költője ezt a dedikációt írta: «*...fogadd, kedves ifjú barátom, ezt a mesterművet. Életed végéig olvass belőle és emlékezz néha rám is.*» Chopin másik nyilatkozatát a «Humorist» 1843 februári száma jegyezte fel. Filtsch Károly a Rotschild bárónők egyik estélyén, Párisban, Chopin é-moll zongoraversenyét játszotta, mestere jelenlétében. A finale után Chopin meghatódottan ezt mondta: «*Istenem, micsoda gyermek! Hihetetlen, rendkívüli. Egyetlen ember sem értett meg úgy, mint ez a gyermek. A legkülönösebb, amivel valaha találkoztam. Ez nem utánzás, nem utánzás! Ugyanaz az érzés,*



*ugyanaz a művészi lelkesültség, amely minden meg-gondolás, minden cél nélkül játszatja őt, mintha más-ként nem is volna lehetséges. Majdnem minden mű-veket játsza, anélkül, hogy tőlem hallotta volna, anélkül, hogy a legkevesebbet is mutattam volna neki. Nem pontosan úgy, mint én, — mert rányomja saját bélyegét — de bizonyára nem kevésbé jól, mint én.»*

Rendkívüli szavak, melyek most, csaknem száz év után is, a legnagyobb fokú érdeklődést válthatják ki. Filtsch Károly, a «kis nagy művész» — amint Thalberg nevezte — 1830-ban született Szászsebesen. Az ottani evangélikus lelkésznek, Filtsch Józsefnek fia. Anyja: Felmer Karolin. Sok gyermekük közt Károly a legfiatalabb. Zsuzsi nevű, tiszta magyar származású nevelt leányuk, kedves szerepet játszott a népes, mű-velt és zeneszerető családban, melynek minden tagja énekelt és zongorázott. A lelkész háza úgyszólván egy percig sem volt zene nélkül. A család egyik héten németül, a másikon franciául s a harmadikon fel-váltva, magyarul beszélt. Károly nagy zenei tehet-sége már három éves korában megnyilatkozott. Atyja kezdte zongorára tanítani. Négy éves korában már kisebb gyakorlatokat játszott. Olyan bámulatos gyor-san fejlődött a zenében, hogy apja és Zsuzsi, a ma-gyar nevelt gyermek, alig győzött vele eleget foglal-kozni. Magasabb kiképzéséről kellett gondoskodni. Se-gítségükre jött ebben gróf Bánffy Dénes, Erdély kor-mányzója és a felesége. A grófi család Filtschékkel jó viszonyban volt. Megkérték a szülőket, hogy Károlyt adják át gondozásra és taníttatásra nekik. A család beleegyezett s így a kis Károly Bánffyékkel Bécsbe került. A grófék nagyon megszerették a feltűnően

okos, kedves gyermeket s mint sajátjukkal bántak vele. Könnyítette a helyzetet, hogy Károly testvérbátyja, a nála 17 évvel idősebb, József, Bécsben lakott, hol az erdélyi udvari kancellária hivatalnoka volt. Filtsch József szintén kitűnő muzsikus hírében állott. Jeles zongoraművész és zeneszerző. Minden szabad idejét kis öccse zenetanításának szentelte. Párhuza-mosan egy Mittag nevű zongoramester oktatta a gyer-meket. Filtsch József megható szeretettel vette körül Károlynak minden lépését. Együtt laktak a Bánffy-palotában, útjaira elkísérte, titkári teendőket végzett körülötte s nem egyszer közösen hangversenyzett a hírnévben gyorsan növekedő Károllyal.

Károly nagyon szép és igen kedves gyermek volt. Karcsú növésű, finom csontozatú, szőkehajú, nagy fekete szemű, okos, melankólikus tekintetű. Zene sugár-zott egész lényéből. Jónevelésű, kellemes gyermek, amit az is bizonyít, hogy játszótársa volt Ferenc Józsefnek. Valószínűleg Bánffy grófék révén került az udvarhoz. Zsófia főhercegnő, Ferenc József anyja, megengedte, hogy a szászsebesi pap fia a későbbi uralkodónak gyermekjátékaiban résztvegyen. Ebben az időben, 1837-ben, tehát hét éves korában, ezt a figyelemreméltó vonásokat mutató, gyermekien naív levelet írta Károly Bécsből Szászsebesre édes-anyjának:

«Bécsben vagyok. Voltam a császárnőnél és zongoráztam előtte és kaptam egy arany kelyhet, amit emlé-kül édesanyámnak ajándékozok. Ha megint együtt leszünk édesanyámmal, akkor inni fogunk abból a császárnő egészségére. A császárnőtől még sok játékot kaptam és egy nagy képeskönyvet. Nagyon szorgalma-



san fogok tanulni és azután visszatérek Szászsebesre a grófnéval. Játékokat fogok vinni Julinak, Lottinak és a kis Lujzának és Edének lovaglóstort és Zseninek, barátomnak, egy képeskönyvet és Zsuzsinak egy selyemkendőcskét — piros stráfos selyemkendőt —, testvéremnek, Lujzinak, sárga ruhát és Zsófi testvéremnek fehér báli ruhát. Sok operát láttam. Láttam a «Szerelmi bájtal»-t, a színpadon katonák masíroztak trombitával. Kedves Anyám, én nagyon szeretem magát, Szepit is szeretem és ha eljön ide, annak nagyon fogok örülni és meg fogom mondani a császárnőnek, hogy Szepi jobban tud zongorázni, mint én és mutassa meg a kelyhet annak a tanítónak, aki a második osztályban tanít. Ez a negyedik levelem és fogok tanulni franciául olvasni és írni és beszélni. Drága mamára gondolással hálás és szerető fia: Károly.»

Nyolc éves korában a gyermek Bécsből így ír az apjának (1838 február 19.) «Nekem és Szepi bátyámnak jól megy a sorunk, ma valóban jó napunk volt és mindjárt mindent meg akarok írni édesapámnak, hogy örülhessen. Ma van Hohenzollern hercegnőnek a születésnapja és Gallenberg grófné hangversenyt rendez a tiszteletére és ott Szepi bátyám először fog játszani sok nagyúr előtt. Bauer professzor gordonkán fogja kísélni, aztán Szepi improvizálni fog. Bánffy grófnénak köszönhető, hogy Szepi bátyám a hangversenyen szerepel. Én is ott leszek Bánffy grófnéval, de mert ma legkedvesebb operámat, «Zampá»-t, játszák és a grófné odaajándékozta páholyát Wieck Klárának, én előbb az operába megyek Wieck Klárával és azután Gallenberg grófnéhez. Igen örülök a

mai estének. Hogy fog Szepi játszani? — azt nem tudom. Ő majd holnap mindent megír, mi, hogy történt. Minthogy a beteg Batthyány grófné a palotában lakik, azért Wieck úr tíz nap óta nem adott leckét nekem, de csütörtökön már kapok leckét és azután még többet. Kedves anyámat sokszor csókolom és a testvéreket és Zsuzsit is és minden kedves barátomat szívemből üdvözlöm. Minden jót kívánok kedves jó apámnak és csókolom a kezét, hálás fiatok: Filtsch Károly.»

Még egy levél ebből az időből (1838 március 6.), melyet kedves hangjáért is érdemes elolvasni: «Régen nem írtam kedves mamának, egészséges vagyok és Szepi is. Délelőtt Bánffy grófnéval hangversenyen voltam. Sallamon kisasszony játszott és nekem nagyon tetszett. Koncert után Bánffy grófnéval és Fuchs grófnéval Kolowrat miniszter feleségéhez kocsiztunk, ott sok képet láttam, két papagály is volt ott, de ezek nem tudnak olyan jól beszélni, mint Eszterházy Ferencné grófné papagálya. Az sokkal jobban tud. Kolowrat grófnétól Bánffy grófnéval Eszterházy Ferencné grófnéhez mentünk ebédre. Ott volt Sallamon kisasszony is, aki egész délután zongorázott este 7 óráig, aztán Eszterházy Lajosné grófnéval színházba mentem. «Straniera»-t adták, tudja kedves mama, amit már a papával Nagyszebenben láttam, akkor Zsuzsi is velünk volt. Apámnak már sok levelet írtam és ezúttal nem írok neki. Kedves mama, hogy van, egészséges? Nagyon örülnék, ha egyszer mama is írna nekem. Valakit nagyon szeretek, azt Pepinek hívják. Isten vele kedves mama: Filtsch Károly.»



(Utóirat.) «Még valamit. Én és Eszterházy Lajosné grófnő nagyon szeretjük egymást, igen gyakran megyek hozzá és vele a színházba, társaságban is voltam vele a Krüger-Strassén. A kis Tónit nagyon szeretem, még jobban, mint a barátnőmet, Wellmann Gusztit, mert Tóni szebb, mint Guszti. Nagyon sajnálom, hogy Lajos grófné Pozsonyba utazik, mert akkor nem fogok olyan gyakran színházba menni. Kedves mama, ezt az utóiratot a papának írtam, hogy ő is örülhessen. Isten megáldja, kedves mama, csókolom a kezét, hálás fiok: Filtsch Károly.»

Három évi bécsi zenetanulás után először tíz éves korában lépett Filtsch Károly a nagy nyilvánosság elé. 1841 február 7-én volt a hangverseny a bécsi zeneegyesület termében. Az igen előkelő s nagyszámú közönség soraiban ült az anyacsászárnő és Ferenc Károly főherceg. A kis művész Herz Henriknek, akkoriban igen híres német zongoravirtuóznak, kit üres, divatos szerzeményeiért «a zongora toiletemesteré»-nek neveztek, aztán egy fantáziát és egy etüdöt. Rendkívüli sikerrel. A hangversenyről a bécsi ujságok magasztalóan írtak.

Ez év nyarán a két testvér szülei látogatására hazajött Magyarországra. Utközben több hangversenyt adtak. Az elsőt Pesten, a redout-ban, 1841 június 17-én, a következő műsorral: Thalberg zongorafantáziája a «Straniera» egyik motívumára; Filtsch József «Magyar melódiák» című szerzeménye (megjelent Bécsben, egy példányát a Nemzeti Zenede könyvtára őrzi); Koronázási-fantázia (Krönungs-Phantasie) zongorára, Herz szerzeménye, — melyeket a kis Filtsch

adott elő. A zongoraszámok közt Urbany kisasszony áriákat énekelt, Lendvay-asszony szavalt és Schlesinger Ede gordonkaművész szólót játszott. Filtsch Károly zongorázása a leglelkesebb tetszést váltotta ki. Erről a hangversenyről írta többek közt a «Honművész», hogy «*Filtsch Károlyból Erdély Lisztje lehet*». Hazafelé térő útjuk folyamán a Filtsch testvérek Kolozsvárt adtak két hangversenyt (augusztus 10. és 17.) a Nemzeti Színházban, majd Nagyszebenben és Brassóban kettőt-kettőt. Általános csodálatot keltve. Ezekről és a következő magyarországi hangversenyekről részletesebben ír az Ostland 1920 augusztusi és szeptemberi számaiban Marie Klein: «Karl Filtsch» című értékes tanulmányában (megjelent Nagyszebenben), melyből több adatot felhasználtam. Az otthoni, szászsebesi és a szomszédos városokban tartott hangversenyekről általánosságban csupán annyit jegyzünk fel, hogy azok diadalmas ünnepekkel egybekötött koncertek voltak. Lovas bandérium, díszkapu, szónoklatok, dicsőítő versek, babér, szerenád és virágerdő mindenütt. A hangversenyek a jótékonycélt szolgálták.

Filtsch Károly és testvérbátyja ősszel Bánffy grófokkal visszament Bécsbe. Boldogságban úszva szállt a lelkészcsalád búcsúja a távozók után. Milyen jó, hogy az ember nem tudja előre a sorsát. Ekkor látták utoljára Károly fiukat a szülők.

A Filtsch testvérek csak rövid ideig maradtak Bécsben. Bánffy grófokkal úgy határozták, hogy Párisba mennek, mert Károlynak továbbképzésben egyetlen megfelelő mestere: Chopin.

November 20-án indultak Párisba, miután Károly



Metternich herceg kancellárnál búcsúhangversenyt adott.

Páris akkor, rövidebb időre, Béccsel szemben a világ vezető zenevárosa volt, mert ott élt Liszt, Chopin, Rossini, Thalberg s számos jelesebbnél-jelesebb mester. Chopin különös, törékeny, arisztokratikus lénye és bensőséges művészete állott a zenei érdeklődés középpontjában. Nyilvánosan keveset szerepelt és mégis mindenkit magához vonzott. «Sem kalandok, sem külső viszontagságok, sem epizódok nem jelölték pályáját, — írja szép Chopin-könyvében Liszt — ő egyszerűsítette életét, bár körülményei ezt megnehezítették. Érzelmei, a lelkét ért hatások tették életének eseményeit; ezek az ő számára kiemelkedőbbek és jelentősebbek voltak, mint a külső változások és történések. Zongoraleckéket állandóan adott, rendszeren, szorgalmasan, mindennapos házi feladatul tekintette, lelkiismeretesen és eléggülten.» Chopin párisi tartózkodásának egész tartama alatt, tehát az 1831. évtől egészen haláláig, — kivéve az 1838—39-iki Majorca szigetén töltött telet — csaknem állandóan mint zongoratanító működött. Sok tanítványa volt, a legelőkelőbb párisi családok valósággal ostromolták őt leckék adásáért, de hivatásos zongorajátszó, kevés került a keze alá.

Chopin Bánffy grófné kérésére vette fel tanítványai közé Filtsch Károlyt. A leckéket a grófné fizette. Óránként 60 frankot. Hetenként háromszor ment órára Filtsch Károly Chopinhez.

Párisi tartózkodásának ezt az idejét legjobban a fiúcskának szüleihez írt levele világítja meg (dátum nélkül, 1842. év elejéről): «Már egy egész hónapja,

hogy Párisban vagyunk. Sokat láttunk és hallottunk. Voltunk a nagyoperában, az olasz királyi színházban és az Opera Comique-ban. Ott hallottuk a Normát, Lucrezia Borgiát, Cenerentolát. Ezekben az operákban Lablache, a világ első basszistája, Tamburini, Mario, Dupress, a hölgyek közül Grisi és Persiani tűnt ki. Az operák kiállítása pompázó, a díszletek szépsége leírhatatlan. Ezt látni kell, hogy fogalmat lehessen róla alkotni. Voltunk a Konzervatóriumban is és egy nagyon szép szimfóniáját hallottuk Haydn Józsefnek, aztán egy háromszáz éves chorált, a híres klarinétost, Cavallinit, aki Bécsben is fellépett, több szerzeményt Mozarttól és Beethovennek egy szimfóniáját. Rég ismeretes, hogy a párisi Konzervatórium zenekara az egész világon a legelső. Olyan hatást gyakorolt rám, hogy egészen fellelkesített. Megismerkedtem több úrral és hölgygel. Éspedig *Chopinnel*, Erarddal, a híres Boildieu feleségével és Dessauer úrral. *Chopin — amint kedves szüleim is tudják — éppen olyan nagy művész a zongorán, mint amilyen zeneköltő és minden másodnap leckét ad nekem.* Karácsonyra a jó grófnétól egy kabátot, két mellényt és óraláncot kaptam. Jó testvérébátyám Thalbergnek egyik fantáziáját ajándékozta nekem és ezeken kívül kaptam még a grófnétól egy francia történetet, amelyik tanításul és egyben szórakozásul szolgál. Névnapomra meglepett a grófné egy szép írómappával, sok papírral és írószerszámmal, valamint egy nagyon tanulmányos könyvvel. Szeretett szüleim, Isten velük és üdvözljenek a legszeretetre méltóbban mindenkit, akik rám emlékeznek. Maradok sok kézcsoókkal engedelmes fiok.»



Chopin új tanítványát csakhamar megszerette, többször kivételes gondosságban részesítette s az előkelő társaságok zenéléseire többször magával vitte. Közben a tanulás szorgalmasan folyt. Liszt Ferenc is adott leckét Károlynak, mikor Chopin vidéken volt. Liszt egyik leveléből is tudjuk ezt, melyet Filtsch Károlynak írt. (La Mara: Franz Liszt Briefe I. 47. l.) A levél ez: «Nagyon sajnálom, hogy holnap szokott óráinkban nem állhatok szavamnak! Az ön fausses notes-jai (hamis hangjai) sokkal kellemesebbek volnának számomra! de ha csak nem rendezhetné el úgy a dolgokat, hogy meg lehessen önt hallani a Notre Dame-tól a kölni dómig, tényleges lehetetlenség volna megtartani a mi lecke-féléinket, tekintve azt, hogy holnap este én már Kölnben leszek.

Hogy visszatérek-e és mikor térek vissza — nem tudhatom. Akármi történjék, *tartson meg szíves emlékezetében s számítson őszinte szeretetemre és odaadásomra.*

F. L.

Sok meleg üdvözlét József fivérének. Még egy Isten hozzád — szívből ölelem. — (Compiègne, szerdán délelőtt (1842 vagy 1843).» Ez az értékes levél sokáig gróf Amadé Tádé, magyar zeneszerző birtokában volt.

Filtsch Károly kezdett hozzátartozni Páris legmagasabb zenei életéhez. Csaknem mindig ott található Liszt és Chopin környezetében De la Rochefoucauld herceg, Rotschild báróék, Erard, D'Agoult grófné, gróf Apponyi, magyar követ, George Sand estélyén és hangversenyein feltűnést kelt. Rövid időre Brüsszelbe utazik, hol a porosz királyné testvére előtt

játszik. Aztán ismét a párisi szalonok hangversenyei következnek, melyek közül nem egyszer három is esett egy napra.

Művészeti és szellemi kvalitásokkal bírta Károly a párisi ragyogás iramát, de szervezetileg — nem. Betegeskedni kezdett. Első nyilvános hangversenyét Párisban 1843 március 15-re meghirdették, mikor a láz tizennégy napig leveri a lábáról. Apponyi gróf saját orvosát küldi el hozzá. Betegágyát Chopin, Erard, George Sand, la Rochefoucauld herceg látogatja. Ajándékokkal kedveskednek a beteg gyermeknek.

Károly néhány hét alatt felépült s Boulogne-on keresztül bátyjával Londonba ment. 1843 május 21-én érkeztek az angol fővárosba.

Június elején lépett Károly a londoni közönség elé a St. James színházban. Liszt egyik fantáziáját játszotta és Chopin Notturmo-i, Impromptu-i s keringői közül néhányat. Mély átérzéssel, hódítóan. Másnap matinét adott hasonlóan rendkívül sikerrel. Az angol lapok, a Morning Post, a Musical Examiner (1843 július 4. szám), a Musical World, hosszú cikkekben adtak kifejezést csodálatuknak és elragadtatásuknak. A londoni tartózkodásnak csúcspontja az a hangverseny (1843 július 5.), melyet Károly a fiatal Victoria királynő palotájában a legelőkelőbb társaság és a királynő jelenlétében adott. Három Chopin szerzeményt játszott. Erről az eseményről azt jegyezték fel, hogy *Chopin műveinek addig Angliában ilyen sikere sohasem volt.* A királynő elismerése jeléül Károlyt gazdagon megajándékozta.

Két hónapi londoni tartózkodás után a Filtsch



testvérpár Baden-Badenen át visszatért kedvelt városába, Bécsbe, ahol Károly az udvari operában a császári pár előtt hangversenyezett. Szintén tüneményes sikerrel. 1844 januárjában (11-én) még Bécsben egy hangversenyt adott a «kis, nagy művész» a zeneegyesületben (Musikverein), ahol saját szerzeményét játszotta, melyből a kritika Károlynak, mint zeneszerzőnek is nagy jövőt jósolt. A szerzemény — sajnos — elveszett. Tervezték aztán egy nagyszabású művészi körutat, melynek főbb állomása Prága, Drezda, Berlin, Lipcse és Nápoly lett volna, — de a sors másként határozott. A tüneményes művészpálya ívelő vonala megtört. A fiatal fiú súlyosan megbetegedett. Tüdőbaj támadta meg, mint világhírű mesterét: Chopint. Az orvosok délvidéket ajánlottak. Bánffy grófék mindent megtettek megmentésére. A grófné feloszlatta bécsi háztartását s a beteggel 1844 tavaszán Velencébe költözött. Hiába, a romboló kór feltartóztathatatlanul pusztított.

Halálát az Erdélyi Híradó így jelentette: «Filtsch Károly Velencében, (1845) május 11-én, éjjel 1 órakor meghalt. A hirtelen kinyílt virág, mely pompás gyümölcsöt ígért, túlkorán lehullott és távol hazájától alszik a mindenhol csodált, mindenhol szeretett, fiatal művész az Adriai-tenger lagunái közt. Egy kis szigeten, Velence és Murano közt, alussza a halottak álmát. Temetése — egy hozzánk írt levél szerint — szép és megható volt. Barátjának, Wittchen nevű érdemes papnak beszéde és imája szívhezszóló. A halotthoz méltó a zene. Beláthatatlan sora a gondoláknak, mely a koporsót kísérte...»

Bánffy grófné kedvencének sírjára, kit önfeláldo-

zóan, anyai odaadással ápolt, márvány emléket állíttatott. Bánffy Dionysia grófnő, Filtsch Károly mecénása, Bécsben, 75 éves korában, 1863 október 23-án, halt meg.\*

\*

Filtsch Károly a zenei csodagyermek aranykorában élt, mely idő Mozart századában kezdődik. A zenetörténet számos csodagyermeket ismer, kiknek sorában ott találjuk a zeneművészet legnagyobbjainak legtöbbjét. Akármilyen nézete is volna bárkinak a csodagyermek általános élettani és zenepszichológiai, ma is eldöntetlen értékéről, annyi bizonyos, hogy a zenetörténet országútján ők a legvonzóbb és legérdekesebb állomások. Köztük is a legelső csoportjában tündöklék Filtsch Károly, a szászsebesi pap fia, ki tizennégy és fél éves korában már itthagya életének virágos útját, aki Erdély, Pest, Bécs, Páris, Brüsszel és London zenei közvéleményét csodálkozásba ejtette, kiről olyan szavakat, mint aminőket Chopin és Liszt mondott róla, a zenetörténet senki másról nem őriz. Fenn kell tehát tartani emlékét a magyar zenehistoria megszépítésére.

\* («Blätter für Theater, Musik und Kunst» Wien, 1865 okt. 27. XI. évf. 86. sz.)



## JEGYZETEK ÉS FORRÁSOK

### *Filtsch Károly Chopin magyar tanítványa című tanulmányhoz.*

A tanulmányban felsorolt forrásokon kívül —

Pesti koncertről: 1844 június 20. és 24. (Honművész 49. és 50. sz.)

Bécsi hangversenyről: 1844 január 6. és 9. Allgemeine Wiener Musik-Zeitung.

Részletes kritika a lap január 16-iki számában. Filtsch saját Scherzo-ját is játszotta.

Bécsi hangversenyről: 1844 február 24. Allg. Musikz. (Ezt a koncertet nem tartotta meg.)

Betegségéről, velencei útjáról: Allg. Musikz. 1844 márc. 7.

Haláláról: Allg. Musikz. 1845 jan. 25.

Allg. Musikz. 1845 máj. 29.

Der Ungar 1845 máj. 30.

Filtsch Károly és József kiadatlan levelei Marie Müller asszony és Matilde Schotsch asszony birtokában. Ujságcikkek, kivonatok, emléktárgyak Auguste Filtsch kisasszonytól.

A Hermannstädter Zeitung — Transsilvania — Siebenbürger Bote 1838—1845. évfolyama.

Marie Klein tanulmánya: Karl Filtsch, Ostland 1920 aug. és szept. számaiban.

Über einen den Chopin liebte, angol eredetiből német kivonat von Irene Anderws geb. Filtsch.

Geszler Udön: Zeneművészeti írások, 1924, 99. old.

Liszt Ferenc: Chopin élete (ford. Kereszty István).

La Revue Musicale Chopin-száma, 1931 december.

Friedrich Niecks: Fr. Chopin als Muster Musiker und Mensch, angol fordítása von Dr. WW. Langhans Verlag Leipzig, 1890, 151—153. old.

## NIETZSCHE PETŐFI-DALAI

Az elég gazdag magyar nyelvű Nietzsche-irodalomban több helyt olvastuk, hogy Nietzsche, a nagy német filozófus, Petőfi dalokat zenésített. De hogy ezek a dalok milyenek, hol vannak? — mindmáig nem tudtuk. Újabban *Kornis* Gyula a dalok egy példányának birtokába jutott, a díszes kótakiadványt a Petőfi-Múzeumnak ajándékozta, a szerzeményekről értékes tanulmányban számolt be a Petőfi-Társaságban s a dalokat a rádióban bemutattuk, megszólaltattuk, újabb adatként dicsekedve azzal, hogy Petőfinek, a nagy magyar lángelmének gyújtó szelleme Nietzschét, a nagy német lángelmét, alkotásra ihlette. Ezek a művek Nietzsche filozófiai munkásságát nem érintik és nem is jellemzik. A zene területén maradnak, de ott is bizonyítják, hogy a zseni minden téren zseni s jórészt a körülmények terelik erre, vagy arra az útra.

Ha Nietzsche a zene területét választotta volna s ott olyan készséget szerez, mint amilyennel a filológia, a filozófia, vagy az írásművészet terén rendelkezett, — neve bizonyára a zene nagyjai sorában állana, — mint ahogy Arany János zenei foglalatosságából is kitűnik, a zeneköltői tehetség. De a teljes zenei kész-





NIETZSCHE

Krasner Arnold szobrászművész alkotása (1898)

„NIETZSCHE FRIGYES ELETE ES MŰVE” M. MAYER.

C. H. BECK KÖNYVKERESKEDES KIADASA

OSKAR BECK, MUNCHEN





ség megszerzése fáradságos, hosszadalmas s erre mód nem könnyen adódott, így aztán Nietzsche csupán előkelő műkedvelőnek számít.

Kiemeljük azonban, hogy *a nagy filozófusok közt Nietzsche a legjobb zenész*. Mindenik filozófus bele-szólt a zene dolgába, mindenik beszél a muzsikáról, keresi és magyarázza annak lényegét, de zenélni egyik sem tudott, hangszerjátészó egyik sem volt, — Nietzsche filozófus-eszményképe, *Schopenhauer* kivételével, — aki jól fuvolázott. Ez egymagában nem ad lényegesebb zenei alapot, de mégis zenei anyagból készült egyik támasza lehet a zenetudósnak, vagy a zeneszerzőnek. *Schopenhauer*: a zenészek filozófusa, akiről egyik leve-lében (Ervin Rohdenek, Lipcse, 1868 nov. 9.) Nietzsche azt írja, hogy «ő az egyetlen filozófus, aki meg-értette a zene lényegét».

Nietzsche *Schopenhauer*nél sokkal jobb elméleti és gyakorlati zenész volt. Hangszere, a zongora, a zene-irodalom megismerésére a legalkalmasabb eszköz. Jól zongorázott. Hol, kitől tanult, nem jegyezték fel, de *Wagner*rel és *Liszt*tel négykézre játszott. Szabályosan összhangosított s a hangszereléssel is kísérletezett. Egyszóval, a zeneművészet alapvető dologbeli részével tisztában volt.

A zene szelleme, úgyszólván, egész életén ural-kodott. Egyik levelében írja (Malwida von Meysen-burnak, Nizza, 1884 febr.):

— Volt-e valaha ember, aki zenére úgy szomja-zott, mint én?

Egy másik levelében ezt olvassuk (Ervin Rohode-nek, Lipcse, 1869 febr. 22. és 28.):

— Még semmit sem mondtam a *Mesterdalnokok*

első drezdai előadásáról, pedig ez volt a télen a legnagyobb zenei örömöm. Tudja Isten, *úgy látszik, mégis csak muzsikusvér folyik az ereimben*, mert akkor, egész idő alatt igen elevenen élt bennem az az érzés, hogy egyszerre hazakerültem és otthon vagyok s többi életem, mintha valami távoli köd lett volna, amiből megváltottak.

A zene főként Nietzsche serdülő és ifjúkorát töltötte be. A pfortai gimnáziumban sok idejét szentelte a zenének. Gersdorff nevű iskolatársa ezt jegyezte fel: «Esténként hét és félnyolc óra között a zeneteremben jöttünk össze. Rögtönzései felejthetetlenek számomra, azt hiszem (írja Gersdorff túlzóan), hogy maga Beethoven sem tudott volna megragadóbban fantáziálni, mint Nietzsche.»

\*

Nietzsche zenei arcképének csak azokra a vonásaira vetjük a tekintetüket, melyekben *magyar vonatkozás* rejtőzködik. Mindenekelőtt Petőfihez kapcsolódó viszonyát keressük. A szabadság legnagyobb dalnoka, Petőfi, lánglelkével felgyújtotta Nietzsche érdeklődését a magyarok iránt. Három magyar ember hatása vezette el Nietzschét Petőfihez. A legnagyobb magyar zeneköltő, Liszt Ferenc, Meltzl Hugó, szászrégeni születésű egyetemi tanár és Kertbeny Károly, a lelkes fordító. Nietzsche tizennyolc éves korából származó jegyzetei közt olvassuk: «*Megismertem Petőfit*». Ettől a pillanattól kezdve Petőfi szelleme végig kíséri egész ifjúságán és lelkének alkotórészévé válik. Petőfi költeményeit Kertbeny fogyatékos fordításában ismerte meg s mert abban az időben zenében gondolkozott,



öt dalát megzenésítette. Mi sem mutatja jobban Petőfi költői erejét, mint az, hogy a vers silány átültetés mellett is megragadta Nietzsche képzeletét.

Az öt dal közül egy elveszett s a német kiadásban közzétett öt dal közül az egyik (*«Es winkt und neigt sich»* kezdetű), nem Petőfi vers, úgyhogy valójában négy Nietzsche—Petőfi zenésítést ismerünk.

Nietzsche 1864 novemberében és december elején, húsz éves korában, mint bonni egyetemi hallgató, komponálta Petőfi dalait. Elküldte édesanyjának és húgának utasításokkal, miként kell azokat énekelni. A dalok tipikus német zongora-dalok. Alapvonásuk az egyszerűségekre való törekvés. Népies egyszerűség lenne ez, természetesen német népiesség. Nietzsche-től magyaros népiesség nem is várható. Petőfi Nietzsche szeme előtt, mint a magyar népies költészet alakja lebegett. Nietzsche a deklamálás művésziességére, a szöveg értelmének kiélezésére törekszik. Stílusa Schubert—Schumann—Brahms vonalán jár. Legközelebb Schuberthez áll felépítésben, harmóniákban és dallamleleményben egyaránt. Kótáiból bizonyos hangulati légkör kialakul, de Petőfi költeményeinek hangulatához egyik sem ér fel. Ha elfelejthetnénk Petőfi költeményeinek fenségét s a Kerthény-féle német szöveg mellett nem állana a lánglelkű költő neve, — a dalok zenei értéke nagyban emelkednék. Így a dalok inkább csak *érdekeselek* s legnagyobb értékük az, hogy a kultúrtörténet két nagy nevét egyesítik.

\*

A megzenésített négy Petőfi-dal a következő:

1. Ereszkedik le a felhő.
2. Te voltál egyetlen virágom.
3. Te vagy, te vagy barna kis lyány.
4. Szeretném itthagyni a fényes világot.

A verseknek a fordító s némelyiknek a zeneköltő más címet adott. Georg Göhler értékes kiadványában (Musikalische Werke von Friedrich Nietzsche, Lieder für eine Singstimme, Fr. Kistner et C. F. W. Siegel, Leipzig, 1924.) ezek alatt a címek alatt találhatók meg:

1. Ereszkedik le a felhő — német címe — *Ständchen*.
2. Te voltál egyetlen virágom — német címe — *Verwelkt*.
3. Te vagy, te vagy barna kis lyány — német címe — *Unendlich*.
4. Szeretném itthagyni a fényes világot — német címe — *Nachspiel*.

A *Ständchen* című *A felhők* gyönyörű ciklusából az *Ereszkedik le a felhő*. Az őszi hervadás melanchóliájának költeménye. Azt írja hűgának a mű előadásáról Nietzsche, hogy «mert a kíséret kissé nehezebb, a dallamot nagyon könnyedén kell énekelni. Azon fordul meg a dolog, hogy minden versszak utolsó sorát ki kell emelni. A *Ständchen*, vagyis «éji dal» zongorakísérete szokásosan gitárszerű, strófás szerkezetű, ami a művet elszürkíti.

Ezt a szöveget a magyar zeneszerzők közül heten zenésítették. Közülük Egressy Béni zenésítése a legismertebb.

*Verwelkt*. A Nietzsche—Petőfi dal a *Te voltál egyetlen virágom* az Etelke sírjáról tépett Cip-



*ruslombok* egyik legszebb örökzöldje. Benne a fájdalom szívbemarkoló metaforáit halmozza a költő. Bizonyos zenei befejezetlenség érződik kótáiból.

Zenei magyar feldolgozását nem ismerjük, holott közel 1000 Petőfi névéhez kapcsolódó zeneművet tart nyilván az irodalom.

*Unendlich.* A Nietzsche—Petőfi dal a *Te vagy, te vagy barna kis lány* a szerelem (nyugtalan, bánatos, elégikus költeménye. A német «Lied» egyik jó példája. Nietzsche rendkívüli zenei tehetségének letagadhatatlan bizonyítéka. «Teljes szenvedélyességgel kell előadni» — írja róla hűgának a zeneköltő.

Ennek a szövegnek öt magyar zenésítőjét ismerjük. Közülük *Simonffy Kálmán* és *Balázs Árpád* zenésítése a legismertebb.

*Nachspiel.* A Nietzsche—Petőfi dal a *Szeretném itthagyni a fényes világot*. Belső, zokogó fájdalom. Talán ez a legértékesebb a négy dal közül. Dallambeli leleménye előkelő, akár a nagy dalköltőké. Azok közül az alkotások közül való, amelyeket meg lehet szeretni.

\*

Nietzsche zeneszerzői munkássága elég gazdag s annak magyar vonatkozásai — a Petőfi-dalokon kívül is — figyelmet érdemelnek. A Nietzsche-ről szóló irodalom említ egy «*Ermanarich*» című zenedráma-tervet, melynek első részét Nietzsche megírta zongorára. Megjegyzése szerint, számos magyar motívumot szőtt bele. 1862-ben három magyar vázlatot szerzett zongorára *Holdfény a pusztán*, *Édes titok*, *A csárdában* címen.

Ugyanebből az évből maradt fenn a *Hősök panasza* és *Magyar induló* című zongoradarabja. De akad még talán több magyaros vonatkozású szerzemény is a weimari Nietzsche-Archiviumban, ahol a szerző saját kézzel írt kóráit és egyéb zeneszerzeményeit őrzik. Nem volna hiábavaló, ha a kéziratokat egy magyar zene-tudós megnézné, bizonyára lappangnak ott olyan értékek, mint a Petőfi-dalok.



## WAGNER PESTEN

A budapesti Dunaparton a Hungária szálló falában áll egy hatalmas szürkemárvány emléktábla, melyet Wagner Richárd dacos művészfejének bronzdomborműve díszíti. A kőbe vésett aranybetűkből az arra sétálók ezt olvashatják:

Ebben a szállóban alakult meg  
1872-ben a Pesti Magyar Wagner Egylet.

Apponyi Albert gróf,  
az örökemlékű államférfi, volt első titkára.  
Az egylet hívására a végtelen melódiák költője:

### WAGNER RICHÁRD

1875 március 6-án, Budapestre érkezve,  
itt szállt meg feleségével, Liszt Cosimával,  
a magyarság büszkeségének, Liszt Ferencnek leányával.

*«Szállj, szállj Odinhoz! Zengő álmaid  
Beharangozzák a föld határait.»*

Reviczky Gyula verse (1883).

Ezt az emléket a mester halálának  
félszázados fordulóján állította a  
Hungária nagyszálloda Rt.

Az emléktábla egyik szerény jele annak a régi és bensőséges kultusznak, mely Wagner Richárd művészetét magyar földön körülveszi. A magyarországi Wagner-kultusz olyan régi, mint a németeké. *Magyarország volt az első, ahol hazáján kívül megértették és megbecsülték Wagnert.* Mi, már akkor szeretettel fogadtuk műveit és őt magát, mikor lángeszét a világ még nem ismerte el. 1853-tól kezdve, — mikor «Tannhäuser»-ének nyitányát a Magyar Nemzeti Múzeum nagytermében rendezett hangversenyen Filharmoniai Társaságunk bemutatta — tapsoltunk és tapsoltunk alkotásainak. A magyarországi wagnerizmus mélyebb gyökerű, mint bármely más országé, ami abból is látszik, hogy Wagner művészetének hatása a mult század második felében végigvonul az egész magyar zenei életen s napjainkban sem veszített erejéből.

A magyar Wagner-kultusz ereje nem meglepő, ha a legnagyobb magyar zeneköltő, Liszt Ferenc és Wagner viszonyára gondolunk. Liszt dicsősége teljében volt, mikor a szegény és sorsüldözött fiatal német karmestert megismerte. Ő volt az első, aki zsenijétől elragadtatva, szárnyai alá vette őt. Barátságába fogadta, gondoskodott róla, a nélkülözött segítette, műveit előadatta, alkotásait zongorára átírta, hangversenyein mindenütt játszotta, terveit, törekvéseit mindenben segítette. Bátran mondhatjuk, hogy Wagnert ő ismertette meg és ő ismertette el a világgal. Wagner maga mondta: «Liszt Ferenc nélkül sohasem lettem volna az, aki vagyok».

Liszt Magyarországon, saját hazájában, természetesen nagyobb sikerrel népszerűsíthette Wagnert, mint



máshol. Ennek eredménye volt, hogy a mester operái nálunk gyors egymásutánban sorra kerültek, hogy a Wagner Egylet megalakult és eredményes működést fejtett ki s végül, hogy a «jövő zenéjé»-nek mestere két ízben járt nálunk és hangversenyeken vezényelte műveit.

A magyarországi Wagner-kultusz széles medrét mutatja az is, hogy a magyar nyelvű Wagner-irodalom elég gazdag. Aránytalanul értékesebb és terjedelmesebb, mint bármely más zeneköltőről szóló literatúránk. Napilapjaink, hetilapjaink, folyóirataink hasábjain Wagner neve nyolc évtized óta sűrűbben fordul elő, mint bárkié a zeneművészet nagyjai közül, kivéve talán Liszt Ferencét. Sok tanulmányfüzet foglalkozik Wagner művészetével. Minderről tartalmas könyv ad részletes tájékoztatást, mely a Magyar Tudományos Akadémia kiadásában jelent meg, 1916-ban. («Wagner Richárd és Magyarország», írta: Haraszti Emil, 293 l. sz.)

Kevesen tudják, hogy Wagner első budapesti látogatásakor annyira megkedvelte a magyarokat, hogy le akart telepedni Pesten. A zeneköltő ekkor a Bécs melletti Penzingben lakott. Innen hívták meg Wagnert, hogy a telet töltse Pesten, ahol műveit a Nemzeti Színházban bemutathatja és hangversenyeket vezényelhet évi fizetés ellenében. Az ajánlat tetszett Wagnernek, amit Penzingből Mosonyi Mihályhoz intézett 1863 október 12-én kelt levele mutat. Miért nem lett ebből a tervből semmi? — nem tudjuk, de a szándék maga nagy melegséget sugároz felénk.

Ugyanez látszik abból a levélből, melyet ugyancsak Penzingből ugyanebben az évben (1863 aug. 8.) írt Abrányi Kornélnak, a Zenészeti Lapok főszerkesztőjének. Wagner pesti tartózkodása alkalmával ugyanis Reményi Ede több magyar kompozíciót adott át a zeneköltőnek tanulmányozás végett. Azokat Wagner penzingi otthonában áttanulmányozva, írta az említett levelet, mely a lángelme éles előrelátásával körvonalozta a magyar zene fejlődési lehetőségeit. Ez a levél valóságos kátéja a magyar műzenének. Annak idején nagy feltűnést keltett, majdnem az egész európai sajtót bejárta. Érdemes elolvasni:

«Tisztelt szerkesztő úr!

Pesti tartózkodásom ideje alatt Reményi Ede barátunk nagyobb mennyiségű zeneszerzeményt adott át «magyar zenészeti tanulmányok s kísérletek» címen és ajánlat mellett, melyekkel csak most van alkalmam közelebbről megismerkedni s melyek feletti kiváló örömet szeretném önnek közölni.

Kapcsolatban azzal, amiket együttlétünk utolsó estéjén a zene «nemzeties» vonása felett nagyobb-számú baráti kör előtt nyilvánítottam, szabadjon ezúttal azt, ami a szóbanforgó zeneszerzemények szellemébe való mélyebb behatolás mellett műtörténelmi tekintetben előttem jelentékeny vívmányként tűnik fel, röviden a következőkben összegezmem:

Azt hiszem, hogy önök abbéli törekvése, hogy a magyar nemzeti dalt oly módon akarják művésziileg kimívelni, hogy aztán a mi kifejlett műzenénkkel közvetlen érintkezésben állhasson: legbiztosabb sikert



nyújt általában Magyarországon a zeneművészet emelésére és kifejlesztésére.

Míg ha ez nem következik be, mindaddig az önök hazájában veszedelmes, sőt ártalmas különbség lesz a nemzeties elem és annak csak felületével érintkező műzene közt elannyira, hogy a nemzeti zene, vagyis a népdal s tánczene mindinkább a süllyedő s hátramenő naturalizmus zsákmányául esik, annál is inkább, mert maga a műzene is pusztán csak felületes termékei után értelmeztetvén, méltányoltatván, csakis elkorcsosító és elvadító hatást gyakorolhatna amazokra.

Hogy mit értek ez alatt, tisztán áll ön előtt, ha a magyar népdalokban — mint egy elzárt aknában — rejlő ritmusbeli és harmóniai gazdagságot azzal a nagy szegénységgel hasonlítjuk össze, mely az újabb olasz operazene terén annyira visszatetszik minden korunkbeli művelt zenésznek. Nem lehet valami elszomorítóbb, mintha e szegénység a népzeneinek naturalista kezelőit is úgy elragadja, hogy azt a nemzeti zene elferdítésével annak jellegzetességéül tünteti fel.

Ebben az esetben épp oly káros eredménnyel számolhatunk, mint minden oly kívülről jövő s erőszakolt civilizációban, melynek az önállóság ápolt és kifejlesztett nemzeties elem nem képes ellentállni s mely úgy a magánélet, mint a népek polgáriasultságának különböző helyzeteiben annyi visszás s undorító jelenséget eredményezett.

Hogy minő változatosságot s kifejezési jelentékenységet lehet eredményezni, továbbá, hogy a népzeneben rejlő őseredeti gazdagságot szabatos művészi kezelés által mennyire lehet belbecsében emelni, ne-

mesbíteni és sokszorozni, éppen erről meglepőleg örvendetes bizonytságot nyújtottak nekem a velem közölt «magyar zenészet tanulmányok». Sőt, hogy a jellemzetes művészi feldolgozás miként képes a még tökéletes nemzeties elemből csaknem bevégzett tökélyű műzenészet termékeket alakítani: erre példa Mosonyi M. «Tanulmányok» című műve II. füzetének XIII. számú darabja. Ki ne ismerné fel ebben — mely feltűnő híven tükrözi vissza a magyar «Lassuk» eredeti típusát — azt a szellemet, mely Bach Sebestyén előjátékait átlengi? A magyar népzene ritmikai s harmónia sajátágaiba való mély behatolás természetsszerű bizonyítékokat nyújt a műzenében használni szokott ritmikai képletek s összhangzatosítások helyességére nézve, melyek csakis elméleti copfok előtt válnak megfoghatatlanokká s megengedhetetlenekké.

Ha tekintetbe veszem azt a pangást, tespedést, mely jelenleg a tulajdonképpeni műzene fejlődése terén félreismerhetetlenül bekövetkezett: csaknem hajlandó vagyok arra a merész következtetésre, hogy *a nemzeti zenészet terén tovább folytatott szerencsés fejlesztés a kiművelés folytán lehetőleg önöknek van fentartva s az, hogy annak további fejlesztésére jelfrissítő befolyást gyakoroljanak.* Annyi bizonyos, hogy ha az önök általam is felismert törekvései jótékony hatású visszhangra találандnak a magyar közönség előtt, azok az önök nemzetében az általános zeneművészet fejlődésének jeletle szerencsés, sőt mondhatni egyedüli igazán sikerdús alapját építik meg.

Penzingben, Bécs mellett, 8-ik aug. 1863.

Wagner Richárd.»





WAGNER RICHARD





Ha Wagner alkotásai magyarországi bemutatónak dátumait felsorolnánk, kitűnne, hogy legtöbbjével megelőztük a külföldet. A «Lohengrin» például Pesten előbb került színre (1866) mint bárhol, — Németország kivételével.

\*

Wagner Richárd két alkalommal járt Pesten, 1863-ban és 1875-ben.

Wagnert pesti barátai, főként Mosonyi Mihály s Reményi Ede és a Nemzeti Színház vezetősége hívta meg Pestre, hogy műveiből hangversenyt vezényeljen a színházban. 1863 július 18-án érkezett Pestre Penzingből. Az «Angol Királynő»-hotelben szállt meg. A másnapot barátai és tisztelői körében töltötte s megismerkedett Erkel Ferencceel, aki akkor a Nemzeti Színház karnagya volt. Július 20-án, hétfői napon tartotta Wagner az első próbát a Nemzeti Színház elsőemeleti próbatermében, több tisztelője jelenlétében. Mikor belépett, a zenekar Gayer János nevű kiváló trombitása F-trombitán C-durban (akkor még piszton nélkül) háromszoros fanfárt fújt, amitől, mint rendkívüli technikai virtuozitástól, Wagner annyira el volt ragadtatva, hogy odament Gayerhez, megölelte és beírta szólamába a nevét: «A legkitűnőbb kürtösnek, akit én valaha is hallottam: Wagner.» A próba folyamán ugyanígy megdícsérte Heimel Albin első klarinétost is.

Megjegyezzük, hogy Wagner operaházi zenekarunkban mindkét itt tartzkodása alatt annyi kiváló hangszeres művészt talált, hogy mikor Bayreuthban a «Festspielhaus» megnyitására készült, ezeket a zené-

szeket hívta meg a bayreuthi zenekarba és ültette a legfontosabb helyekre.

A fanfárjel után Wagnert Ridley, a zenekar első hangversenymestere, üdvözlő beszéddel köszöntötte. Általában a zenekarral nagyon meg volt elégedve. Így nyilatkozott: «Boldog lehet az a színház, amelyiknek ilyen zenekara van. Alig találtam még zenekart, mely rövid idő alatt így megértette, ily szabatosan és érzelemmel vitte volna ki eszméimet és intencióimat.» A zenekar július 21-én és 22-én ismét próbált a zeneköltő teljes elismerése mellett.

Wagner ittléte felvillanyozta Pestet. A meghívások áradatát július 22-én délután gróf Coronini, Magyarország katonai főparancsnoka, indította meg. A főparancsnok a Sándor-palotában, a mai miniszterelnöki palotában lakott. Az előtte levő téren hét katonazenekar nagy számban összegyűlt közönség jelenlétében részleteket adott elő Wagner műveiből. Kivált a «Rienzi» és a «Tannhäuser» nyitánya tetszett. Wagner előkelő vendégkoszorúban a palota erkélyén fagyaltozott. Este a híres császárfürdői bált látogatta meg, Reményi Ede és mások kíséretében.

Július 23-án, csütörtöki napon volt a hangverseny a Nemzeti Színházban. Rendkívüli siker, igen díszes közönség, az udvari páholyban gróf Pálffy Mór, a helytartó. Mikor Wagner a karmesteri dobogón megjelent, tomboló taps fogadta. A «Tannhäuser»-nyitány után a közönség nagy tapsától kísérve, Erkel Ferenc lépett a zeneköltőhöz s egy nagy babérkoszorút ezekkel a szavakkal adott át: «A Nemzeti Színházi Zenekar hódolatát nyújtom át e koszorúban.»



Wagnert a kitüntetés nagyon meghatotta. Megölelte és kétszer megcsókolta Erkel.

A műsor természetesen mind Wagner műveinek részleteiből állott. Az énekes szólisták kiváló magyar művészek voltak. Az előadás 1286 forintot jövedelmezett, ami rendkívüli eredménynek számított. Wagner «vendégdíjként» 500 forintot kapott. A magyar sajtó kivétel nélkül melegen emlékezett meg Wagnerről. Ezzel a magyar zenekritika mindig büszkélkedhetik, mert bizonyítja, hogy akkor, amikor a költőt nemcsak külföldön, de saját hazájában is többször ócsárolták, a magyar sajtó megértette művészi törekvéseit.

Wagner második pesti hangversenyét 1863 július 28-án tartotta. A közbeeső öt napon rendszerint próbák voltak, délután pedig séták a Zugligetben, vagy az arisztokrácia által divatba hozott csónakkirándulások a Szent Margitszigetre, melyet a zeneköltő nagyon megszeretett. Egyik ilyen kirándulás július 24-én csaknem végzetessé vált Wagnerre, mert a szigetről való visszatéréskor csónakjával szinte belefordult a Dunába. Erről az izgalmas kalandról «Önéletírása»-ban ezt olvassuk:

«Kapóra jött a pesti Nemzeti Színház igazgatóságának váratlan meghívása két ott megtartandó hangversenyre. Ennek folytán július végén Magyarország fővárosába rándultam, hol ismeretlen személyemet Radnótfáy intendáns fogadta; Reményi, az annak idején Liszt által pártfogolt s valóban nem lángész nélküli hegedűvirtuóz, ki határtalan szenvedélyességgel mutatta magát hívemnek, fölvilágosított, hogy meghívásomat ő kezdeményezte. Bár sok nyereség nem

nézett ki, mivel egy-egy hangversenyért mindössze 500 forintnyi jövedelemmel kellett beérnem, mégis örömem tellett magának a (két) koncertnek sikerében és a jelenlevő közönség lelkes érdeklődésében. Ezen a földön, hol még az Ausztriával szemben való igen szigorú ellenzékiesség jellemezte az életet, egynéhány derék, jótehetségű fiatalemberrel ismerkedtem meg, kik közül Rosty (Pál) úrra szívesen emlékezem. Ezek idilli ünnepség örömét nyújtották avval a lakomával, melyet bizalmas társaságban a Duna egyik szigetén rendeztek, hol — mint valami patriarchális ünnep megülése — egy hatalmas tölgy lombjai alatt foglaltunk helyet» (július 24. d. u. a Pestbudai Csónakda majálisa). «Az ünnepi szónoklat feladatát egy fiatal ügyvéd vállalta — nevét, sajnos, elfelejtettem» — (Beöthy Ákos), «ki nemcsak előadásának tűzével, hanem — és főként — gondolatainak igazán fenkölt komolyságával annál is inkább bámulatba ejtett és nagyon meghatott, mert eszmemenetét műveim és működésem teljes ismeretére építette. Visszafelé vivő úton ismét az evezős egyesület — megünneplőim klubja — apró és gyors csónakjai álltak szolgálatunkra s ez alkalommal orkánszerű vihar ért utol, mely a hatalmas folyót rettentő vadul fölkorbácsolta. Keskeny csónakomon,» (Rosty richmondi versenycsónakján, az «Elidá»-n) «mely Rosty és egy barátja» (Zichy József gróf) «evezőjére volt bízva, egyetlen hölgytársunk volt, Bethlen Gábor gróf neje. A két férfi attól félt, hogy a csónak a tutajok egyikén szét fog zúzni, melyek felé a habok sodorták és épp ezért a legnagyobb erőfeszítéssel arra vigyáztak, hogy ne kerüljenek a tutajok közelébe; viszont szerintem s a mellettem ülő hölgy



szerint nem kevésbé, csakis az lehetett a menekülésünk, hogy át bírjunk jutni egy tutajra. Hogy ezt evezőseim akarata ellenére is véghez vigyem, egyik kezemmel megragadtam, amikor horzsoltuk, az egyik tutaj kiálló cövekjét és ezáltal megállásra bírtam a csónakot; mialatt a két evezős azt kiáltotta, hogy «Elida» elveszett, gyorsan kiemeltém a tutajra hölgyemet a csónakból, bátorságosan engedtem, hogy barátaim megmentseék «Elidá»-t s aztán át a tutajokon, majd végig a parton a legrettentőbb esőviharszáz közepette, de biztonságosan és szilárdan a város felé haladtam. Ahogy e veszély alkalmával viselkedtem, némiképp növelte barátaim szemében addigi tekintélyemet; úgy, hogy aztán ünnepélyes bankett lett a dolog vége egy nyilvános kerthelyiségben» (a Löwölde helyiségében), «mely alkalommal nagyszámú résztvevő volt jelen. Itt egészen magyarosan kezeltek. Rendkívüli nagy cigányzenekart állítottak fel» (a Sárköziét), «mely közeledtemkor a Rákóczi-indulóval fogadott, mit a társaság viharos «éljen»-kiáltásai kísérték. Itt is igen tüzes ékesszólással és sok hozzáértéssel beszéltek rólam és tevékenységemről, mint amely messze túlhat Németországon. E szónoklatok bevezetései állandóan magyar nyelvűek voltak és az volt a céljuk, hogy kimentsék a tulajdonképpeni szónoklat német nyelvét, melyre a vendég kedvéért volt szükség. E bevezetésekben nem Richard Wagnernek, hanem «Wagner Richard»-nak nevezték. — Még a legfőbb katonai hatóság sem mulasztotta el, hogy Coronini tábornagy személyében átnyujtsa hódolatát: a gróf az egyesített katonazenekarok bemutatkozására meghívott a budai Várba, hol ő és családja igen le-

kötelezően fogadott, fagyalttal vendégelt meg és az össz-zenekarok hangversenyének meghallgatására a palota erkélyére kísért. Mindennek hatása igen fölűdített és szinte fájt, amikor a fiatalosan fölélénkítő környezetből, amilyenek a pesti világ mutatkozott, ismét vissza kellett mennem néma, dohos bécsi menedékembe.» Wagner breviárium I. 182. oldal.)

\*

Wagner 1863-ban tizenhárom napig időzött Pesten.

Két hangversenye közti egyik napon (július 25-én) a *Hunyadi László* előadását hallgatta meg a Nemzeti Színházban. A második felvonás után a színpadra ment s Erkel Ferencet elismerő bókokkal halmozta el.

A második hangverseny sikere nem maradt az elsőé mögött. A műsor a *Faust-nyitány*-nyal és a *Nürnbergi mesterdalnokok* nyitányával gazdagodott. Kiváltképpen a *Faust-nyitány* tett olyan mély hatást, hogy az egyik krónikás szerint «ennél többre zene már alig lehet képes». A koncert bevétele 1379 forint 40 krajcár volt. Wagner tiszteletdíjként ismét 500 forintot vett fel.

Wagner barátai, tisztelői és nagyszámú pesti előkelőség a hangverseny utáni napon (július 29-én) díszes vacsorát rendezett a «Lövölde»-helyiségében, melyről Wagner «Onéletírás»-ában már olvastunk. Erről egyik napilap megjegyezte, hogy Sárközi cigánybandája annyira bámulta Wagnert, hogy elfelejtett hegedülni.

A sok pohárköszöntő közül a Wagnerét kell ki-



emelnünk, melyről a «Színházi Látcső» című ujság 1863. évi 115-ik száma ezt írja: «Ha ünnepeltük eddig mint nagy zeneszerzőt, kétszeresen csodálhattuk benne a kitűnő szónokot.» (Wagner a lakoma folyamán három beszédet mondott.)

Az említett ujság a zeneköltő elutazásáról így ír: «A nagy Wagner ma már (július 31-én) eltávozott szerencsekívánataink között: maga után hagyva azon feledhetetlen emlékeket, melyeket nagy szelleme és szeretetreméltó egyénisége minden körben előidézt.»

Tizenkét év múlva járt Wagner másodszor Magyarországon.

A budapesti Wagner Egyesület megalakulásától kezdve foglalkozott azzal a gondolattal, hogy meghívja a zeneköltőt a magyar fővárosban a bayreuthi színház javára Liszt Ferencsel együtt tartandó hangversenyre.

A zeneköltő 1875 március 6-án érkezett meg Bécsből felesége és Liszt Ferenc kíséretében. Fogadásukra Mihalovich Odön, gróf Apponyi Albert, Ábrányi Kornél, Richter János, Gobbi Alajos és még sok más zenei előkelőség jelent meg a nyugati pályaudvaron. A Hungária-szállodában szállt meg, ahonnan másnap Richter János úriutcai lakására költözködött át. Hétfőn volt a hangverseny első próbája a Nemzeti Színházban. Próba után sétálni mentek a Dunapartra, majd Liszt Ferenchez ebédre. Március 9-én volt a Vigadóban a zajos sikerű főpróba és másnap az előadás. Közben este a Nemzeti Színházban *A bolygó hollandi* előadását nézte meg a mester. Az udvari páholy melletti páholyban ült Mayendorff báróné és Gorcsakov hercegnő társaságában. A címszerepet Odry

Lehel énekelte, Sentát Hauk Minnie, amerikai énekesnő.

A nagy hangversenyen zsufolt volt a Vigadó. Liszt Beethoven *Esz-dur zongoraverseny*-ét játszotta. Mikor Wagner megjelent a dobogón, viharos tapsok közt Mihalovich Ödön a Wagner-Egyesület nevében hatalmas nemzetiszínű babérkoszorút nyújtott át neki.

A műsor ez volt: Liszt: *Strassburgi Harangok* kantáta; Beethoven: *Esz-dur zongoraverseny*, előadta Liszt Ferenc; Wagner: *Kovács-dalok*, *Siegfried halála*, *Wotan búcsúja* és a *Tűzvarázs*.

A «Reform» című lap így írja le Wagnert: «Középtermetű ember, nagy, domború homlokát erősen szürke haj veszi körül, álla csontosan előreszökik, szinte annyira, mint homloka s szája behúzódik, úgy, hogy az arca bizonyos dac kifejezését nyeri, mely azonban megenyhül fejének megszürkült díszé által. Ruhája fekete volt. Frakkjából piros zsebkendő csücske állt ki. A zenekart egyformán, sok mozgás nélkül vezényli s lábával is — még pedig a sarkával — üti a mértéket úgy, hogy egész teste kissé meglökődik belé. Balkeze, mellyel a hang elfojtását szokták jelezni a karmesterek, nem igen dolgozik s csak elkésve szökik fel, ha nem elég fojtott a hang, mikor annak kell lennie, ilyenkor a mester hirtelen meg rázza kezefejét, ami tegnap vagy négyszer is ismétlődött.»

Ez a hangverseny a magyarországi koncertek történetében kimagasló marad, nemcsak művészi értékei miatt, de azért is, mert azon a XIX. század második felének két legnagyobb zenei gényusa: Wagner és Liszt együtt lépett fel.



Wagner a közönség hódolatával és megértésével igen meg volt elégedve. Még egy napig Pesten maradt, barátai körében s március 12-én elutazott.

A mester harmadik budapesti hangversenye nemcsak anyagilag, de erkölcsileg is nagy sikert jelentett. Nem volt olyan zajos és mozgalmas, mint a tizenkét év előtti két koncert, de a hódolat és bámulat, mellyel Wagnert körülvették, teljes megértésen alapult.

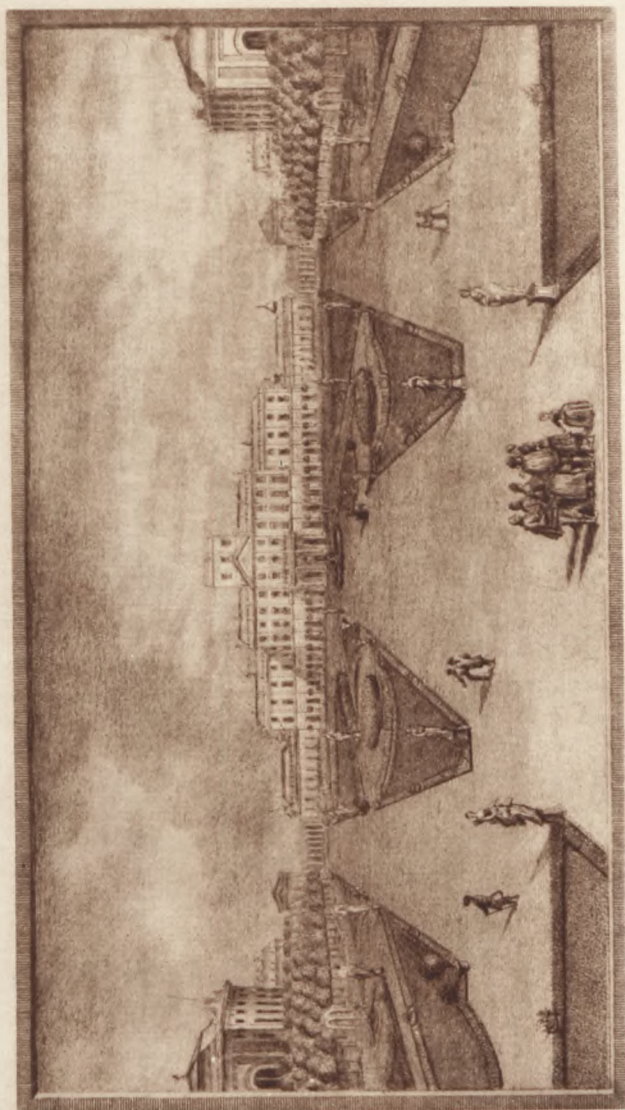
## HAYDN NYOMÁBAN

Kismarton, Eszterháza. Itt élt huszonkilenc éves korától harminc esztendőn át. Legszebb férfikorának örömét és boruját őrzik ezek a falak és a régi-régi messzenéző s messzelátó fák. Szinte kiválaszthatja őket az ember, fiatalok között keresve az öregebbjét. Ez a platán együtt volt harminc éves vele, ez a fenyő talán a társát vesztette el, hogy karácsonykor az ő szobácskájában világítson, ez a tölgy takarhatta a hirtelen záportól s ezek a frissen porondozott utak alighanem akkor is úgy kanyarogtak, amikor ő járt rajtuk.

A kastély nagyszerű hangversenytermének freskós falain mint örökké leszedhetetlen színarany zenei pókhálók ülnek kedves, szelíd, megnyugtató melódiái. A zenekari karzaton (bálok alkalmával itt játszottak) az elhagyott kótaállványok mintha most is őt sírnák vissza. A szekrényekbe rakott hangszerek közül nem egy úgy fekszik most is, ahogy ő tette helyére. A kamarazene-szoba gyertyáinak lecseppent viasza századokig élél. A tömjénfüstös házi kápolna orgonájának sípjából máig sem kellett kifujni a port; minden

\* A cikkemben előforduló új adatokat dr. herceg Esterházy Pál szíves engedelmével jegyeztem le.





AZ ESZTERHÁZAI HERCEGI KASTÉLY 1784-BEN  
Jobbra az operaház, balra a marionett-színház





vasárnap felemelően búgnak, mint mikor ő öntötte beléjük áhitatosan fohászkodó lelkét.

Ezek a padlókon járt, ezeken a lépcsőkön ment fel naponta, ezeken a szobákon lépdelt végig ezüstcsattos kifogástalan cipőjével. Az avult kövek lábnyomtól kivájt lépcsődarabjaira fél rálépni az ember, hátha ő ment erre... cipője sarkának helyére is üvegburát kellene borítani.

\*

A soktemplomú, kis városkában nem sok ház épült fel azóta. Az övé is ott áll a kastély melletti rosszul kövezett, szűk utcán. Egyemeletes, hatablakos. Rajta emléktábla. Mély kapualj, a csekélyke udvaron szivattyúskút. Két szűk feljáró és összesen négy szoba. A rövidlátó üvegtáblák mögött szinte észreveesszük parókás, csúnya fejét, amint belémúl az unalmas őszi esőbe s annak vonalaiból hosszú rajzos melódiákat válogat ki. Pelargoniák az egyik ablakban, néhány mályva az udvaron s a flaszterkövek között alig taposott zöld fű. Tizenegy évig lakott itt a mester. Azelőtt két házat tűz emésztette fel. Úgy kapta ezt ajándékba hercegétől. Körülötte mind hercegi épület sorakozik. A képzelet ráfogja némelyikre, hogy melyikben laktak hercegi muzsikusok. Az egyikben a szép olasz énekesnő, Polcelli Lujza, élt. Kőből faragott lant a kapú fölött, két kis szoba, négy kékszemű ablakkal, a falak enyhe sárgák, emelet nincs s a léckerítésen át színes üveggömbök aljában árvácskák, nefelejts és szőnyegvirágok.

Haydn ablakából jól látni ezt a szelíd helyet. Sokszor leste lakóját az öregedő mester. A feleség, a

bécsi borbély pazarló, házsártos és korlátolt leánya, rút jelenetek közt szidalmazta érte. A «bestia infernale» bárdolatlan hangja mintha most is csattogna a düh-től, mire Haydn felteszi széleskarimájú puha kalapját, veszi hosszú botját, felhúzza folttalan kesztyűjét s nyugalmat színlelve, keseredetten fordul ki az alacsony kapun. Száz lépésre a kastély, arra tart. A hárpia utána les az ablakból s féktelen haragjában a keze ügyébe akadt kótalapokat a tűzbe vágja.

Pedig talán csak egy kézcsók jutott a szegény mesternek a szép Lujzától.

«Bestia infernale» — az özvegyen maradt férj szavai.

\*

Eszterháza a hercegek nyári palotája volt. Kismarton az állandó udvar. Eszterháza a vígság és ünnepségek kivételes helye. Kismarton olasz várkastélyszerű épülete (eredetileg várszolgálatra épült) nehézkes falaival nem illet annyira a könnyedségek zeneköltőjéhez, mint Eszterháza.

Estoráz (Eszterháza) épületrajzának finomságai, csipkés vonalai valamelyik szépséges francia királyleány gráciáját ontják. Mintha Haydn derűjéhez építették volna ezt a grandiózus és mégis kecses palotát.

Hogy milyen élet volt itt, emlékezetesen írja le, mint szem- és fültanu, Bessenyei György, a testőr költő, aki Haydnról és zenekaráról is beszél, bár az «Esterházai vigasságok»-ban névszerint nem említi a mestert.

Egy zene-nap így telhetett el:

Hajnali derengésben a kastély kapujánál, mely a vasmunka világremeke, megáll négy alak. Egyszerre



felcsattan négy kürt ébresztő szava. Haydn vadász-indulójának sürgető hangjai töltik be a kastély óriási köralakú udvarát. Megmozdul az épület, szolgák futkosnak, hozzák a fegyvereket, lovakat, apródok szaladgálnak, főurak, fejedelmek serege köszöntgeti egymást. Az elsőemeleti nyitott erkélyen áll Fényes Miklós, a pompakedveléséről így nevezett herceg, a háziúr. Egyszerre csend. A királynő jön le a lépcsőn. Nyeregbe segítik, a herceg jobbjára lovagol s nekiszalad a mezőnek a sereg. A nagy kapunál huszonnégy Esterházy-gárdista öles sorfala tiszteleg, a kürt-kvartett vidámító hangja száll utánunk... jaj a nyulaknak, rókáknak és fácánoknak.

A versaillesi szépségű kastély a fácánoknak köszöni létét. 1760-ban még kis erdészlak állt a helyén, mely a vizenyős, dús fácántermő rétet őrizte. Mária Terézia többször jött testőrezredeséhez vendégségbe vadászatra. A szűk erdészlak bizony nehezen tudta jól ellátni a királynőt.

— Igen szeretem ezt a helyet, de sajnálom a kíséretet, alig van hol meghúzódniok.

— Felség, mához egy évre olyan kastély áll ezen a helyen — felelte Esterházy — amelyben megtalálhat minden kényelmet.

És három év alatt berendezve állott a mai épület-remek.

Míg az urak vadásztak, a muzsikaházból, mely ma is épségben áll a kastély mellett, hangszeres emberek igyekeztek a főkapu felé. Kilencórai próbára mentek. Haydn-papa is benézett a próbaszobába, amelynek falai ma is hangszerekkel vannak telerajzolva, de a tanítást rendszerint az első hegedűsre,

Tomasinire bízta. Neki előírás szerint a hercegi előszobában kellett várakoznia, hogy megkapja az aznapi zenére a parancsot. Ennek műsorát naponta maga a herceg állította össze.

Délután megjött a vadászsereg s öt órakor kezdődött az ebéd, mely alatt Haydn teljes díszben (a zenekari tagok is tündöklően tiszta egyenruhában), rendszerint Divertimentókat játszottak. Egy-egy kedveltebb olasz vagy német operarészlet is felhangzott, sőt a mester szinfóniáiból nem egy.

Ebéd után a társaság a tündéri gazdagsággal ékes francia parkban sétálgatott, míg a zenekar sietett az operába.

Napvilágon kezdődött az előadás, mely rendszerint egy komoly és egy víg operából állott. Az előadások olyan tökéletesek voltak, hogy Mária Terézia nem egyszer mondta:

— Ha jó operát akarok hallgatni, Eszterházára megyek.

Opera után a társaság átsétált a szemben levő marinott-színházba. Ott szintén Haydn vezényelte a zenekart s «Philemon és Baucis», vagy «Didó» partitúrájának és szcenikájának szépségeiben gyönyörködtek.

Amint látjuk, Haydn sok munkával élt. A napi program sokszor kamarazenével és szólójátékkal is súlyosodott, úgyhogy alig tudjuk elképzelni, hogy mikor maradt ideje a komponálásra, pedig rendkívüli termékenysége és szorgalma az egész zene-történelemből kiemelkedik.

\*



Az eszterházi udvarnak egy 1784. évi németnyelvű leírása maradt fenn. Szerzője ismeretlen s a könyvet magát sem emlegetik. Elálmétkodtató tartalmából a zenével összefüggő fejezeteket s az operaház leírását (az operaház helyén most tündéri rózsalugas áll) itt közöljük.

### *Operaház.*

A bejáratról hatalmas kettős feljáratú, díszes vas-  
korlátos főlépcső vezet a hercegi nagypáholy két ajta-  
jához és egyúttal a karzatra. Mellette mindkét oldalt  
toilette-helyiségek. Ezt a nagypáholyt piros márvány-  
ból készült oszlopok támasztják alá, melyek egy har-  
mad magasságig aranyozott pálcákkal vannak díszítve.  
Az oszlopfejek is aranyozottak.

A menyzet szépen festve, a karzat díszes táblák-  
kal és római pillérekkel díszítve. A pillérek köze kis  
mélyedés, melyben asztalok s felettük nagy tükrök  
állnak. Az asztalok márványból készültek, rajtuk drága  
szép indiai porcellánvázák és pompás aranyozott  
karos gyertyatartók. A karzat a földszintről felnyúló  
és félkörben átívelt díszes pilléreken nyugszik, a kör-  
lát teljesen aranyozott, finom bőrrel bevonva. A néző-  
tér elején mindkét oldalt köralakú páholyok vannak,  
mögöttük szépen és drágán berendezett helyiségek  
kandallóval, dívánnyal, tükörrel, órával és egyéb szük-  
ségesekkel. Ezeknek a páholyoknak is van kívülről  
külön feljáratuk. A majdnem négyszáz nézőt befogadó  
földszintre három egymás melletti bejárat vezet. Az  
oldalfalaknál elhelyezett négy fehér kályhában fűtöt-  
tek. A színházban az uralkodó szín a piros, zöld és

arany: a fényes világítást tükörfalra elhelyezett fali karok adják. A külső homlokzat római pillérekkel és öt ívalakú üvegezett ajtóval ékes, melyekből három egy rizalitot alkot. Tizenkét finoman kidolgozott jón oszlopon a homlokzaton végigfutó erkély nyugszik, melyre a hátulsó helyiségekből lehet jutni. A főpárkányon dobot verő és trombitát fúvó gényusok szobor-csoportja áll, vázákkal és virágfüzerekkel díszítve. A színpad széles és mély. Mögötte két öltözőszoba a színészek részére és mellettük a dús és pompás ruhatár. Naponta váltakozva hol komoly, vagy víg olasz operákat, hol német vígjátékokat adtak elő. Az előadásokon a herceg a hat órai kezdetnél mindig pontosan megjelent. Leírhatatlan gyönyörűségben van itt része szemnek és fülnek. Az egyszerre felharsanó zenekar s a hangszerekből kiáradó megható finomságok, majd a leghevesebb forték hatják át a lelket, mert a zenekart Haydn, a nagy zeneművész vezényli, aki mint karmester, a herceg szolgálatában áll. Az operaházban a ragyogó világítás, megtévesztő díszletek, amelyen felhőkön lakó istenek ereszkednek le s szállnak fel és egy pillanat alatt eltűnnek, hogy gyönyörű kertnek, varázsos erdőnek, vagy pompás teremnek adjanak helyet, mindenkit elsodálkoztatnak. Minden a fülnek és szemnek gyönyörűségére. Az operaház mellett jól berendezett kávéház van.

#### *Marionett-színház.*

Szemben van az operaházzal és elég tágas, de páholyok és karzat nélkül. A nézőtér barlanghoz hasonló, ahol a falak, sarkok, nyílások különböző lép-



csőekkel, kövekkel, kagylókkal, csigákkal vannak borítva és világításnál különös, érdekes látványt nyujtanak. A színpad elég nagy, a díszletek szépek, a bábúk jól elkészítve és pompásan felöltöztetve. Tréfákat, vígjátékokat és operákat adtak elő. Például «Alceste»-t, amit Mária Terézia kegyesen megdicsért és megcsodálta a gyors és észrevétlen változásokat. Színre került «Gibraltár megszállása» is, művészi előadásban. Ez a színház talán egyetlen a maga nemében. A színházban és az operaházban az előadásokat mindenki ingyen látogathatta.

Közvetlen a Marionett-színház mellett áll a pompás és gazdag narancsház és az üvegházak. Az épületek körül óriási park terül el, kétoldalt terraszokkal, lépcsőzetesen elhelyezett virágszőnyegekkel, melyeket gyermeksoporttal, vázákkal és zöldre festett virágkosarakkal díszített, kőből faragott korlát szegélyez. A virágszőnyegek szélén és a kastély körül mindenhol — amíg az időjárás megengedi — narancsfák díszlenek. Kőoszlopos vasrács vezet az épületektől a két kapuig, amelynek pillérein géniuszokkal ékített bronzvázák vannak. A kapunál a hercegi testőrök állnak vártát. A testőrség százötven válogatott szép, kiképzett gránátosból áll. Többnyire hat láb magasak és a herceg alattvalóiból kerülnek ki. Egyenruhájuk sötétkék kabát, piros hajtókével és fehér övvel, fehér a mellény és a nadrág is. Sapkájuk fekete prém, sárga ellenzővel. Egyrészüik Kismartonban állomásozik a hercegné őrizetére; ott teljesít szolgálatot kapitányuk és főhadnagyuk is. A hadnagyoknak Eszterházán van a szállásuk. A tisztek egyenruhája rendkívül díszes.

\*

A hercegi könyvtár 1773. évi konvenciók könyve szerint Haydn József 1761 május 21-én lépett szolgálatba. Fizetése évi 400 forint, koszt és bor volt. 1762 június 25-én 200 forint javítást kapott s 1763 május 1-én bor- és kosztmegváltás fejében napi 30 krajcárt. 1771 december 1-től naponta 1 meszely tiszta bort és évente 6 öl fát. 1776-ban új rendszer alapján kötöttek szerződéseket a zenekar tagjaival, melynek értelmében Haydn évi fizetése 782 forint volt, ezenfelül 9 akó tiszta bor, 6 öl fa, évente egy nyári vagy téli egyenruha. Mint orgonistának járandóságai: 4 mérő búza, 12 mérő rozs,  $\frac{3}{4}$  mérő dara, 300 font marhahús, 50 font só, 30 font gyertya, 30 font zsír, 9 akó bor, 1—1 akó káposzta és zöld főzelék, 1 drb disznó, 6 öl tűzifa, 2 ló és a szükséges fuvar. Az 1801. évi konvenciók könyv szerint Haydn fizetése 700 frt. Harminckilenc éven át kapta az udvartól természetbeni járandóságait s fizetését. Özvegy, gyermektelen és németül, olaszul, fraciául, angolul beszél.

A konvenciók könyvek csaknem mindegyikében van valami szó a művészek járandóságairól, úgy-hogy, ha e könyvek évi sorozata teljes lenne, 1761-től pontosan össze lehetne állítani a Haydn-zenekar és az Esterházy-operaház teljes létszámát. Egyik feljegyzés szerint a zenekar és énekkar 57 rendes és 11 póttagból állott. Ilyen megkülönböztetések voltak: «első és második klasszisú szopránista, baritonista, hegedűs».

A zenekar legnevezetesebb tagjai a Tomasini-k. Három Tomasini működött egyszerre. Alajos, 59 éves, egy második Tomasini Alajos, 43 éves, Esz-

terh  
Ant  
aszt

vér  
szül  
volt

nagy  
gyár  
juk  
felü  
és 3

augu  
25 f  
jal.

köve  
volt.

salzh  
nista  
örzi,

kes,  
haso  
mész

lyek  
meg  
hibá

köny  
Fan  
zene



terházán született, nős, 9 gyermek atyja. Tomasini Antal Kismartonban született, előbb komornyik volt, aztán első versenymester.

Tovább lapozva, Hummel János Nepomuk nevére bukkanunk, aki Haydn utódja volt. A pozsonyi születésű híres muzsikusz fizetése 2300 frt, 3 öl fa volt s szabad lakás Kismartonban és Bécsben.

A zenekar nagyszerű hangszereken játszott. Ezek nagy része a híres magyar hangszerkészítő Leeb-család gyártmánya volt. A konvenciók könyvében megtaláljuk Leeb Jakab nevét is, aki valószínűleg hangszer-felügyelő volt az udvarnál. Fizetése 800 forint, lakás és 3 öl fa.

Ugyanitt olvassuk Haydn János nevét, aki 1771 augusztus 28-tól állott szolgálatban. Tenorista volt, 25 forint havi fizetéssel és 30 forint karszolgálati díjjal. A nagy Haydn második öccse volt, Mihály után következő testvér. Mihály jónevű szerző és karmester volt. Öt évig a nagyváradi püspök, majd haláláig a salzburgi érsek szolgálatában állott, mint dóm-orgonista és karnagy. A hercegi kóratár több kéziratát őrzi, melyek legnagyobbbrészt egyházi jellegűek. Érdekes, hogy a nagy Haydn és Mihály kézíratai igen hasonlítanak egymáshoz. Haydn József rendetlen természetű ember volt s ópuszaiból sok elveszett, melyek közül nem egy Haydn Mihály neve alatt jelent meg, sőt ez fordítva is megtörtént — mindkettőjük hibáján kívül.

Elsler József neve is szemünkbe ötlik a régi könyvből. Ez az Elsler a híres táncosnőnek, Elsler Fanninak az apja. Kótamásolója (kopita) a hercegi zenekarnak. 1779 július 14-től állott udvari szolgál-

latban s a fizetése lakáson kívül 5 mérő búza, 10 mérő rozs és 3 akó bor volt. Kismarton városában több Elsler Fanni- emlék van. A táncosnő balerina- ruhája, cipője, fátyolkosztümje és fényképei.

A konvenciós könyvekben megnevezettek közül csak Bauer Ferenc vadászkürtös tudott magyarul. A nagyváradai püspök szolgálatából jött Kismartonba, ahol 62 éves korában 31 éves szolgálati ideje volt.

Kívüle még három magyar embert találunk a névsorban. Az egyik Mogyoróssy József, a gyermek- kar és az erdésznövendékek «magyar professzora», évi 342 frt fizetéssel. A másik Loránt Mihály, a gyermekkar felügyelője; a harmadik pedig Lendvay Gábor, aki Rechnitzben született s valami «szám- feletti» állásban működött. «Valamit magyarul is tud», jegyzi meg róla a konvenciós könyv. Érdekes volna bővebben ismerni ezeket a magyarokat, különösen Lendvay Gábort. Alighanem valami kalandos min- dentudó volt.

\*

A hercegi kastélyokban három Haydn-képet őriz- nek. Egyik sem ismeretlen, de azért szólunk róluk, mert olyanok, mintha három különböző emberről festették volna. Kettő életnagyságú mellkép s a har- madik hatalmas kétméteres vászon.

Az egyik mellképet Grundmann nevű udvari pik- tor festette. Haydn-nak ez a legcsúnyább s valószínű- leg a legjobban hasonlító képe. Zöldes díszruhában van, sűrű ezüst sujtással, háromnegyed profilban néz s a szeme kék. A másik, a sokkal ismertebb «Haydn- papa»-kép. Festője ismeretlen. Itt is zöldes a ruhája,



de nem díszes. Fekete dús nyakkendője emeli ki fehérparókás arcát. Hosszúkás, szántott, kenetes arc. Jelentéktelen szemöldök, finom, gúnyos száj, *kék szem* hideg tekintet. Egyik képen sem látszik a zseni. A nagy vásznon íróasztal előtt ül, kezében lúdtoll s előtte kótapapír és tintatartó. Mellette oldalt Apolló-szobor. Fekete bársony dolgozóruhában van. Fehér csipkés kezelője finom muzsikuskézre borul. Petyhüdt száj, lecsüngő alsó ajak s *barna szem*.

Ime a kortársak, a festők tévedése. A szem, amely egyedül is annyi, mint az egész arc, csaknem mint az egész ember, két festő ecsetjén kék, a harmadikén barna. Gyakori tévedés. Liszt Ferenc képein is előfordul. Beethoven szeméről is kétféle egykorú feljegyzésünk van. Ady Endre szemét legnagyobb koloristáink egyike, Rippl Rónai József, emlékezésében koromfeketének írja le, holott melegbarna őszeme volt.

A zenekarnak csaknem teljes kótaanyaga megvan. Egyrésze Kismartonban, de a java Eszterházára került, természetesen még az osztrák megszállás előtt, éppúgy, mint több a hangszerek közül is. Százhusz olasz és hetven német opera teljes kótaanyaga (Stimmje). A kótalapokat alig sárgította meg az idő. Olyan épek, hogy akár rögtön játszhatja egy zenekar. Ezeket az erős, vastag kótapapírokat a hercegi papírgyár készítette. Az operákon kívül sok mise, oratórium, kántáta teljes zenekari anyaga megmaradt.

Sokkal értékesebbek Haydn kézíratai, melyeket kitüntetéscíveivel együtt hálából végrendeletileg a hercegi családnak hagyományozott. Ismeretlen, kiadatlan kézirat egy sincs, de itt van: L'infidèle Delusa, La fedelta premiata, La Pescatrice, Il Mondo,

Le speciale, La Canterina, Orpheus und Euridice, Acis e Galatea, Le Midi, Krisztus hét szava (oratórium), vagy 16 szimfónia, áriák, dalok, öt mise, indulók, nokturnók, négy divertimentó, menuettek, két vonósnégyes és néhány apróbb szerzemény eredetije.

Mint érdekesség említendő egy *kánon*. Barna rájába, üveg alá foglalt huszonnégy táblából álló kótasorozat. A kánon és összhangzati szabályok szemléltető huszonnégy képe. Latin, német és olasz szöveggel. Haydn kezeírása. Nincs kiadva.

\*

Haydn zenekarának hangszerei közül: 14 hegedű, 3 gordonka, 1 nagybőgő, 6 kürt, 2 üstdob, 1 fagot, 1 klavecin, 2 gyönyörű bariton s apróbb ütő- és madárhangokat utánzó hangszer látható. A mester Stradivariusának húrjai is megvannak. A vonóshangszerek nagyrésze töredezett. Mesterkezek munkája, de nem elsőrendű mesterművek. Pedig sok Stradivarius és Guarnerius műremek volt valamikor ebben a zenekarban.

\*

A díszokmányok és díszérmek csaknem mind megvannak: A francia Institut National «Organisatio»-ja, melyben Haydn mint tag szerepel. Az amsterdami «Maatschappy der Verdiensten» díszokmánya Haydn számára (1801). Az «Institut National» tagsági oklevele Haydn József részére a köztársaság 10. évéből. A «Conservatoire de Musique» megtisztelő irata Haydn József részére (1805 jún. 26.) Az «Institut National» zenei szakosztályának tagsági levele Haydn József számára a köztársaság 13. évében, Messidor 1-én. Haydn



József bécsvárosi díszpolgári oklevele (1804 április 1). Ezüst díszérem Haydn József, mint a párisi Institut National tagja számára. Ezüst díszérem a párisi «Conservatoire de Musique» tagja részére. Arany díszérem (Gatteaux-tól) a Teremtés első párisi előadása alkalmából (1800). A pétervári filharmoniai társaság arany díszérme Haydn Józsefnek (1802). Kis aranyérem Haydn Józsefnek az «Académie des Enfants d'Apollon»-tól (1791).

## HOL VAN HAYDN KOPONYÁJA?

A XIX. század legelején a phrenológia (Schae-dellehre, koponyatan) igen nagy port vert fel. Ennek a ma már teljesen hitevesztett tudománynak Gall Fr. L. G. német anatómus (1756—1828) volt egyik legelső képviselője. Nagyon sokan foglalkoztak a Gall-féle tanokkal s lesve lesték miként kaparint-hatnák meg egyes nagy szellemek koponyáját, hogy azokkal igazolhassák a phrenológiát. E tudománynak hitt mánia segítségével jutottunk ma abba a hely-zetbe, hogy zenei nagyjaink koponyáit a kezünkbe vehetjük. Schubertét és Beethovenét csak másolatban, azokról exhumálásuk alkalmával készítették másola-tokat, de Mozartét minden valószínűség szerint eredeti-ben (Salzburgban a Mozart-múzeum őrzi, mint Josef Hirtl, híres anatómus, hagyatékát) s Haydn Józsefét minden bizonnyal eredetiben (a bécsi Gesellschaft der Musikfreunde tulajdona).

A világhírű koponyáknak terjedelmes irodalmuk van.

### *A Haydn koponya irodalma.*

Haydn koponyájáról két osztrák anatómus adott közre komoly megállapításokat. Az egyik Karl Lan-





HAYDN HAMVAINAK NYUGVÓHELYE  
A kismartoni kálvária-templom



g  
E  
G  
H  
1  
g  
sz  
S  
le  
m  
az  
to  
B  
jé  
  
ze  
  
ja  
«L  
ho  
lá  
ac  
je  
el  
sú  
te  
cé  
sú  
le  
P  
m  
ti



ger dr. («Die Kranien dreien musikalischer Koryphaen: Haydn, Beethoven und Schubert», Wiener anthropolog. Gesellschaft 1887), a másik Julius Tandler («Über Haydn's Kranium». Wiener anthropolog. Gesellschaft, 1909). A három koponyát a professzorok szakszerűséggel megmérezték, leírták és megmagyarázták. Laikus szemmel a gipszmásolatokból csak az látható, hogy Schubert koponyájának formája a legarányosabban fejlett. Beethovené rendkívüli és aránytalan méreteket mutat s a Haydné a legfinomabb alkotású, különösen az arcész. Szemmel is megállapítható a másolatokról, vagy azok fényképeiről, hogy úrtartalomra Beethoven koponyája volt a legnagyobb és Schuberté jóval nagyobb, mint Haydné.

A Haydn koponya hiteles történetét így ismeri a zenetörténet:

Haydnt Bécsben, a francia megszállás zavaros napjaiban, 1809 június 1-én délután, temették el a «Leichenhof ausser der Linie Hundsturm» temetőben. A temetés elég díszes volt, de a francia megszállás miatt meglehetősen részvétlen. (A bécsi levéltári adatok szerint a temetésen Napoleon is meg akart jelenni, ami azonban a várható demonstráció miatt elmaradt. Horánszky Lajos szóbeli közlése.) A temető sírásóját a Gall-féle koponyatan fanatikusai megvesztegették, hogy szerezze meg számukra tanulmányi célra Haydn koponyáját. A temetés után egy héttel a sírásó a sírt felbontotta s Haydn fejét a törzséről levágta. E hullarablás értelmi szerzője Joh. Nep. Peter nevű fogházgondnok volt, kinek a sírásó a koponyát átadta. A tetemcsontkítás tizenegy esztendeig titokban maradt. De 1820 október 30-án, mikor Ester-

házy Miklós herceg a holttestet exhumáltatta, hogy Kismartonba vitesse s ott díszesen temettesse el világ-hírű karmesterét, a jelenvoltak, köztük a herceg is, megbotránkozással látták, hogy a koporsóban a fej hiányzik. Csak a paróka volt meg, a fej sehol. A herceg elrendelte, hogy a látottakat tartsák titokban s mikor a holttest már Kismartonban volt, feljelentette a hullacsonkítást a bécsi rendőrségen. Az eljárás meg is indult. A tettesek csakhamar megkerültek. Az egyik az említett Joh. Nep. Peter s a másik Rosenbaum Károly, Esterházy herceg egyik volt titkára.

Peter ugyanis, akinek nagy koponyagyűjteménye volt, Haydn koponyáját preparálta, díszes üvegszekrénybe helyezte el, de nem merte sokáig magánál tartani, hanem átadta megőrzésre Rosenbaumnak. A rendőri nyomozásra Peter elismerte a csonkítást, sőt kegyeletes szavakkal akarta védeni tettét. De a koponya nem került elő. Mikor aztán a herceg erőlyes fellépésre szánta el magát, sőt pénzáldozatra is hajlandó volt a koponyáért, Peter sürgette Rosenbaumot, hogy adja át a koponyát. Rosenbaum, hogy a sok rendőri zaklatástól szabaduljon, a herceg megbízottjának egy más ember koponyáját küldte el Haydné helyett. Ezt a koponyát Mayer bécsi anatómus nem ismerte el ugyan Haydn kraniumának, de a koponyát elvitték Kismartonba s a herceg parancsára — ért-hetetlenül — az udvari káplán és a templomszolga titokban felnyitotta a koporsót, mely eddig befalazatlanul a templomban állott s behelyezte a Bécsből küldött koponyát. Ez a koponya fekszik most is Haydn koporsójában, amint az alábbi okmányból kitűnik. Így temették el másodszor Haydnt a felső-



kismartonhegyi templom alatt levő jobboldali szélső sírfülkébe 1820 november 7-én. A temetést Szentgály János hercegi jószágkormányzó rendezte, akit három év múlva ugyanebbe a sírfülkébe helyeztek örök nyugalomra.

Ez a tényállás akkor került nyilvánosságra, mikor Ludwig Aug. Frankl a «Neue Freie Presse»-ben, 1864 április 10-én, «J. Haydn ohne Kopf» címmel körülményesen feltárta a fej elrablását. Ugyanekkor az is kiderült, hogy Rosenbaumtól a valódi Haydn koponya visszakerült Peterhez. Rosenbaum halálos ágyán bevalotta Peternek, hogy birtokában van az igazi Haydn koponyája s a herceg számára annakidején idegen koponyát adott át. Rosenbaum megkérte Petert, hogy a koponyát juttassa el az ő nevében a bécsi Gesellschaft der Musikfreunde-nak. De Peter sem tudott megválni a koponyától. Csak halála után adta át özvegye a kraniumot Rokitansky bécsi egyetemi tanárnak. Rokitansky is haláláig ragaszkodott a koponyához, míg aztán örökösei odaajándékozták a Gesellschaft der Musikfreunde-nak, ahol a nagyértékű ereklyét ma is őrzik.

Haydn születésének 200 éves fordulója alkalmával (1932-ben) dr. herceg Esterházy Pál mindent elkövetett, hogy a koponyát megkapja a bécsi zeneegyesülettől s azt legméltóbb helyére, a kismartoni templomban nyugvó Haydn csontok mellé, elhelyezhesse. A herceg szép törekvése eredményre nem vezetett, de a herceg művészi mauzóleumot emeltetett ősei nagynevű udvari karmesterének a kismartoni Kálvária-templomban, ahova a hamvakat át akarja vitetni a templom alatt levő kriptából.

Ezért dr. herceg Esterházy Pál 1930 őszén körültekintő gondossággal exhumáltatta Haydn csontjait, amely exhumálásról felvett jegyzőkönyvet, mint nevezetes zenetörténeti okmányt, dr. herceg Esterházy Pál engedélyével teljes egészében itt közlöm:

*«Jegyzőkönyv.»*

Felvettük Kismartonhegyen, a kismartonvári prépostság hivatalos irodájában, 1930 évi október hó 8-án.

Jelen voltak: Várits Károly pápai prelátnok, apátkanonok, Polák Gyula kismartonvári prépost, Szolnok Dezső m. kir. kormányfőtanácsos, hercegi központi igazgató, Hanifl Illés felsőkismartonhegyi káplán és Polgár Kálmán hercegi felügyelő, mint jegyzőkönyvvezető.

A jegyzőkönyv tárgya:

Főméltóságú Esterházy Pál Herceg Úr, hitbizományi birtokos elhatározta, hogy Haydn József zeneköltőnek 200 éves születési évfordulójára, 1932 április hó 1-re, Haydn Józsefnek holttemét a felsőkismartonhegyi templom alatti közös sírhelyről felviteti a kismartonhegyi templom kórusa alatt levő oldalfülkébe. Ezt az oldalfülkét művésziesen átalakíttatja Haydn kápolnává s ennek a díszes kápolnának a közepén Haydn holttemét egy márvány sarcophagba helyezi. A holttemet agnoszkálása céljából a Herceg Úr Ő Főméltósága a fent megnevezett tagokból álló bizottságot küldte ki.

A bizottság a felsőkismartonhegyi templom alatt talált egy kőtáblát, mely a főbejárati folyosótól balra levő bolthajtásos előtér jobboldali szélső sírfülke bejá-



rata mellett van. Erre a sírkőre a következő nevek vannak felírva:

Theresia Schmidt gestorben den 12. Juni 1806.

Elisabetha von Pawlowszky gestorben den 29. April 1808.

*Joseph Hayden gestorben den 31. May 1809.*

Johann von Szentgály gestorben den 11. Jänner 1823.

Melchior von Pawlowszky gestorben den 28. Decemb. 1827.

Magdalena Juhász gestorben den 27. Juny 1829.

Johann Fuchs gestorben den 29. Október 1839.

A sírbolt bejárata egy kőlappal volt elzárva. A kőlap cementtel volt a tokhoz beragasztva s azon kívül vaspántokon keresztül egy rúd volt vezetve, hogy a sírbolt lakattal is bezárható legyen. A sírbolt ezen bezárása 1909-ben történt, amit igazol a bizottság két tagja, Várits Károly és Szolnoky Dezső, amennyiben 1909-ben az ő rendelkezésükre lett a sírbolt így lezárva. A sír bejáratánál levő kő eltávolítása után látható lett egy boltíves sírfülke, amelyben találtunk három teljes koporsót és a baloldali koporsó tetején egy koporsótöredéket csontvázal. A három koporsó közül a jobbszélső fedelén megtaláltuk Melchior Pawlowszky nevét, aki valamikor az uradalom igazgatója volt. Hivatalos címe Präses volt. Pawlowszkynek a holtteste teljes egészében megvan. A két csizmája egész épségben. A középső koporsóban, amelyen semmi felíratot nem találtunk, szintén egy csizmás férjiholttestet találtunk. A baloldali harmadik koporsóban kék ruhafoszlányokat találtunk a csontváz között, amelyből teljes jóhiszeműséggel női holttestre következtethettünk. Valószínűleg Magdalena Juhász holtteste. Ezen baloldali koporsó felett elhelyezett koporsóromokban semmi értékesebb nyomot nem

találtunk, úgyhogy ennek a holttestnek személyazonosságát megállapítani nem tudtuk.

A fülkétől jobbra van egy kis mellékfülke, ott találunk néhány csontot és egy-két koporsódeszkát felállítva.

A főfülkétől balra találtunk egy második oldal-fülkét. Ebben találtunk két koporsót s az egyik koporsó felett egy koporsólapot, amelyen szintén egy holttest feküdt. Ezen holttestről minden kétséget kizáróan meg tudtuk állapítani, hogy női holttest, mert a koponyán látható volt még a női haj s a koponya fogazatából is nőre lehetett következtetni. A fülkében jobbra fekvő koporsóban női ruházatra mutató ruhadarabokat találtunk, úgyhogy ebben a koporsóban levő holttest női holttest kell, hogy legyen. Ez a két női holttest lehet Theresia Schmidt, akit legelőször temettek el a sírboltban s akinek a neve kívül, a sírboltnak ugyancsak baloldalán, egy külön emléktáblával van megjelölve, a másik női holttest valószínűleg Pawlowszky igazgató feleségéé, amire abból következtethetünk, hogy Pawlowszky — mint hercegi igazgató — feleségét a sírboltban levő koporsó mellé helyeztette el, mert valószínűleg az volt a terv, hogy a sírboltban csak a fülkékben legyenek a koporsók elhelyezve, a fülke középső része pedig, mint imádkozó hely, szabadon maradjon.

A baloldali fülkében a harmadik koporsó diófából készült, de minden felírás nyoma nélkül találtuk. A koporsóban egy csontváz fekszik. Legelső pillanatra feltűnő a koponya, amelynek színe világos és elüt a többi csontok színétől. A koponyát részletes vizsgálat tárgyává tettük s feltűnt, hogy az állkapocs



selyemzsinórokkal van kétoldalt a koponyához erősítve. Ez a körülmény igazolja Alfred Schnerich «Joseph Haydn und Seine Sendung» művének azt a megállapítását, hogy Haydn fejét a bécsi temetőben való eltemetés után levágták és amikor a holttestet Kismartonba hozták, a holttesthez egy idegen koponyát csempészték be. (L. a mű, 159—160. oldalát.) A csontváz többi része erős férficsontokra mutat. Hogy minden kétséget eloszlassunk, meghívtuk a szemlére Pfeiffer Henrik nyug. járásorvost, aki konstataulta a csontváz medencecsontjából, hogy a csontváz férfié. A koponyáról pedig megállapította, hogy az egy tisztított, tehát preparált koponya. A fent leírt körülményekből a bizottság teljes megnyugvással meri állítani, hogy Haydn holtteste idegen koponyával a felnyitott fülke baloldalán levő oldalfülkében, ugyancsak baloldalon fekszik, diófakoporsóban. Különös ismertető jele a preparált koponya.

A kibontott fülkében a felírás szerint heten vannak eltemetve, négy férfi és három nő. A női holttesteket mint fentebb leírtuk, a ruhafoszlányokból, koponyán levő hajból, fogazatból határozottan meg tudjuk állapítani, Pawlowszky holttestét a látható koporsófeliratból agnoszkálhatjuk. Egy holttestet, melynek a csizmái megvannak, feltétlenül Szentgály tetemének kell tekinteni, mert arról díszmagyaros képet ismerünk. Haydn és Fuchs zenészek voltak, tehát csizmában nem temethették el őket. Marad tehát két holttest, Haydné és Fuchsé, amit egymástól el kell különíteni. Az egyik holttestnél semmiféle jel, vagy felismerhető dolog nincsen. A másik koporsó (keményfából, diófából készült. Abban találtunk egy prepa-

rált koponyát, férficsontvázzal, melynek csontszerkezete megfelel a Haydn alakjáról szóló leírásnak is, hogy erős csontozatú, tömzsi ember volt, úgyhogy a fentiek alapján újból *hangsúlyozzuk, hogy a történelem ítélőszéke előtt nyugodtan állíthatjuk, hogy a jelzett koporsóban Haydn holtteste fekszik.*

A vizsgálat befejezése után a sírboltra visszahelyezettük az elzáró követ. Az elzáró kő és kőtokja közötti nyílást vakolattal betömettük és elsimíttattuk, azután lakattal lezártuk a sírboltot, a lakat nyílását lepecsételtük a hercegi uradalom és a prépostság pecsétjével.

A jegyzőkönyvet felolvastuk, elfogadtuk és aláírtuk.

Szolnoky Dezső s. k. hgi. központi igazgató, Polgár Kálmán s. k. hgi. központi felügyelő, Várts Károly s. k. pápai prelátus, apátkanonok, Polák Gyula s. k. kismartonvári prépost, Hanifl Illés s. k. felsőkismartonhegyi és vári káplán.»

(Esterházy levéltár, acta mus. 3778.)

A prépostság pecsétje.

#### *Bécsben van Haydn koponyája.*

Ehhez az okmányhoz nem kell sok magyarázat. Az exhumálás eredményesnek mondható, mert senki sem lehetett biztos abban, hogy a sírfülkében, ahova hét embert eltemettek, megkülönböztetetten megtalálhatók-e Haydn hamvai. A jegyzőkönyv a zenetörténeti bizonyosságot megerősíti s kétségtelenné teszi, hogy Haydn József sokat hányatott koponyája, mely most a bécsi Gesellschaft der Musikfreunde birtokában van, — valódi.





JERITZA MÁRIA

„IRIS-VERLAG, WIEN“



nőj  
kas  
viss  
nek  
hír.

men  
szor  
jött  
köz  
hár  
éne  
éres  
ami  
itt

láz  
nál  
Szé  
ket



## JERITZA

Az éneklő Duse.

A modern operajátzás legkimagaslóbb művésznője. Olyat tud, ami manapság énekes színpadon ritkaság: tökéletesen játszik operát. Néhány év óta visszavonult a színpadtól, Amerikában él szépségének teljében második férje oldalán. Ritkán jön róla hír.

De Budapest híven őrzi művészetének emlékét, mert nem felejtí el azokat az éveket, mikor tavaszonta amerikai szerepléseiből megtérve, mindig eljött hozzánk s ragyogó operaházi estékkal ajándékozott meg bennünket. Az utolsó tíz évben csak három városban, Bécsben, New-Yorkban és Budapesten énekelt. Szerette ezt a várost. A zseni ösztönével érezte, hogy őszintén lelkesedünk művészetéért s amint mondta, azért jön szívesen Budapestre, mert itt mindig csak öröm érte.

Emlékszünk, hogy érkezésének már a híre is lázba hozta a milliós várost. Házmesterek nem sajnálták a pénzt operajegyért, csak láthassák, hallhassák. Száz bajunk közepette is előkerestük az ünneplőnket és kiöltözködtünk, mert ő énekel — Jeritza.

Felbonthatatlan szellemi szerződés köti őt Budapesthez. Tiszteleti tagja a m. kir. Operaháznak. A színház fennállása óta nyolcan kapták meg ezt a kitüntetést. Köztük Jeritza az egyetlen, aki külföldi.

Felbonthatatlan szerződés köti őt hozzánk azért is, mert művésznői nagysága tulajdonképpen Budapesten keresztül, Budapest segítségével bontakozott ki és nőtt meg. Itt lépett fel ugyanis 1910-ben *Knote* Henrikkel, a világhírű müncheni Wagner-énekesssel, a filharmónikusok Wagner-estjén. A budapesti sajtó magasztaló kritikáit a bécsi sajtó átvette s ezzel Jeritza művészete megalapozottan elindult a világhírnév felé. Az emlékezetes budapesti siker után pár hónapra, 1911-ben visszatért hozzánk s új alakban mutatkozott be. A bécsi Preger-társulat a Víg-színházban vendégszerepelt. Az operett-együttes keretében Lehár: «Luxemburg grófja» Angele szerepében és Strauss: «Cigánybárója» Saffi szerepében hódította meg a budapestieket.

Operett szerepeiről Jeritza így nyilatkozott: «Már többször beszéltek rólam, hogy «operetténekesnő» voltam s ebben a híresztelésben mindig volt valami szemrehányás. A híreszteléssel tehát szeretnék leszámolni egyszerismindenkorra. Először is arra hivatkozom, hogy nem mindegy, hogy valaki operetténekesnő volt-e, vagy csak énekelt operettben is néhány-szor, mint én, mindig valami határozott célból. Meg aztán vannak operettek és operettek, — de ennél a témánál nem akarok időzni. Még eddig nem fárasztottam magam azzal, hogy megcáfoljam azt a híresztelést, amely kettős művészi egyéniséggel ruházott fel, mint opera és mint operetténekesnőt, — de



mivel ennek itt-ott hitelt adtak, tisztába akarom hozni, hogy én csak nagy operákban énekeltem és nem igaz, hogy «öt titokzatos évet» operettszínpadon töltöttem.

Az operett terén csak kevés tapasztalatot szereztem, nagy időközökben. Legelőször ischli vendégszeplésemet kell említenem 1912 nyarán, amikor néhány operettben léptem fel, köztük Strauss «Denevér»-jében. Nem is szólva arról, hogy Strauss művei éppen olyan klasszikus német operettek, mint amilyen klasszikus angol operettek Sir Arthur Sullivan művei, azt hiszem, minden hivatásos énekes egyetért velem abban, hogy ezeket a szerepeket nem lehet lemosolyogni, ha az ember jól éneкли őket. Mikor az ischli szerződést elfogadtam, nagyon fiatal leány voltam, a körülményeim éppen nem voltak rózsásak s különben sem kell magyarázgatnom, hogy miért szerettem ezt a zenét, melynek melódiája oly természetes és vonzó, mint Strauss minden zenéjéé. Azóta pedig eltekintve attól, hogy Szép Helena szerepét kreáltam, mindössze csak kétszer, vagy háromszor énekeltem operettben.»

\*

Jeritza Mária harminchét éves korában, — szokatlanul korán megírta «Onéletrajzát» («Sunlight and song» 1924), melyből a «Magyarország» napilap 1925. évfolyamában folytatásokban részleteket közölt.

«Arra a munkára — írja Jeritza — melyet az életben el kellett végeznem, akkor kezdtem készülni,

amikor még csak tizennégy éves voltam és énekelni tanultam Brünmben egy kitűnő mestertől, aki már kezdettől fogva hitt a hangomban és a jövőmben. De már előbb is, tizenkét éves koromban, jártam a brünni zeneiskolába és külön órákban is tanultam Krejci tanártól, aki megtanított a legfontosabb dologra, amit egy énekesnő már akkor megtanulhat, amikor a hangja kezd kialakulni: hogy sohase sikítsak és sohase erőltessem a hangomat.»

(Jeritza Brünmben született, 1887-ben. Apja szerény viszonyok között élő városi hivatalnok. Édesanyja is morva származású. Négy gyermekük közül a sorban Mária a harmadik.)

«Gyermekkorom — írja Jeritza — Brünmben boldog volt. Már akkor is szerettem énekelni, amikor kis gyermek voltam és szerettem színházat játszani. Míg nővéreim beérték az egyszerű «főzőcske» játékkal, az én babáim rendszeren annak a tündérmesének alakjai voltak, amelyet legutoljára hallottam... Nővéreim babái csak babák voltak, az enyémekek pedig jellemek.

(Jeritza az olmützi színházban lépett először színpadra, a «Lohengrin» Elza szerepében. Döntő sikerrel. Öt hónapig énekelt Olmützben s máris folyton bécsi szerződés járt a fejében. Egy napon vonatra ült s jelentkezett próbára a bécsi «Volksoper» (Népopera) igazgatójánál. Áriájának a felét sem énekelte el s máris szerződött tagja volt a Volksopernek. Egy lelket sem ismert ekkor Bécsben. Nemsokára egész Bécs ismerte őt.)

«Egész sereg szerepet kreáltam a Volksoperben,



— mondja Jeritza — egyebek között Lygiat Jean Nougues tragikus operájában a «Quo Vadis»-ban. Zeneileg, hogy őszinte legyek, a darab nem sokat ért, de mint látványosság, kiváló volt: a primadonnának is festői megjelenésűnek s inkább színésznőnek kellett lennie, semmint énekesnőnek. A zenei és drámai tényezők díszharmóniáján kívül más is zavarta a művészi értékek érvényesülését. A darabban Lygia szolgálja Ursus, néma szereplő volt. Bár kevés ész és képzelő erő kellett hozzá, a mi Ursusunk szerepe mégis jelentékeny volt, mert «óriásnak» kellett lennie. Hosszas keresés után végre találtunk is egy embert, aki leverte volna a római aréna bölényét. Egy Graffl nevű nehézsúlyú atlétát szerződtettünk, aki rettenetesen szélesmellű nagy ember volt. Graffl már az első próbától kezdve úgy járt-kelt, mintha a siker egyedül tőle függne. Mikor behozták Simons igazgató irodájába, az első szava ez volt:

«Mit fizet az úr?» Simons azt hitte, hogy nagyon szép ajánlatot tesz neki, ezt mondta:

«A munkája nem lesz nagyon nehéz, — mert hiszen maga atléta. S nem kell se énekelnie, se szavalnia egy szót sem. Adok tíz koronát minden estére.»

Graffl ettől nem volt nagyon meghatva, — kiüllesztette rettenetes mellét s roppant önbizalommal így válaszolt:

«Tudja meg az úr, hogy a bírkózók közt én vagyok a Caruso. Esténként 20 koronán alul nem lépek fel!»

Megkapta.

Graffl-Ursus a negyedik felvonásban volt a legnagyobb, amikor egy igazán drámai jelenetben ki-nyújtott karjain Nero felé emelt engem, kegyelmet kérve. A darab szerint a szín mögött legyőzte a bőlényt, megmentett engem s karjain kellett a színre behoznia. Akkoriban nagyon-nagyon hosszú hajam volt, a sarkamig ért s oly sűrű, hogy betakarózhattam vele. Nekem eszméletlenül kellett feküdnöm Ursus karjain, amikor Nero páholya előtt felemelt. Körülbelül tíz percig nem volt szabad meg se mozdulnunk. Roppant erőpróba volt ez, bár olyan vékony voltam, mint egy fogpiszkáló. A közönség lélekzetét visszafojtva várta, hogy Nero lefelé mutat-e hüvelykujjával, ami halált jelentett, vagy felfelé, ami egyértelmű volt a megkegyelmezással. Ami Grafflt illeti, ő lelke mélyén meg volt győződve, hogy az én szerepem ebben a jelenetben egészen jelentéktelen. Ez az ő görögtüzes jelene volt s egy zsák liszt éppen úgy megfelelt volna neki, mint az én csekélységem. De hányszor kívántam, bár egy zsák lisztet tartana karjain! Mert olyan izmai voltak, mint az acél s a mutatvány alatt ezek egészen megfeszültek. Az ő izmain feküdni éppen olyan kényelmes dolog volt, mint keskeny acélrudakon feküdni. Amikor végre — hála Istennek! — a szerep szerint — átadott Viniciusnak s az kirohant velem a színpadról, minden bordámban és minden egyes csontomban fájdalmat éreztem.

Anyira féltem a «Quo Vadis» negyedik felvonásától, mint a fogorvostól.»

Jeritza színes életének szép emléke, hogy művésze és egyéni kedvessége révén az uralkodó család



egyik kedvence volt. Ferenc József, majd Károly király kivételes megbecsülését élvezte. Erről többek közt így ír: «Strauss János vígoperáját, a «Denevér»-t 1874-ben mutatták be Bécsben s az uralkodó attól fogva nagyon szerette: látni lehetett, hogy a színpadi cselekmény minden részletét és Strauss zenéjének minden taktusát élvezi. Mennyire tapsolt! S a közönség is mennyire tapsolt! Mert Ischlben, amikor a császár tapsolt, a közönség is tapsolt. A második felvonásban «magyar grófnőnek» öltözve, egy briliáns «csárdást» énekelek, mely tüzes, szenvedélyes, friss tánccal végződik. Az egész egy festői cigányozási rap-szódia. Egyáltalán nem könnyű énekelni. Amikor befejeztem, a császár elkezdett tapsolni s nem hagyta abba, amíg újra el nem énekeltem. S azután mi ketten, — ő, meg én, — megismételtük ezt a mutatványt: Ő tapsolt s én énekeltem. De amikor már negyedszer kívánta, hogy énekeljem el még egyszer a csárdást, egy hang se jött már ki a torkomon. Olyan száraz volt a torkom, mint a tapló s a nyelvem majd kilógott a számból. A színpad elejére mentem tehát, mélyen meghajoltam a császár felé, kezemet a számra és a torkomra tettem, mosolyogtam és a fejemet ráztam, ezzel jelezve, hogy én szívesen énekelnék, de a torkom gyenge hozzá. A császár megértette, nevetett, s intett a fejével, hogy folytassuk az előadást. A csárdás után szerencsére párbeszéd következik s így volt időm a hangomat összeszedni.

Néhány nappal az előadás után, Prileszky báró, aki jelen volt a császár kíséretében az udvari pá-bolyban, elmondta nekem, hogy az előadás alatt a császár így szólt hozzá: «Nem értem, hogy miért

nem láthatom ezt az énekesnőt az udvari operában? Itt van egy bájos, fiatal teremtés, egy csudálatra méltó színésznő, akinek gyönyörű hangja is van és csupa véletlen, hogy alkalmam volt látni. Vajjon a Hofoper-ben csak középkorú, vagy öreg művészeket szabad alkalmazni?» Néha az jár az eszemben, hogy ott lenn Ischlben Strauss zenéje Ferenc Józsefnek a saját boldog ifjúságát juttatta eszébe. Lehet, hogy emlékeztette arra az időre, amikor ő volt birodalmárak legkitűnőbb táncosa s a Hofburg nagy báltermében Strauss zenéjére járta a keringőt.

Az öregek rendszeren nagyon hálásak azok iránt, akik ifjúságukat juttatják eszükbe s a visszaemlékezésben örömük telik, ha csak egy pillanatra is. A «Denevér» ischli előadása óta a császár mindig ott volt a darab előadásán, ha én énekeltem.»

Jeritza operaénekesnői életrendjéről ezeket olvassuk:

«Reggel rendszeren kilenc órakor kelek fel és valami könnyű reggelit eszem: tojást, zsemlyét vajjal és kávé; azután félkettőkor tartalmasabb ebédet eszem, — az a fő étkezésem. Minden délután a teljes nyugalomnak szentelek két órát s ágyban pihenek; azután, ha az idő kedvező, sétálok egy kicsit, vagy lovagolok.

A gyakorlásban nem követek valami nagyon szigorú szabályokat. Az új szerepeket nyáron szoktam betanulni; naponta két-három óra hosszat gyakorolok, de mindig csak megszakításokkal; egyfolytában sohasem énekelek egy óra hosszán át. Rendszeren tizenöt-húsz percig dolgozom s azután néha egy óra is elmúlik, míg újra munkához látok. Természetesen ru-



tin-gyakorlatokat is végzek mindennap. Skálákat énekelek különböző tempókban, «mezza voce» kezdem s azután fokozatosan megyek fel a hang teljes érvényesítéséig. A Marchesi-féle gyakorlatok és solfeggiok, melyekben nagyon sok díszítő és bravuros részlet van, a szerepeimmal együtt elég tanulási anyagot szolgáltatnak a koloraturához is. A szezonban, amikor az operában szakadatlanul próbálok és énekelek, a gyakorlásra nem marad több idő, mint naponként egy óra. Sohasem tapasztaltam, hogy maga a technikai munka megerőltető volna, mert ez a munka lényegében nem egyéb, mint masszáz a hang számára, — a hangszalagok mechanikai hajlítgatása, hogy hajlékonyak és engedelmesek legyenek, — éppen úgy, mint ahogyan a testgyakorlással izmainkat és inainkat tesszük hajlékonyakká és rugalmasakká.

A mindennapi gyakorlást kissé megzavarja az étkezés, mert közvetlenül étkezés után nem lehet énekelni. Így nekem soha sincsen felesleges időm. Olyan napokon, amikor valami nagy szerepet énekelek, egyáltalán el se megyek hazulról: minden időmet a pihenésnek szentelem, hogy az előadásom friss legyen s a lehető legjobb munkát végezzem. Délelőtt vagy délután, amint az idő erre alkalmasabb, átfutom a szerepemet, itt-ott kiragadok belőle egy részletet, vizsgálgom a frázisokat s azoknak dinamikai és egyéb hatását. Néhány hang-hajlékonysági gyakorlaton s ezeken a kiragadott részleteken kívül egész nap nem énekelek otthon semmit a felléptem napján.»

Jeritza Mária nemcsak művésznek, embernek is rendkívüli. Élete, karrierje a tudnivágyás és szorgalom hősi fejezeteinek láncolata. Minden érdekli. Foly-

ton tanul. Kitűnő emlékezőtehetsége és nagyszerű nyelvérzéke van. Toscát, Aidát és a Traviatát három hét alatt tanulta meg olaszul.

A magánéletben egyszerű, közvetlen, kedélyes és vidám, sohasem színészkedő. Igen jó háziasszony. Ha a szakácsnője váratlanul cserbenhagyja, ő maga olyan ebédet főz, hogy azt senki sem hinné Tannhäuser Erzsébetjéről, vagy az ideges Toscáról.

Ennek a titkát így mondja el:

«Amikor még kislány voltam, az anyám gyakran mondta, hogy jól tanuljak meg főzni. «Nem szeretném, ha a férjed valaha azt kérdezné tőlem, hogy miért nem járattalak valami főzőiskolába» — mondotta gyakran.

Igazán jól tudok főzni s a főzésben örömöm is telik.

A főzés éppen olyan nagy művészet, mint egy ultramodern operában egy borzalmas jellem ábrázolása, — de mindenesetre jobban lecsendesíti az idegeket s jobban előmozdítja kényelmünket és jóérzésünket. Vannak olyan receptjeim is, amelyek egyáltalán nem közönségesek. Évekkel ezelőtt volt egy kitűnő szakácsnőm. Kérésemre a császári háztartás igazgatója felvette a császári konyha személyzetébe, ahol alkalma volt a Hofburg szakácsművészeti hagyományait elsajátítani. A bécsi Hofburg évszázadok óta híres volt a konyhájáról. Mikor a szakácsnőm visszajött hozzám, magával hozta az udvar legkitűnőbb konyhareceptjeit; az embernek szinte megeredt a nyála, ha ezeket olvasta. Ha a szakácsművészet magaslátára akarok emelkedni, ma is örömmel forgatom



azt a három vastag könyvet, melyet az udvar francia nyelven írott receptjeiből állítottak össze.

Az énekesnő szempontjából nézve az étkezés kérdését, az a nézetem, hogy az étkezés nem rontja az éneket, — persze csak úgy, ha az étkezés könnyű. Közvetlenül étkezés után nem énekelek, de még felvonás közben sem habozok megenni egy lágy tojást, ha megkívánom. Aki keveset eszik, ezzel esetleg rontja a hangszalagokat; az énekesnek ízletes és tápláló ételekre van szüksége, mert különben rossz a közérzés, s nem lehet jó az alakítása.»

Mikor érzi magát legjobban Jeritza? Ha forró színházi sikerek után meghittjei társaságában lehet. Míg Európában élt, évenkénti nagy munkája végeztével nyáron az Attersee melletti Unterachban magára vette «dirndl»-ruháját és olyan gondtalanul pihent, mint egy — mezei pacsirta.

Milyen kép maradt meg bennünk a művésznő külsejéről?

Pompás színpadi alak, magastermetű, hosszúlábú, erőscsontú, kígyómozgású. Arcvonásai nem szabályosak, de összhatásukban kellemesek. Valami szláv derű ömlik el rajtuk. Homloka magas, egyenes, okos. Arany-szőke, dús, beszédes hajsátor árnyékolja. Orra kissé fitos, szeme azurkék és inkább apró, szája nagy, fogai gyönyörűek, álla erős, gödrös. Hátával és fölfölugró vállával is gyakran mimikázik. Egészben olyan színpadi jelenség, akit egykönnyen nem lehet elfelejteni.

\*

Hogy jobban megismerjük Jeritza művészetét, lásuk néhány nagy szerepében.

Szerepei között előljár: Tosca. Amint a Szent Péter-templom oszlopai közé besurran, a végzetes szerelem ereje ömlik nyomában. Jelentős egyéniségét egyszerre nem hangsúlyozza, mert a néző szeme előtt akarja grandiózussá építeni Floria Toscát. Ideges, nyugtalan, mint egy összeesküvő. Mikor a Farnese-palotában Scarpia rendőrminiszter szobájába besiet, a nézőtér sóhaja, mint ruhauszáj száll szépsége után. Zavart csodálkozásán, — hogy kedvesét, a festőt ott találja, — észreveszünk valami tragikus vonást, mint nagy összeütközések jelzőjét. Zárkóztan ejt egy-egy szót, mint sebzett nősténytigris védekezik a kéjenc Scarpia ellen, de mikor a szomszéd szobából hallja kínzással vallatott kedvese jaját, nem bírja tovább óriási lelki küzdelmét. Vall. Szárazon, ridegen. Amint meggyötört kedveséről letépi a kínzó pribékeket s csaknem ölbeviszi őt a pamlagra és ahogy mellé fekszik, becézi, tapogatja, élesztgeti, — a legreálisabb valóságnál is elhitetőbb. Könyörgő, híres nagy áriáját kedvesének vesztőhelyre hurcolása után (mint földön elnyúló selyemrongy) nem is énekli, csak elvinnyogja. Amíg tagjait ízenként összeszedi s végre talpra áll, lépeget, — a színjátszás legnagyobb pillanatait éli át a néző. Aztán, ahogy beszél a haldokolva hörgő zsarnok Scarpiával, az a hangszín, az a gesztus, az a mimika! — a legmagasabb ábrázoló-művészet. Erről a szerepéről a következőket olvassuk Jeritza önéletrajzában:

«Tosca szerepe különösen kedves nekem, mert Puccinivel tanultam be. Az ő utasításai szerint énekelek és játszom ebben a darabban ma is. A bécsi udvari opera előadásait Puccini utasításai szerint rendezték



s gyakran csak a próbákön keletkeztek azok az ötletek, melyek a hatást fokozták. A nagy Toscák egyike sem érvényesíti például azt a drámai hatást, melyhez engem csak a véletlen juttatott. A második felvonásban, amikor Scarpia kiönti a kávéját az asztalról, a fájdalomtól megtörve, le kell roskadnom a szófára s ott kell énekelnem a híres áriát: «Vissi d'arte, vissi d'amore». Amint a színpadon keresztül mentem a próba alkalmával, hogy a szófához érjek, véletlenül elestem s hogy a zenekarnak e miatt ne kelljen megállania, ott, ahol elestem, fekvé énekeltem. Puccininek ez nagyon tetszett.

— «Végre megtaláltuk — mondotta — hogy hogyan kell énekelni a «Vissi d'arte» áriát! Nem hanyat fekvé a szófán s nem is a színpad elején, hanem a földön fekvé! Amikor összevesznek Scarpiával, — mondta Puccini — Toscának el kell esnie: az ária nem tartozik a darab cselekményéhez, hanem csak Tosca indulatait fejezi ki, — az ének nem Scarpiának szól, hanem fohász az Egek-hez s ezt a fohászt elesve, a földön fekvé kell kifejezni!»

Ez a megoldás logikusabb és igazabb volt, — s úgy Európában, mint Amerikában — megríkatam vele a közönséget. A newyorki előadás alkalmával a kritikusok azt hitték, hogy csak véletlenül estem el s az egyik kritikus meg is dícsért, mint ahogyan elegánsan kifejezte magát «azért, mert a gyomromon fekvé» is tudtam énekelni.

Ha tudta volna, hogy hányszor és milyen gondosan kellett próbálni ezt a jelenetet, hogy meggyőző és művészi legyen!»

\*

Jeritza a «Parasztbecsület» Santuzza szerepében is mindenütt, mindenkit elkápráztatott. A sziciliai parasztleány az olasz verizmus gyúlékony levegőjében úgy jár-kel, mint végzetesen világító szövétnek robbanószerke között. Húsvét reggelének vallásos áhítában éles ellentét az elkeseredett leány karmoló lényé. Mikor a tavasz ébredését dicsőítő, elragadó karének hangszínéből szálegyenes alakja kiválik, olyan, mint egy fejtött sikoly. Szívettépő panaszát hűtlen kedveséről nehéz hallgatni megindulás nélkül. Mikor a legényt váratlanul meglátja, elemi erővel tör ki belőle visszafojtott féltékenysége. Elviselhetetlenül kínos az a szünet, mikor harmadiknak a veszekedők közé csöppen Lola, a kacér vetélytárs. S most jön az a jelenet, amely csaknem megfagyasztja az emberben a vért. Lola bemegy a templomba, a hűtlen legény utána, de Santuzza a templombejárat legfelsőbb lépcsőjén útját állja. Görcsösen belekapaszkodik, visszadobja, erőszakoskodik, hogy Turiddu ne mehessen Lola után. A legény lerázza magáról a kétségbeesetten jajongó leányt, a földre dobja és olyat lódít rajta, hogy tíz lépcsőfokon hengeredik le s félholtan terül el a templom előtt. Képzeljük hozzá, hogy ez pillanatok alatt történik, hogy a történés menetébe kóták, melódiadarabok játszanak bele s mégis minden hang, minden mozdulat olyan természetes és tökéletes, mint maga az élet. Ennél a jelenetnél megdöbbenve figyel a nézőtér...

Jeritza egyik amerikai bírálójának tollából azt olvastam, hogy ez már akrobatizmus, annyira, hogy senkit sem lepne meg, ha ezek után Wagner operáinak óriás tölgyeit gyökerestől húzgálná ki a földből a



művésznő. Nem tagadható, hogy Jeritza bizonyos esetekben színpadi akrobatizmushoz is folyamodik, de mindig, mint a művészi hatás emelésének egyik brutális eszközéhez.

Jeritza bármilyen szerephez nyúl, jelentőssé válik.

Strauss Richard «Ariadne Naxos szigetén» operájának címszerepe igazán nem hálás. És mit csinál belőle ez az asszony?! Az előjátékban kedélyes, bohókás, ennivaló, ripacskodó színésznő. Pálmay Ilkához, a világ legelső operettprimadonnájához, hasonlítható kellem és báj sugárzik belőle — s mint Ariadne szobrászolni való, éneklő mithologia.

«Aidá»-ja is mindig emlékezetünkben marad. A hiúszemű szerelmes aethiop rabnő történetének minden részletét érdemes volt volna feljegyezni. A nilusparti jelenetben, szép hazájától búcsúzós, megható énekén zokogni szoktak. Isis temploma előtt esti homályban csodás délinövények pompájában a gránitsziklák között kúszik a földön. Mindkét kezével és karjával öleli, símogatja a köveket s fákat, lába alatt csillámlik a holdfényes Nilus, belebámul s átkiáltja csobogó vizén hazájába vágyakozó, mély szerelmes bánatát. Nem a sűgőlyuk elé jön énekelni, hanem be, messze a színpadra, oda, ahol az éjszaka mélyebb, misztikusabb. Míg dala el nem száll, kezével folyton a földbe és növényekbe kapaszkodik. Ilyen részletmunkából építi terebélyessé szerepét.

Carment, Rechát, Erzsébetet, Sieglindet és Salomé is játszotta még nálunk.

\*

Jeritza talentumának csúcspontja: félelmetes erejű

drámai játéka. Fokozásaiban és kitöréseiben minden hangja, minden mozdulata meglepetés. Olyan tökéletes színjátész, hogy ha a hangját elveszítené, — akkor is a világ egyik legnagyobb drámai színésznője maradna. A játékbeli tökéletesség emeli őt mindenki fölé. Jeritza az egész vezérkönyvet megjátssza. A zenekar hangszíneit, a hangszerek futamait, trilláit, meglepő, elfinomult harmóniáit, sóhajtó, kitörő, gyönyöző, úszkáló hangjait. Puccini bágyadt, édeskés, símogató, fellendülő, majd süllyedező, borzongásos, kicsiny és kinyújtott melódiáit mind érezteti. A zenekar neuraszténiáját és hiszterikus kitöréseit, a komikus ritmusokban jelentkező legkisebb melódiatöréseket is. Egészen Sardou és Puccini, ha Toscát játssza, egészen Merimée Prosper és Bizet, ha Carmen, ősgermánul Wagner, ha Sieglinde, Elza vagy Erzsébet. Művészetének egyedülálló vonása, hogy annyi és olyan különböző stílusú szerepre senki sem képes, mint ő.

A hangja nagyskalájú, tündöklő, erős, fényes drámai szoprán. Nem rendkívüli, de mindenesetre értékes anyag. Énektudása nem szédítő, torkának kincse nem éri fel művészetének egyéb erényeit, de ha gyöngébb és erős vonásaiból összerakjuk Jeritzát, — keresve sem találjuk párját.

Az éneklő Duse!





SALJAPIN

Kustodijew festménye

„OHNE MASKE“ C. ÖNELETRAJZ KÖTETÉBŐL

„DREI MASKEN VERLAG“, BERLIN, KIADÁSA



a  
sz  
m  
gy

m

az  
löt  
tar  
is  
ne  
In  
és  
sil  
or  
V  
le  
bá  
eg

E

1



## SALJAPIN

a világ egyik legnagyobb énekművésze volt. 1873-ban született az oroszországi Kazánban s 1938-ban halt meg, 65 éves korában, a párisi amerikai klinikán, tüdőgyulladásban.

\*

Egész élete olyan, mint egy mese s ő maga mesebeli alakként él emlékünkbén.

Valósággal a porból emelkedett a művészet és az élet magaslatára. Gyermeksége sanyarú. Apja zül-lött, korhely csizmadia, aki ütötte, verte, állati sorban tartott feleségét és éhez-tette gyermekeit. A kis Fedor is a legszörnyűbb nélkülözéseket szenvedte, amíg be nem került egy templomi kórusba gyermekénekesnek. Inaskodott többféle mesterségben, de igazi szerelme és hivatása az éneklés volt. Addig nyugtalankodott, míg sikerült elszakadnia hazulról s csatlakozott a vándorló orosz énekesek egyik csoportjához. Bejárta velük a Volga vidékét. Ekkor tanulta meg az «Ej, uchnyem»-et, leghíresebbé vált dalát. Orosz hajóvontatók, egyhangú, bánatos dala. «Ez a dal nem is dal, hanem hitvallás, egy nép himnusza» — mondogatta volt.

Saljapin sokféle foglalkozással kereste kenyerét. Erdőmunkás is volt. A kazáni erdőben a szálfá ter-

metű muzsik dalolgatva szálfákat vágott ki, mikor megszólítja őt egy világos arcú, kékszemű paraszt:

— Mennyit keresel egy napi favágással?

— Ételt és lakást kapok érte.

A jövevény végignézett a favágón s csendes szóval mondta:

— Te is ágrólszakadt vagy, mint én. Hagyd itt az erdőt, gyere velem világgá...

És baráti kézszorítás után nekivágtak a nagy orosz birodalomnak. De alig értek a kerület határáig, a csendőrök lefoglák őket.

— Hogy hívnak? — kérdi a csendőr az egyik kékszemű vándorlegénytől.

— Feodor Ivanovics Saljapin.

— És téged? — kérdi a másiktól.

— Pjeskov Alexej Maximovics (a későbbi Maxim Gorkij).

Igy találkozott először az újabbkori idők két legnagyobb orosz muzsikja.

Együtt mentek aztán tovább munkát keresni. Sehol semmi alkalom. De egy színházigazgatóféle énekeseket keres. Egy tenort és egy basszust. A két vándorlegény próbát énekel. Az igazgató a tenort szerződteti, a basszust nem. A tenor: *Gorkij*. A mellőzött basszus: *Saljapin*.

Az egyedül maradt vándor Moszkva felé igyekszik. A nagy városban házról-házra jár favágó munkát keresve. Egy dáma munkát adat neki s megengedi, hogy míg állandóbb alkalmazást talál, a fáskamrában lakhat. A favágó beveszi magát a kamra egyik zugába s szalmaágya fölé kiségezi a kazáni Szűz Mária képét. Másnap és azután igen sokszor, dalol-



gátva végzi munkáját. A ház úrnőjének feltűnik a hang szépsége s énekre taníttatja. A fiatalember a faskamrából felkerül a személyzeti ház külön szobájába. A nagy énekes «Önéletrajz»-ában, — mely 1926-ban oroszul, aztán németül, angolul és franciául is megjelent — azt jegyzi meg, hogy annál nagyobb utat sohasem tett meg, mint amikor a faskamrából bekerült a házba. Ez az út jelentette élete fordulópontját.

Saljapin, a favágó, nem tudta, hogy úrnője Csehovnak, a nagy orosz írónak, özvegye, a Művész Színház tagja, leánynevén Olga Knipper. Szép és gazdag asszony, kinek palotájában Moszkva egész művészvilága találkozott.

Most is nagy vendégsereg gyűlt össze Csehov özvegyénél. A háziasszonynak az az ötlete támadt, hogy behívja a favágót, énekeljen nekik valamit. A legény nagy zavarban van, de nem tud ellenállni az ostromnak, hát elénekli a híres orosz vontatódalt, az «*Ej, uchnyem*»-et.

Zeng, búg a hatalmas, egészséges basszus, a díszes társaság feszülten figyel, egyszerre csak, alig hangzik el az utolsó refrén, odamegy az éneklőhöz egy úr s csak ennyit mond:

— Holnaptól a moszkvai operaház kórusának tagja vagy.

Csaknem megszédült az örömtől a favágó. Így kezdődött Saljapin ragyogó művészpályája.

Saljapin huszonhat éves korában már világhírű énekes. A cári Oroszország kedvence lett. Honfitársai valósággal bálványozták. A külföld is rajongott érte. 1901-ben kezdte meg világkörútjait. A milánói Scalá-

ban, Párisban, Montecarloban arat diadalra diadalt. Négy éven át a newyorki Metropolitan operaház legünnepeltebb tagja. Aztán sokáig Párisban lakott s onnan járt művészkörútjaira.

Budapestre is többször ellátogatott. 1925-ben, 1926-ban, 1927-ben és 1929-ben emlékezetes hangversenyeket adott s nagyszerű szerepei közül 1927 május 14-én eljátszotta Gounod «Faust»-jának Mefisztóját, ugyanazon év november 3-án Rossini «Szevillai borbély»-ának Basilio szerepét (előadás után egy kis hangversenyt adott), ugyanazon év november 7-én ismét a «Faust» Mefisztóját énekelte, 1928 december 10-én harmadszor a Mefisztót s 1929 november 29-én Massenet «Don Quichotte» operájának címszerepét. Az előadásokat a Városi Színházban tartották.

Saljapin a világ legnagyobb színészeinek egyike volt. Ős-színész, akit az őstermészet tökéletessége szült. Rendkívüli színész-tehetségéhez járult a legszebb mély férfihang, mely emberi toroknak valaha is adatott s a tudás, abszolút muzsikalitás és szárnyaló művészlélek: egységben, egy emberben összeforrtan. Milyen lehetett ilyen gazdagsággal rendelkező művésznek a Mefisztó-ja?

Lenyűgöző, félelmetes. A bibliai ős gonosz, Isten lázadó ellenfele. Ezzel a Mefisztóval nem lehetett küzdeni, minden és mindenki megsemmisült körülötte. Egy alkalommal, amikor megjelent a «Faust» első felvonásában, nemcsak a közönség döbbsent meg démoni külsejétől és megszólalásától, hanem a Faust szerepét éneklő tenorista is, aki ekkor találkozott először Saljapinnal, mert próba nélkül került sor az



előadásra. A gyöngé idegzetű énekesre olyan hatást tett Saljapin Mefisztója, hogy elvesztette önuralmát, pillanatok alatt belezavarodott a szerepébe, mindjában megrémült, valósággal idegsokkolt kapott s félbe kellett szakítani az előadást. Pedig Saljapin Mefisztója külsőre nem volt visszataszító. Hajlongott, mosolygott, még szerenádöt is adott. De minden odavetett mosolya mögött fenyegető zordság érzett. Színpadra tévedt kozmikus veszedelem. Ha egy hangot se énekelt volna, akkor is felejthetetlen színészi élmény. De énekelt, és pedig hogy?! — mint ahogy vágat a szél, cikázik a fecske, vagy nyílik a virág.

\*

A magyar közönség *Saljapin* nagy szerepei közül a «Faust» Mefisztóját többször látta, de a külföldi hírlap és szakirodalom híres alakításainak még egész sorával foglalkozott. Csak néhányat említünk: Musszorgszkij «Boris Godunov»-jának, Massenet: «Don Quichotte»-jának és Boito: «Mefistofele»-jének címszerepét. Csajkovszkij, a nagy orosz szimfónikus, emlékirataiban azt mondja, hogy életének legnagyobb színpadi élménye a «Boris Godunov» volt, Saljapin alakításában.

Csak az válhatott olyan nagy színésszé, mint Saljapin, akinek a színház életlényegévé vált. «Határtalanul szeretem a színházat — írja «Önéletrajz»-ában —, valóban olyan vagyok, mint valami vén színházi légy; ha kizavarnak az ablakon, visszarepülök az ajtón. Eltéphetetlen szálak fűznek a színpadhoz. Én mindent csináltam, amit a színpadon csak csinálni lehet. Tiszogattam a rivalda lámpáit, szögeztem díszletet, meg-

gyujtottam a görögtüzet a nagy apotheozisokban. Táncoltam vándortruppokban, énekeltem silány operettekben éppen olyan odaadással és lelkesedéssel, mint ahogy Boris Godunovot énekeltem. A legnyomoruságosabb vidéki ripacs, a legszerényebb cirkuszi csepűrágó a szívemhez nőtt, annyira szeretem a színházat.»

Ugyancsak az «Önéletrajz»-ból olvassuk a következő sorokat.

«— A mi igazgatónk szerint, ha orosz operát adnak, a színpadot előnti valami undorító káposzta- és répaleves szag. Alig, hogy egy ilyen opera nyitánya felharsan, már az egész színházon vodkabűz árad el. A bürokratikus orosz rutin kezdetben így érzett az orosz zenével szemben. Eleinte jó magam is haboztam a «Donna e mobile» és Musszorgszkij között, de egészséges ösztönöm mind erősebben terelt Muszorgszkij felé, aki később meghódította az egész világot, Pétervárott nem értették még akkor ennek a zenének a szépségét. S midőn egyik hangversenyemen Muszorgszkij zenei szatiráját adtam elő, a moszkvai konzervatórium igazgatója megrótt, hogy ilyen értéktelen, félig-meddig kontár zenét népszerűsíték. S ezt a véleményt minden nevesebb zenekritikus osztotta.»

Mamontor, az egyik moszkvai színház igazgatója volt az első, aki megnyitotta kapuit az orosz zenének, amikor a cári opera hallani sem akart róla. Itt aratott Saljapin először nagy diadalt Sierov: Judit-jának Holofernes-ében, még pedig nemcsak mint énekes, hanem mint egészen új utakat kereső színész. Holofernest az orosz színpadokon mint torzonborz, szőrös



félállati szörnyeteget ábrázolták. Saljapin Sierov útmutatása nyomán tanulmányozni kezdte a régi asszír emlékeket, onnan leste el a merev mozdulatokat s olyan stílusban játszotta meg szerepét, mint valami nehéz asszír bálvány.

«— Hogy ez a különös mozgás természetesen hason s ne keltse a betanultság látszatát, — írja Saljapin, — se éjjel, se nappal nem hagytam el. Így jártam az utcán s közben oldalmozdulatokat tettem, előre és hátra lendítettem a karomat. Százszor is megpróbáltam, hogy ölelhetem meg ezekkel a mozdulatokkal Juditot. Erőfeszítésemet siker koronázta. 1897-ben Moszkvában Holofernest egy asszír dom-bormű kimért, szögletes mozdulataival játszottam, de tele erővel, szenvedéllyel és félelmes méltósággal. Azt hiszem, ez volt az orosz színpadon az első ilyen merész kezdeményezés. Később elégtétellel láttam, hogy nagy orosz táncosok is érvényesítették az én felfogásomat.»

\*

Néhány érdekesség a nagy mesterről.

Huszonöt éves korában házasodott meg. Giulia Ternaghi nevű olasz táncosnőt vette feleségül. Csaknem harminc évi házasság után elváltak. Őt gyermekük született. Saljapint második felesége, egy gyönyörű orosz nő, — négy gyermekkel ajándékozta meg. Két adoptált gyermeke is volt a mesternek. Rajongott a kis gyermekekért. Nyilvános tereken együtt játszott velük.

Rengeteg pénzt keresett. Több ízben volt igen gazdag ember, aztán ismét szegénységbe süllyedt.

Sohasem fizettek annyit énekesnek, mint neki. Első amerikai fellépéséért 4800 dollárt kapott, tehát sokkal többet, mint valaha Caruso. Amikor vagyonának másodszori elvesztése után egy fillér nélkül maradt s váratlanul gramofonba énekléssel ezer fontot kérészt, 975 fontért ebédet adott s a fennmaradt 25 fontot borravalóként elosztotta. Egy-egy hangversenyéért 1000 fontot kapott és a bolsevizmus idején olyan helyzetbe is került, hogy elfogadott fél kiló lisztet és negyedkiló cukrot tiszteletdíjként.

A bolsevisták ugyanis óriási vagyonát elvették, bár őt magát bántani nem merték. Nyíltan hangoztatta bolsevista ellenes álláspontját, hiába adományozta neki a szovjet «A nép énekese» címet, amint tehetett, elhagyta Oroszországot, lassanként valamennyi gyermekét kicsempészte külföldre és sohase ment többé vissza. Egyetlen fillér nélkül új életet kellett kezdenie. Megint bejárta a világot és ismét nagy vagyont gyűjtött. De ez a gazdagság is hamar elúszott az 1930-as tőzsdei «krach»-on. Harmadszor is előlről kezdte és újra sikerrel.

Saljapin olyan erős volt, hogy két ujjával ki tudta rántani a dugót a pezsgős üvegből.

Sokat veszekedett a karmesterekkel. Csikágóban egyszer előadás közben óriási botrányt csinált. «Disznók, hülyék!» — kiáltotta a zenekar felé. Erre a karmester is dühbegurult és orronütötte a művészt. A hatalmas erejű Saljapin úgy meglepődött, hogy elfelejtett visszaütni.

Párisban egyszer előadás közben a karmester feje felett vezényelni kezdte a zenekart, amiből megint csak hatalmas botrány kerekedett.



A londoni Covent-Garden egyik orosz próbáján egyszer olyan dühös lett a karmesterre, hogy tettlegességek elkerülése miatt az ügyelő leeresztette közejük a függönyt.

Szerette az ujságírókat, de mindig kifárasztotta őket, mert séta közben adott interjút és a riporterekkel néha fél Londont bejárta gyalog.

Ezerfontos hangversenyek után gyakran megtette, hogy hajnali négy órakor lépcsőházban, vagy zsúfolt szálloda előcsarnokában barátai tiszteletére ingyen koncertet adott.

Egyszer egy londoni étteremben nem tudták elkészíteni számára kedvenc orosz nemzeti ételét, kiment a konyhába és maga főzte meg.

A szabójával rengeteget veszekedett. «Maga ruhákat szab!? Magának csatahajókat kellene építeni!» Gyakran rendelt egyszerre húsz ruhát.

\*

Jusnij, a világjáró, az orosz «Kék madár» híres igazgatója, Budapesten volt, mikor Saljapin 1938 április 12-én, Párisban meghalt. Jusnij érdekes visszaemlékezéseket közölt a Pesti Hírlap április 20-iki számában. Onnan vesszük ezeket a részleteket Zsukovszky-Volinszky G. tollából:

«Huszonnyolc éven át ismertem Saljapint. 1910-ben Saratovban ismerkedtünk meg. Feodor Ivanovics előadás után feljött hozzám a színpadra: — «Szeretem a vídám embereket» — mondotta, — én pedig egész életemben vídám embereket játszottam, — fűzi hozzá felderült arccal Jusnij.

Azóta nem szakadt meg közöttünk a barátság.

Megismerkedésünket, természetesen bőséges ivással fejeztük be. Hazatérőben felszálltunk egy konflisra, Saljapin beszélgetésbe kezdett a kocsisal. Kikérdezte az életét. A kocsis elmondta, hogy nemcsak fuvarozással foglalkozik, hanem van egy kis földje is, azt műveli. Aztán megkérdezte: — «És a nagyságos úrnak mi a foglalkozása?» — «Én énekelek» — mondja Saljapin. — «Énekel!? Mindnyájan tudunk énekelni, én a foglalkozását kérdeztem?» — «Az a foglalkozásom!» — válaszolt Feodor Ivanovics. A kocsis szemmel látható lenézéssel bólintott. — «Én csak akkor énekelek, amikor részeg vagyok.» — mondta. — «Ha én részeg vagyok», — felelte Saljapin — akkor helyettem Petrov énekel.»

«Később Kazánban, Saljapin szülővárosában vendégszerepeltem» — folytatta Jusnij. — Éppen Feodor Ivanovics egyetlen hangversenyét hirdették. Mivel a nagy énekesnek itt első ízben kellett volna fellépnie, az érdeklődés igen nagy volt. A jegyeket első nap szétkapkodták és már másnap a viszonteladók sokszoros áron árúsították. A hangversenyt nem tartották meg, mert szülővárosában, ahol mint «Fedjka» inasgyereket ismerték, Saljapin nem akart megjelenni a színpadon. Valami különös félelem fogta el. Nem is szerepelt soha Kazánban.

Apja, aki kis cipész volt, nem jó szemmel nézte fia új foglalkozását. Amikor Saljapin, első ízben megírta neki, hogy énekkal keresi kenyerét és egyúttal 200 rubelt küldött, a kisiparos nem tudta ezt elhinni, aggódni kezdett érte és azt tanácsolta válaszában a már ismertnevű művésznek: «hagyd abba, fiam, mert előbb-utóbb rajtacsípnék.»



— Utoljára októberben láttam Bécsben — mondja Jusnij. — Akkor már betegeskedett. De azért tele volt tervekkel. Az volt a leghőbb vágya, hogyha majd visszatérhet Oroszországba, saját színházat épít a krimi tengerparton, a Puskin-sziklára. Álmát nem válthatta valóra — fejezte be szavait Jusnij —, de művészetének emlékét, mint az igazi orosz művészet szentélyét, teljesen készen hagyta az utókorra.»

Saljapin néhány esztendővel halála előtt megírta sírversét. Megközelítő fordításban így hangzik:

Vándor, ki itt sétálsz a temetőben,  
Állj meg! E sírba Saljapint temették,  
Elköltözött a végtelen hazába,  
Helyét átadta a következőknek...  
Élt, szenvedett, szeretett és gyűlölt is...  
Sírt, menekült, bolondos és hazug volt  
És minden nőt szeretett, mint a sátán.  
Most megtalálta örök pihenőjét,  
E kő alatt fekszik már mozdulatlan.  
Híres torka elnémult mindörökre,  
Gyászt öltött érte gyermeke, családja,  
De azok, kik szerették s becsülték,  
Nemsokára mégis csak elfelejtik...  
Énekes voltam, színpadok királya,  
Udvari énekes a nagy cárnak,  
Népénekese a köztársaságnak,  
S most mi vagyok! Egy ember, aki csak volt.  
Ki fog Mindszentek novemberi napján  
Csak egy szál gyertyát is gyújtani értem?  
Ha családom is követett az útra,  
Ki emlékszik majd a nagy énekesre?  
Vándor, ki itt sétálsz a temetőben,  
Állj meg egy percre, mondd el ezt a pár szót:  
Béke veled és hamvaidra Feodor.

Hétfői napon, április 18-án temették el Párisban Saljapint a Batignolles-temetőben. Tízezrek kísérték utolsó útjára. A menet elhaladt a Nagyopera előtt. Az opera valamennyi orosz tagja a főbejárat előtt várta nagy honfitársa temetését. A koporsó megállt az opera előtt s az orosz énekesek hazai népdalokkal búcsúztatták Saljapint. A temetési menet nyomában autók hosszú sora, kocsik, sőt biciklik és gyalogos szegény emberek. A temetés tanuságot tett arról, hogy valósággal *mindenki énekese* volt, a legelőkelőbbtől, leggazdagabbtól a legszegényebb szegényig. Még annak számára is, aki sohasem hallotta, fogalmat jelentett a neve és ha azt hallotta: «*Saljapin*», pusztán képzeletében is megközelítette az igazságot.



KAMARAZENE

o  
k  
é  
c  
t  
st  
st  
f  
v  
k  
z  
K  
g  
k  
s  
z  
e  
h  
o  
e  
ic  
n



Ma kamarazene alatt kevészámú hangszerre gondolt, szigorú stílusban tartott, tömören és formásan kifejezett, minden olcsó hatástól mentes muzsikát értünk. Régen kamarazene alatt a szobában (per camera) házilag előadott zenét értették, szemben a templomi (per chiesa) és a színházi zenével. Innen származik tehát a neve s fő jellemzője, hogy első-sorban házizene.

A hangszerek és az énekesek tömege szerint kétféle zenéről beszélhetünk: kamarazenéről és hangversenyzenéről. A kamarazene kisebb helyiségre és kevesebb előadóra számít, szemben a hangversenyzenével, mely a nagy énekkart és zenekart is felöleli. Kamarazenének nevezték összefoglaló névvel már régen is a kizárólag hangszereken előadott duókat, triókat, kvartetteket, kvintetteket és általában a vonósokra vagy fúvóshangszerek kisebb csoportjára írott zeneműveket. Most is kamarazenének nevezzük mindezeket, de elnevezésüktől eltérően, ma rendszerint hangversenytermekben halljuk. 1831-ben Németországban már utazó vonósnégyes-társaság alakult és ezzel a kamarazene, minden muzsikák legmeghittebbje, idegen levegőbe, a hangversenytermek nagy nyilvánosságára elé került.

A házizenét mostanában nem művelik, pedig a XVII. és XVIII. század zenéjének nagyobb fele házizene volt. Ma mindent hangversenydobogóra visznek s így a kamarazene is jórészt elveszvesztette azt a kedves, bensőséges jellegét, amiről elnevezték. A régi, az igazi kamarazene, a német «Hausmusik» és a franciák «Musik de chambre»-ja tulajdonképpen megszűnt. Elmult az a szép idő, amikor a hivatásos és nem hivatásos zenészek nem különültek el, hanem lelkes jóbarátok voltak, akik összefogtak, hogy az egyik gyakorlati készségével, tudásával, a másik talán kiválóbb szépérzékénél fogva minél szebb és tökéletesebb muzsikálásban egyesüljenek. A mai ragyogó hangversenytermekben a kamarazene megtagadja önmagát, mert felcserélte az otthon kedves csendjét a pódium zajos sikereivel, a szoba bizalmas levegőjét a nagy koncerttermek izgató világával, a lelkes baráti kört a szeszélyes közönséggel. A mai kamarazene tehát csak a nevét tartotta meg.

A zenei műfajok és műformák kialakulása s történelmi fejlődése meglehetősen zavaros. Így a kamarazene eredetét is homály borítja. Mint minden hangszeres zenének, a kamarazenének is az énekes muzsika volt a szülőanyja és a tulajdonképpeni zenekari muzsika kialakulásáig a kamarazene története azonos a hangszeres zene történetével. Amint azonban az egyes hangszerek tökéletesedtek, mindegyiknek külön határozott stílusa fejlődött ki. Könnyű megérteni, hogy a zongorastílus más, mint a vonósok stílusa. A hangszerek természetében rejlik ez a különbség, mert az egyiket ütjük (cimbalom, zon-

gora  
vonó  
szeri  
Scarl  
hit t  
stílus  
(Hay  
  
jobb  
és le  
felől  
egye  
kime  
isme  
ritko  
Való  
A vo  
ból  
színt  
s. ze  
szab  
más  
négy  
lota  
zás.  
letm  
ben  
napi  
s a  
nak  
zene  
klas



gora), a másikat fújjuk (trombiták), a harmadikat vonóval húzzuk (hegedű stb.). A zenetörténelem szerint a zongorastílusnak megalapítója az olasz A. Scarlatti, a hegedűstílusé pedig Corelli volt. Az utóbbi tartják a kamarazene megteremtőjének is. Ez a stílus azonban szentesített formáit a klasszikusoktól (Haydn, Mozart, Beethoven) kapta.

Ha a klasszikus kamarazeneműveket vizsgáljuk, jobban megismerjük a kamarazenestílus természetét és lényegét. A kamarazene minden muzsika legelőkelőbbje és legkultúraltabbja. A szó nem köti, az egyes hangszerek szabadon szárnyalhatnak és teljesen kimeríthetik lényegüket. A kamarazene azonban nem ismeri a hangszereknek sem pusztán kíséretre való szorítását, sem művészkedő előtérbe kívánczóságát. Valósággal az egyenlőjogúak legideálisabb köztársasága. A vonósnégyes pedig — mely két hegedűből, brácsából (viola) és gordonkából (cello) áll — maga a színtiszta, igazi muzsika. A kamarazene önmagáért, a zenélés fenségéért és magasztosságáért termett. Nem szabad mögötte semmiféle irodalmi, festészeti vagy más rokonművészeti vonatkozást keresni. A vonósnégyes: a hangszerek játszókedvén épült nemes palota. Minden salaktól és érdektől ment, szép hangzás. Választékos, fordulatos, elmélyedő, finom részletmunkával átítatott s a zenei gondolatok szövögetésében mesteri hímzésű selyemdarab. Selejtes, köznap szólam, vagy dallam nem állhat meg benne s a ritmikai és dinamikai (hangerősség) finomságoknak kimeríthetetlen forrása. A klasszikus kamarazeneműveket elsősorban a formatökély jellemzi. A klasszikusok szonátaformája a legtisztább kamarazene-

forma. Ez pedig csaknem mindig négy részből, úgynevezett tételből áll. Az egyes tételekben általában gazdag zenei életet találunk. Ízlésség, szabatoság és lendület: elengedhetetlen feltétel.

Megemlíjtük még, hogy a kamarazeneművek előadása más természetű, mint egyéb zeneműveké. Az egyénieskedést, a különcködést, valamelyik hangszer túlságos kimagasodását nem tűri. A vonósnégyes négy emberének mintha egy gondolata, egy szíve, egy lelke volna. Olyannak kell lenni az előadásnak, mintha «négy nagyon és egyformán okos ember beszélgetne». A fő: a tökéletes összjáték. Zenei megértésnek, művészi öntudatnak, stílusérzéknek, valamint finom kidolgozásnak, nemes átszellemülésnek és költői felfogásnak, vagyis kamarazenei gondolkozásnak kell az előadásban érvényesülnie.

BEETHOVEN: F-MOLL (OP. 2) ÉS C-MOLL (OP. 111)  
ZONGORASZONÁTA

«Beethoven szonáta komponista volt és maradt mindig — írja Wagner —, mert legtökéletesebben a szonáta formájában tudta magát kifejezni.» Zongoraszonáta kötete a zeneművészet legértelmesebb költeményes könyve, melynek minden darabja láncszeme egy nagy ember lelki fejlődésének. A lánc első és utolsó szeme az *f-moll* és a *c-moll* szonáta.

Első zongoraszonátáját Beethoven valószínűleg még Bonnban, szülővárosában komponálta. A bécsi Artaria zeneműkiadó cég a fiatal mester első bécsi nagysikerű nyilvános fellépése után adta ki, 1796-ban. Opusz-száma: 2. Ez alatt a szám alatt három szoná-



tája jelent meg. A három közül az első az *f-moll*. Ajánlása Beethoven tanítómesterének, Haydnnak, szól. A lobogólelkű ifjú a szonátában még ismert frázisokat, zenei szavakat használ, de kemény, nyers, szaggatott hangsúlyával már rányomja karmai bélyegét. A mű ruhája mozarti, vagy haydni, de a szava: a heroikus, izmos, vakmerő zsenijé.

Az *f-moll szonáta* négy tételből áll. Első és utolsó tétele szenvedélyességgel, Menuetto-ja komolyságával s lassú tétele dallamosságával és békés nyugalommal ragadja meg a figyelmet.

\*

Beethoven utolsó szonátáját az elsőtől 28 év választja el. Ez alatt az idő alatt Beethoven 32 zongoraszonátát írt, mely a zongora újtestamentuma. Ha Beethoven minden szonátáját egyformán tökéletesnek mondjuk, akkor a 111-es opusz-számot viselő *c-moll szonáta* a primus inter pares.

Ez az opusz fogalom a zeneirodalomban, mint a *Kilencedik szimfónia*. Megtalálható benne Beethoven minden művészeti újítása, vívmánya: a hangulatot, a mű lényegét megéreztető lassú beethoveni bevezetés; a variációsforma érzelmi élettel megtöltött csodálatos használata s a két-tételűség. Mindezekon felül a gondolatok mélysége, fensége, szinte kinyilatkoztatásszerű misztikuma. Nehéz Beethovenról úgy beszélni, hogy elragadtatásba ne essünk. De csodálatos művekhez emelkedett szavak illenek, lelkendezve mondjuk tehát Romain Rollanddal:

Az opusz 111-es szonáta: «Apollói szépségű időbeli szobor.»

A szonáta 1822-ben készült s 1823-ban jelent meg, Rudolf főhercegnek írt ajánlással. Két tételből áll. A nagyszabású első tétel a főtémából táplálkozik. A tétel értékre és hangulatra hasonlít a Kilencedik szimfónia első részéhez. Mindkettőben megtaláljuk ugyanazt a komor föniséget és férfias küzdést. Erre már az induláskor rámutat a rövid, tragikus Maestoso bevezetés, melyre hirtelen viharzással csendül fel az Allegro con brio ed appassionata előírású első tétel.

A következő, a variációs tétel, valóságos felmagasztosulása ennek a műformának. Beethovennél a variáció nem csupán figurális játék, hanem lelki szükségéből eredő zenei megnyilvánulási mód. Az az egyszerű, de egyszerűségében bensőségtől áradó «Arietta» (vagyis dallamocska), melyet variál, még Beethoven megérzései közt is feltűnő közvetlenséggel sugározza melegét. Az egyes variációk mindvégig megőrzik a variált «Arietta» körvonalait és mégsem válik uralkodóvá a tételen a variáció jelleg. Lenyűgöző, amint a változatok a témából, vagy annak elemeiből kinőnek, egymásba kapcsolódnak, folyton előretörnek, egymás karjaiba omlanak, összefogódnak, fantasztikus táncot lejtene. Trillaláncok, tremolók ölelik a témát, — majd a mű vége felé már csak ködök táncolnak holdsugarak közt bánatos és békés temető szélén.

Ide jutott Beethoven a fiatalság virágos mezőiről.

Az örökkévalóság szellője lengedez a szonáta felett.

#### BEETHOVEN: «HOLDVILÁGSZONÁTA»

Ezt a halhatatlan alkotást *Holdvilág* (*Mondschein*) szonáta néven ismerjük. Az elnevezés nem Beethoven-



től, hanem Rellstab német regény- és zeneírótól származik.

A szonátaforma törvényszerűségét minden időkre való érvényességgel Bach, Haydn és Mozart állapította meg, Beethoven pedig a fejlődés csúcspontjára vitte. Zongoraszonátái annyira a hangszer szelleméből fakadók, azzal annyira összeforrottak, hogy semmiféle más beállításban, semmiféle más hangszeren elképzelni sem tudjuk őket anélkül, hogy tartalmi értékük meg ne változnék. A szonátákban az érzelmek és érzések minden húrja megcsendül. «Úgy kezdődnek, mintha rögtönözne a mester, mintha hanyagul leborgasztaná a fejét, mintha véletlenül megcsuklana a térde, pillanatnyi sugallatból dacosan megrázná az öklét, mintha ábrándoznék (quazi una fantasia), mintha nem gondolna esztétikai törvényekre, — mégis mindenütt a legszebb formák, a legtökéletesebb arányok. Csupa fantázia és izgultság és csupa rend!»

Beethoven 32 szonátája a zongorazene bibliája. A kedveltebbeket melléknévvel is ellátta az utókor. Így: Pathetikus (Pathétique, op. 13); Holdvilág (Mondscheinop. 27. No. 2.); Pastoral (op. 28.); Waldstein (op. 53); Appassionata (op. 57); Kalapácszongora (Hammerklavir op. 106).

A *Holdvilág szonáta* Beethoven legnagyobb szerelmi regényével, a titokzatos «Halhatatlan kedvessel» függ össze. Ajánlása: «Alla Damigella contessa Giulietta Guiccardi» 1802-ben jelent meg s állítólag Alsó-Korompán (Pozsonymegye) készült volna, ahol Beethoven Brunsvikék társaságában szép napokat töltött. Korompán emléktábla jelöli azt a fát, mely alatt a mesterek mestere halhatatlan művét írta volna. Bizo-

nyosat nem tudunk. A szonáta Brunsvik Teréz (a «Halhatatlan kedves»?) rokonának nevét, Guiccardi Juliát örökítette meg. Guiccardi Julia gyönyörű olasz származású leány volt, a legszebb, akivel Beethoven valaha találkozott. A «Holdvilág szonáta» pedig a legszebb sejtelmes dal, amit a szerelemről valaha is írtak.

A szonáta megszabott formáját új és szokatlan köntösbe öltöztette ebben a művében Beethoven. Azért mondja megjelölésül: «sonata, quasi fantázia». Szonáta, mintha fantázia volna. Egyszerű dalformával (Adagio sostenuto) kezdődik, melynek triolái a méla holdfény elömlő, szelíd ezüstjével fürösztik a virágzó almafa alól égre sóhajto szerelmest. Az álmok világának szövegtelen monológja az első tétel, «melynek kettős éneke (mert ének a basszus is) végigárasztja fáradtságát a komor kíséret egyhangúságán: varratlan szövet, pontosan rásimítva a gondolat egyszerű, igaz szép vonalaira. Ez a gondolat, melynek panasza szűk körben mozog, lassan emelkedik lesujtottságából melódikus csúcspontig, aztán tüstént visszazáll izgatott éjszakájába; ismét felemelkedik anélkül, hogy meg tudna állapodni; háromszor is odaveri magát az alatta levő lépcsőfokhoz, végképpen visszahull és kimerülten elhallgat, miközben a basszus, mint a lélekharang, egyedül ismétli zokogásának ritmusát». (Romain Rolland: «Beethoven».

A szonáta második tétele (Allegretto) megszakítás nélkül következik. Pillanatnyi mosolygó enyhülés, hogy a befejező tétel (Presto agitato) szédítő forgatagát ellentétként előkészítse.



## BEETHOVEN: G-DUR ZONGORA-HEGEDŰ SZONÁTA

A legnagyobb zeneköltő, zongorára és hegedűre tíz szonátát írt. Jellemzőjük az uralkodó zongoraszólam. Ezt azzal magyarázhatjuk, hogy ezek a művek bizonyos alkalmakon szereplő művészek számára készültek s a zongorarészt ilyenkor rendszerint a szerző játszotta. A szonáták a versenyző elem túlsúlya miatt inkább zenekari kíséret nélkül kettős-versenyművek. E mellett szól az is, hogy a szonáták formára nyomó részben három tételesek, mint általában a versenyművek.

A zongora-hegedű szonáták az 1798–1803 közötti években készültek, tehát abban az időben, amikor Beethovent inkább mint virtuózt ünnepelték és gyakran lépett nyilvánosság elé hegedű- és gordonkaművészek társaságában.

A *G-dur zongora-hegedű szonáta* 1802-ben készült, más két társával együtt. Mindhárom a 30-as opusz-számot viseli. Beethoven művét I. Sándor orosz cárnak ajánlotta. Az uralkodó a nagy zeneszerző figyelmét értékes gyémántgyűrűvel viszonzta, majd később, amikor a bécsi kongresszus alkalmával találkoztak, még száz aranyat utaltatott ki a három szonátáért.

A *G-dur szonáta* a tíz közt sorrendben a nyolcadik. Három tételből áll. Az első tétel népies dallamokon felépült gyors. A második: Haydnra emlékeztető stilizált Menuetto. A harmadik: igen gyors menetű Rondo, melyet mintha valami dallam-motor fűtene.

## BEETHOVEN: RAZUMOVSZKIJ-VONÓSNÉGYES

— «*Beethoven* vonósnégyesei: a hallható földi gyönyör» — mondta Wagner.

A halhatatlan mester 16 vonósnégyese közül is talán a három, úgynevezett Razumovszkij-kvartettet kedvelik legjobban. Mélyek és tetszetősek. Az öt «utolsó»-nak nevezett vonósnégyeshez nem hasonlíthatók, azoknak egyedülálló tökélyét, komor fenségét nem érik el, de magasrendű alkotások. A szívhez beszélnek, néhol könnyedebb hangokon.

Ezt a vonósnégyest azért hívják *Razumovszkij-kvartett*-nek, mert Beethoven azt gróf Razumovszkij, bécsi orosz követ felkérésére írta, a gróf házi kamaraegyüttese számára. Razumovszkij adta Beethovennek azokat az orosz dallamokat, melyek a műben könnyen felismerhetők. A vonósnégyes ajánlása Razumovszkij grófnak szól. Bécsben jelent meg 1808-ban.

A zeneirodalmi jelzés szerinti: *op. 59., No. 2., é-moll kvartett* négy tételből áll. Az első élénk menetű, finom, néhol szenvedélyes dallamokkal átszótt muzsikálás. A második tétel igen lassú menetű, csodálatos zengés. Beethoven beszélte el, hogy egy este sokáig szemlélte a csillagos eget, a szférák zenéjére gondolt, így jutott eszébe az Adagio. A harmadik tétel Scherzo-szerű élénk zenélés, érdekes ritmusú orosz dallamokkal. A záró rész vidám hangulatú Finále.

«Templommá változik az a ház, ahol ez a házi-zene az orgona.»



#### BEETHOVEN: «EQUALE» NÉGY HARSONARA

A nagyok nagyja négy harsonára egy különös művet írt. Címe: «*Equale*», ami annyit jelent, hogy «hasonló». Zeneileg úgy értelmezendő, hogy hasonló, egyenemű hangokra írt szerzemény. Vagy férfi, vagy női hangra, esetleg egyféle hangszerekre. Egyházas jellegű kompozíció, de átvittén, világi vonatkozásban is alkalmazható. Áhítatos, dicsőítő, fenséges kürtjel.

Beethoven Bécsbe kerülése óta ismeretségben volt Glöggel linzi székesegyházi karnaggal. Ez a viszony 1812 óta bensőséges barátsággá vált. Beethoven többször járt Linzben, mert József nevű testvére ott jó módú gyógyszerész volt. Ilyenkor Glöggnek sűrűn volt vendége. Egy alkalommal Glögg megkérte a mestert, hogy írjon neki négy harsonára (puzon) «*Equale*». Így született meg Beethoven három «*Equale*»-ja, melyet a mester temetésén Seyfried József bécsi karnagy előadatott s később latinszövegű férfikart írt hozzá. A mű 1812-ben készült Linzben, mikor Beethoven huzamosabb ideig ott tartózkodott.

#### BEETHOVEN: G-DUR ZONGORAS TRIO

Beethoven 1 ópusz-számmal jelezte azt a három zongoráshármast, melyet barátjának és jóakarójának, Lichnowszky hercegnek ajánlott. Időrendben nem ez a műve az első, mely nyomtatásban megjelent, de mert a mester ezzel a számozással indította el alkotásait, a három Triót ismeri a zenetörténet első jelentős (és számozott) kompozíciójának. A zongoráshármasokat a bécsi Artaria-cég adta ki aláírásos előfizetés

alapján. Lichnowszky herceg támogatta a kiadást titokban, hogy Beethoven nehogya megtudja. 123 előfizetéses aláíró gyűlt össze s a nevek közt 27 magyar. Tehát Beethoven első művészi jelentkezésekor sem hiányoztak mellőle a magyarok.

A zongoráshármasok 1795-ben jelentek meg. Beethoven rendkívüli és mindenkitől különböző egyéniségét még nem mutatják. Haydn és Mozart hatása rajtuk még érezhető, de kimutatható, hogy külső zenei formáikat már a belső tartalom szabályozza. A *G-dur zongoráshármas* az 1. opusz-számmal jelölt kiadvány második zongoráshármasa.

Négy tételes. Az első rövid lassú készíti elő, melyre a szonátaformában tartott gyors rész következik. A második tétel gyönyörű lassú. Legszebb része a Triónak. Tartózkodó melankólia húzódik végig rajta, mint mikor valaki örömkönnyek között mosolyog. A harmadik tétel szellemes, játszi Scherzo. A negyedik tétel behízelt főtémájú, nagyon gyors menetű Finale (Rondo). Annyira tetszetős melódia-láncolat, hogy többen átírták hegedű-zongorára (Burmester).

#### BRAHMS: B-DUR VONÓSHATOS

*Brahms:* a zordon fenség romantikus lelkű dalnoka. Művei mély és súlyos zenei gondolatokat hordoznak. Mintha tölgyerdő félhomályban járnánk, melynek lombkoronáján csak néhol üt át a napsugár.

Brahms a magyarokat ismerte, szerette. Sok időt töltött közöttünk. Kamarazenéjének egy részét Budapesten mutattatta be először.

Számos kamarazene műve közül a *B-dur vonóshatos* (vagyis *sextett*) két hegedűre, két brácsára és



két kisbőgőre készült. Szavakkal érzékeltethető tartalmat ne keressünk benne. Szép zenélés.

Négy tételből áll. A gyors menetű első tétel hullámszó erejű fődallamának (főtémájának) szelíd ellentéte a kezdetlegességében csaknem jódlerszerű melléktéma. A második tétel, lassú (Andante) dal, majdnem népdal. A harmadik tétel tréfálkozó Scherzo; a negyedik vissza-visszatérő dallamú, úgynevezett két témájú: Rondo.

A *B-dur vonóshatos*-t Brahms 29 éves korában, 1862-ben írta.

#### BUTTYKAY AKOS: A-MOLL ZONGORA-HEGEDŰ SZONÁTA

A szerző 10. műve. 1912-ben írta. Vecsey Ferencnek ajánlotta. A nagy magyar hegedűművésszel együtt mutatta be.

Három tételből áll. Az elsőben (Allegro) s a másodikban (Adagio) nincs magyar zamat, de a harmadik: művészi, faji muzsika. E tétel első része hamisítatlan magyar verbunkos, palotás zene, mesteri harmonizálással és szólamvezetéssel. A tétel középső része: magyar kesergő, mely feldolgozásában monoton mozgású, altatódalszerű, mintha Szilágyi Erzsébet, vagy Zrínyi Ilona dúdolná fia bölcsőjénél. A gyönyörű dalt a tétel első részének daliás, bokázó hangulata váltja fel, mely emelkedve, szilaj Presto-val zárja be a szonátát.

#### GRIEG: C-MOLL ZONGORA-HEGEDŰ SZONÁTA

*Grieg* nevét jól ismeri és megbecsüli a magyar közönség. Dalai elterjedtek. Norvég táncai, szimfónikus

szvitjei («Peer Gynt»), zongoraművei gyakran állanak műsorainkon.

1843-ban született Bergenben s 1907-ben halt meg. Erősen lírai véralkat. «Észak Chopinjé»-nek nevezik. Saját zeneköltői hitvallását így jellemzi: «Mesterek, mint Bach és Beethoven, hegyormokon emeltek templomokat és dómokat. Én csak emberek részére akartam hajlékokat építeni, hogy azokban otthonosan és boldognak érezzék magukat. Stílusban és formaképzésben német romantikus maradtam, de egyúttal merítettem országom népdalainak gazdag kincséből és az északi népléleknek ebből az eddig fel nem kutatott kisugárzásából nemzeti művészetet akartam teremteni.»

Grieg szavaihoz annyit kell hozzátennünk, hogy ő mindmáig a faji zeneművészet egyik legragyogóbb képviselője. Kamarazenéjét is jellemzi, amit általánosságban önmagáról mondott. Három zongora-hegedű szonátája művészeti hatványon álló, tiszta norvég zene. A három szonáta közül a *c-moll* igen népszerű. Három tételből áll, mint a klasszikusok, vagy romantikusok szonátái. Opusz-száma 45. Tárgya: nincs. Célja: a szép muzsikálás.

Tételei sorrendben: I. tétel Allegro molto ed appassionato; II. tétel Allegretto espressivo (bensőséges románc tánc-szerű középhérszél); III. tétel Allegro animato (stilizált pásztorkürt-játék, éneklő, széles dal-lamú középhérszél).

Grieg kiváló zongoraművész volt. Szonátájának zongoraszólama közelíti a versenyművek magaslatát. A zeneköltő szerette játszani a nyilvánosság előtt ezt az alkotását.



#### HAYDN: G-DUR TRIO

*Haydn* a kamarazene egyik megalapozója. Ebben a műfajban rendkívül gazdag örökséget hagyott a zeneirodalomra. Újabb összeállítás szerint csupán zongorástriót 41-et írt. Ezek közül a *G-dur trio* arról nevezetes, hogy harmadik tétele magyaros dallamokból áll. Egyik első zenetörténeti példája annak, hogy a magyar zene a szigorú klasszikus formák számára alkalmas anyag lehet, ha ihletett mester kezébe kerül. Haydn maga írta e tétel élére «*Rondo all'ongarese*». Haydn harminc évig élt Magyarországon, Eszterházában és Kismartonban. Az Esterházy hercegi udvar zenekarának világhírű karmestere volt. Így kerültek a fülébe a verbunkos jellegű magyar dallamok.

A *G-dur Trio*-t 1795-ben írta. 1796-ban jelent meg Bécsben. Három tételből áll. Az első lassú menetű, meleg dallamú, variációs fordulatokkal. A második igen lassú, széles témájú, nemes fohász. Nevezetes tétel az utolsó, a harmadik. Olyan, mint egy friss csárdás. Mult századbeli kiváló zenetudósunk, Bartalus István, azt írta erről: «Elég magyaros, de több helyen inkább török.» Mi ezeket a dallamokat magyarosnak tartjuk. A zenetudomány a forrásait is megjelölte.

#### HAYDN: C-DUR VONÓSNÉGYES («KAISERQUARTETT»)

*Haydn* Józsefet a vonósnégYES ősapjának tartja a zenetörténet. Ez a műfaj az ő működése óta — tökéletes. Ő az első, ki a tematikus kidolgozás művészi finomságával szötte át vonósnégYESeit. Egy Haydn-vonósnégYESnél kedvesebb és szebb házizenét elkép-

zelní sem lehet. Igazán az önmagáért való zene. Szórakoztató és megnyugtató.

Haydn vagy 80 vonósnégyest írt. Ezek közt egyik legértékesebb a 75-ik opusz-számot viselő, *C-dúr vonósnégyes*, melyet *Császár (Kaiser)-kvartettnek* neveznek. Egyike utolsó vonósnégyeseinek. 1797 és 1799 közt, 65 éves korában írta.

Ismeretes, hogy az osztrák nemzeti himnuszt, az úgynevezett «Gottterhalte»-t, Haydn szerezte. Nekünk, magyaroknak, sok keserűségünk fűződött ehhez a dallamhoz, de ha csak zeneileg nézzük, el kell ismernünk, hogy a legszebb himnuszok egyike s Haydn minden dalánál különb. Melódiájáról azt mondják, hogy horvát népdalból való. Ha már hasonlítgatjuk, akkor inkább magyar népdallal rokon, mert magyaros menetű dallamában felismerhető a régi magyar nóta hangulata és szerkezete. Eredetijét Eötvös Károly határozottan rábaközi nótának tartotta.

A «Gottterhalte» dallamát Haydn *C-dúr vonósnégyesének* lassú részében (II. tétel «Poco adagio») feldolgozta. A melódiát egészében átvette s négy változatban mutatja be. Mesteri változatok. A variációs formálás tökéletessége. Négy tételből áll. I. tétel Allegro. Mozgalmas, gyors rész. Dudára emlékeztető tánc-hangulatán és az egész tételen kedély ömlik el. II. tétel Poco adagio, Cantabile, a «Gottterhalte» és változatai. III. tétel Menüett, Trió-val. Német «Ländler»-szerű tánc. IV. tétel Finale, Presto.



## KÉT MAGYAR SZONÁTA

(Buttykay Ákos és Végh János: zongora-hegedű szonáta)

A zeneműveknek általában olyan szerves, eleven, erős belső szerkezetük van, mint akár az épületnek. A belső szerkezet zenei alapgondolatokból, úgynevezett témákból, ezeknek mikénti alkalmazásából, elrendezéséből, kidolgozásából áll. Ebből a szempontból három zenei formát különböztetünk meg: a dal-, rondó- és szonátaformát. Nincs olyan zenedarab, mely — egészben, vagy legalább is részleteiben — a hármas tagozás valamelyikébe ne esnék.

A szonáta nevet eredetileg hangszeres zenedarabokra használták (sonata = hangzó zenedarab), szemben az énekekre írt zeneművel. Ma a szonáta alatt olyan zeneművet értünk, melyet egy vagy több (de kevés számú) hangszerre írtak s amelynek megszabott formája van. Kik állapították meg ezt a formát? A nagy klasszikusok: Mozart, Haydn, Beethoven. Milyen ez a forma? Három vagy négy különálló főrészből, úgynevezett tételből áll. Legalább is egy tétel szonáta-szerkezetre épül.

Ennek a szerkezetnek jellemzője, hogy a zenei alapgondolatok, a témák, nemcsak felvonulnak benne, hanem meg is mérkőznek egymással. Az egyik téma erőteljesebb, keményebb, a másik lágyabb, énekszerűbb. A szonáta első tétele rendszerint élénk menetű (allegro), a második rendesen lassú (adagio vagy andante), a harmadik gyorsabb, szellemes, humoros (scherzo, menuett), a negyedik összefoglaló természetű (finálénak hívják). A szonáta-tétel belső szerkezete: 1. expozíció; 2. feldolgozás, keresztülvitel vagy elem-

zés; 3. ismétlés vagy visszatérés. Ezt az elrendezést nevezzük szigorú szonáta-formának.

Látnivaló, hogy a ma szonátának nevezett zenedarab négy tétele tartalomban, hangulatban és alakban egymástól különbözik. Mintaalak a négy tétel, de van három-, sőt két tételes szonáta is. Szonáta-formában írják a tulajdonképpeni szonátákat, azután a kamarazeneműveket általában, a versenyműveket, szimfóniákat, részben a szimfónikus költeményeket, nyitányokat és néha az áriákat is.

\*

Buttykay Ákos a magyar zeneszerző-gárda egyik kiváló tagja volt. A budapesti Zeneakadémia, majd külföldön Stavenhagen tanítványa. Tizenhat évig (1907—1923) zongoratanár a Zeneakadémián. Élete második felében a könnyebb színpadi zene hódította el talentumát. Nagy zenei tudása és invenció-gazdagsága révén az operettben is magasra emelkedett. (*Bolygó görög, Csibész király, Ezüst sirály, Oliva hercegnő. A császárné apródja.*) Írt szimfóniákat, szimfóniai költeményt, zenekari szvitet, kísérő zenét az *Ember tragédiá*-jához, zongoradarabokat, zongorahegedű-szonátákat és dalokat.

Buttykay első zongorahegedű szonátáját (op. 10. *á-moll*) 1912-ben írta. Új szonátája — *fisz-moll* — Budapesten készült, 1930 februárjában fejezte be.

Két tételes: I. Allegro moderato, II. Andantio, variációk magyar témára. Az első tétel szonáta-formában tartott, nem magyaros hangulatú, gyors menetű, melynek folyamát epizódszerűen behízelgő, meleg «Canzonetta» szakítja meg. Témái határozottak



és előkelők. Feldolgozásuk leleményes és stílusos. A hegedűrész hálás, a nehéz zongorarészben finoman harmónizált, meglepő zongorahatások rejlenek.

A második tétel a művészi magyar muzsikának egyik legszebb ékköve. Feldolgozása, szelleme, lendülete és témája: színmagyar. «Azt mondják, nem adnak engem galambomnak» ismert magyar dalnak 12 variációs feldolgozása. A tizennégy ütemes témát először a zongora szólaltatja meg, aztán D-húron a hegedű. Az első változatot a hegedű pengetéssel kíséri; a második variációban a zongora tizenhatod trioláit a hegedű széles kettősfogásokkal fedi; a harmadik változat ötletes dallamtorzítás; a negyedik és ötödik szellemes «vivace»; a hatodik széles menetű kánon; a hetedik könnyed szökellés; a nyolcadik egy lassú és egy gyors részből áll; a kilencedikben a zongora basszus-figurációját a hegedű «legato»-ja kíséri; a tizedik sziporkázó élénkség; a tizenegyedik andalító lassú keringő és a tizenkettedik a téma részleteinek más-más ritmusba beállított, pillanatnyi megcsillogtatása, melyhez kódaszerűen rövid «andante» kapcsolódik széles és harsogó fortéban, amit a hegedű négy-oktávás, harminckettes, hasító «fisz-moll» futama zár le.

\*

Verebi *Dégh* János, az Erkelben és Lisztben gyökerező nagy magyar zeneszerző-gárdának volt tagja. Előkelő család gyermeke. Társadalmi állása (kúriai tanácselnök) és tehetsége szerint, egyaránt tisztelt és becsült mester.

Vereben (Fejérmegye), 1845-ben született. A zon-

gorában Thern Károly, a zeneszerzésben Mosonyi Mihály volt a tanára. Szoros baráti viszony fűzte Liszt Ferenchez, aki kompozícióit annyira értékelte, hogy több művét átírta zongorára.

Komponált zenekari s karműveket, zongoradarakokat és kamarazenét. 1881-ben a Liszt Ferenc elnöklése alatt álló Zeneakadémia alelnöke lett s az intézet szervezésében tevékeny részt vett. Budapesten, 1918-ban halt meg.

Hubay Jenőnek ajánlott zongora-hegedű szonátája értékes, költői alkotás. Klasszikus szonáta formában készült. Négy tételes. Az első (Allegro ma non troppo) iskolapéldája a szabályos szonátatételnek; a második játshi Scherzo (Vivace); a harmadik melegszívű, széles dallamú Románc (Allegretto) s a negyedik lelkes Finále (Allegro).

#### A LISZT FERENC KORABELI MAGYARORSZAGI KAMARAZENE

Valamely város zenekultúráját legjobban tükrözi kamarazenéje. Budapest — egyébként egyenetlen zeneéletével — ebből a szempontból elég magas színvonalon áll. Itt már a mult évszázad első évtizedében rendszeres kamarazenélést találunk. 1813-ban alakult meg Pesten az Urbani-vonósnégyes társaság, Urbani Józsefnek, a Pestbudai Hangászegyesület első karnagyának vezetése alatt. Utána, 1827-ben, a Tábornszky Mihály hegedűművész által szervezett Tábornszky-vonósnégyes következett, mely már bérletben rendezett hangversenyeket s elsőnek tűzte műsorára Mozart,



Haydn és Beethoven műveinek rendszeres, sorozatos előadását. A kvartett 12 éven át működött. Egyidejűleg Budán is találunk vonósnégyes társaságot, a Szervaczinszky Szaniszlóét, ki a városi német színház hangversenymestere volt. A negyvenes években, mikor Liszt hosszabb távollét után először jött haza, állandóbb jellegű vonósnégyes társaságunk nincs. Mégis hallott akkor Liszt nálunk kamarazenét. Festetics Leó gróf palotájában, ahol akkor a mester lakott. Festetics Liszt megérkezése napján díszes ebédet adott, mely után a szomszéd teremben egyszerre felcsendült Beethoven fenségesen derűs «Szeptett»-je. Az előadók közt szerepelt Brunsvik Ferenc gróf, Beethoven magyar barátja, aki kitűnő műkedvelő gordonkás volt.

Az ötvenes években, mikor Liszt harmadízben jött haza, a Ridley-féle vonósnégyes működött Pesten, majd a Huber-kvartett s a Spiller-vonósnégyes. Működésükön kívül az egykorú hírlapokban, a Nemzeti Casinóban tartott rendszertelen kamarazenélések után a Pestbudai Hangászegyesület «classikai quartett mutatvány»-airól s a Pestbudai Hangászegyleti Zenede «szellemi zenélyei»-ről olvashatunk tudósításokat szórványosan (1851 és 1852).

A hatvanas és hetvenes években kisebb-nagyobb megszakításokkal az említettek és a Grün-vonósnégyes látta el a főváros közönségét kamarazenével. A hangversenyek az Európa-szálló termében, Pachel, valamint Beregszászy zongoratermében, a Vigadó kistermében, a Zenekedvelők termében s a Hungária-szállóban folytak le. A nyolcvanas évektől szereplő két kiváló vonósnégyes társaságunkat, a Krancsevics Dragomir operaházi hangversenymester vezetése alatt mű-

ködő együtttest és a világhírt szerzett Hubay—Popper kvartettet, Liszt már nem ismerte.

Liszt Ferenc tüneményes pályafutása idején mélyen gyökerező kamarazene életünk még nem volt és ami volt, szellemében nem volt magyar. Mert mit játszottak ezek a kamarazene alakulatok? Túlnyomó részben a klasszikusokat s a német romantikusoknak vagy azok epigonjainak műveit. Más kamarazenét akkor nem is ismertünk. A francia kamarazene művészet nem került el hozzánk, az olaszok soha sem voltak jelentősek kamarazenében, az északi nemzetek még csak kísérleteztek, hogy megtalálják nemzeti formanyelvüket, a csehek sem tudtak még felmutatni számottevő eredményeket, — magyar kamarazene irodalom pedig nem volt. Azaz, hogy lett volna, ha kamarazene társaságainkban van érzék Druschetzky György, Kossovits József, Berner Ádám, Bálvánszky Sámuel s főként Lavotta és Csermák faji magyar alkotásainak felkarolására és az ő szellemükben való fejlődésre. Druschetzky, Lavotta és Csermák a XIX. század elején lerakta a magyar kamarazeneművészet alapjait, de nem akadtak folytatók. A német romantika fejlett kamaraművészete vette át Magyarországon is az uralmat s legfeljebb, ha egy kevés magyaros törekvés mutatkozik — a múlt század derekán és vége felé — klasszikus formában való verbunkos szellemű kamarazenélésre. Mosonyi Mihály az első, aki képzett zenészként lelkes törekvéssel akarja felvirágoztatni Magyarországon a kamarazenét. Értékes zongorástriója 1846-ban jelent meg Bécsben, de «Sextett»-je és ma is jelentős vonósnégyesei kéziratban maradtak.

Mindez nem meglepő. A kamarazene a zenemű-



vészet csúcán áll. Hol voltunk mi akkor ettől a magaslattól? Amint Zeneakadémiánk megkezdte működését, képzett és tehetséges alkotómuzsikusaink sora ezen a téren is eredményeket mutatott fel. Volkmann Róbert, Zeneakadémiánk első zeneszerzés tanára, majd utána Koessler János a kamarazeneművészetnek két rajongója, tudósa és nagy pedagógusa, olyan útravalóval látta el fiatal tehetségeinket, hogy megtudtak küzdeni a legmagasabb zeneművészet formai problémáival s szellemükben szabadok, magyarok maradtak. De ez már nem Liszt idejére esett, ebből legfeljebb annyi, hogy Volkmann Róbertet ő nevezte ki az elnöklete alatt álló Zeneakadémiára tanárnak.

Liszt Ferenc átfogó művészetének különben leggyengébb oldala a kamarazeneművészet. Szorosan vett vonós-kamarazenét sohasem írt. «Angelus»-vonós-négyese: átírat zongoraműből s a mai értelemben vett vonósnégyesnek legfeljebb egyik tétele lehetne.

Liszt nem volt kamarazenélésre hajló természet, se kamaraművész. A kamarezene sokban korlátozott és inkább forma-művészet. Liszt semmi korlátot nem tűrő, legszabadabb művésze az egész zeneirodalomnak. Ő a szabad zene uralmát jelenti. «Azért szeretem Lisztet, — mondja Saint-Saëns — mert ő nem törődik azzal, hogy mások mit tartanak műveiről. Csak azzal törődik, hogy amit műveiben mond, azt a lehető legszebben és legjobban mondja.»

A kamarazene önmagáért, a zenélés fenségéért és magasztosságáért termett. Nem szabad mögötte keresni semmiféle irodalmi, festészeti vagy más rokonművészeti vonást. A kamarazene a zenekar ragyogó nagy olajfestményre emlékeztető stílusával szemben

meghittebb hatású, gondos és finom rajzú grafika. Liszt művészete ennek ellentétéként ritkán marad meg a zene határai között. Mindig több, mint pusztán zenélés. A szimfónikus költemény megteremtésével túl-vitte a zenét természetes határain és olyan eszméket tolmácsolt, melyeket előtte csak a szó, vagy ecset tudott kifejezni.

Liszt elsősorban programzenész. Minden művé-nek a zenén felül és kívül valami jelentést, program-mot adott. Az apró zongoradaraboknak is. Leírja zené-jével utazásait, a látott festményeket, az olvasott köl-teményeket átviszi hangokba, egész gondolatvilágát át tudja fordítani zenére. Az ilyen alaptermészetű zene-költőnek a kamaraművészet hangszeranyaga kevés, kor-látozott, sőt akadályozó. Nem is foglalkozott sokat az abszolút zenének ezzel a válfajával.

Lisztnek 1248 műve közt csak egyetlen kamara-zene kompozíciót találunk: az *Angelus-vonósnégyes*-tételt. Ebben a formájában 1880 szeptemberében ké-szült s első előadása 1882 áprilisában volt Weimárban, udvari hangverseny keretében. Az *Angelus*-t Liszt leánya, Cosima, születésére írta, 1837-ben. Eredeti-leg zongoradarab s az *Années de Pelerinage* («Zarándoklás évei») gyűjtőcím alatt ismert és csodált zene-album harmadik kötetének első darabja. Pontos címe: *Angelus! «Priere aux anges gardiens»*, vagyis «Könyörgés az őrangyalokhoz». Ezzel a csodaszép har-monია sorral üdvözölte Liszt második leánykáját, Cosi-mát, kinek kedvéért 43 év múlva, átírta a művet vonósnégyesre és vonósötösre is (gordonnal), mely a Liszt halála utáni évben jelent meg. Liszt *Angelus*-a



dallamosságával egyik legnemesebb gyöngye a zeneirodalom *Angyali üdvözlét*-einek.

Sokszor összekerülnek késői műsorokon olyan szerzők, akik — míg éltek — nem szívesen időztek egymás társaságában. Így Liszt és Volkmann. Két ellentétes természet. Liszt a nyílt, egyenes, kissé pózoló s mindig hódító világfi és Volkmann, az egyszerű, zárkózott, keserű, szófukar kispolgár. Liszt a szabad művészet hőroza s Volkmann a formalizmus híve. Egyéniségük annyira különbözött, hogy egymást meg sem érthették. Liszt Volkmannról mindig elismerően nyilatkozott. Kigúnyolta ugyan kávéfőzési szenvedélyét, de azért szívesen megitta kávéját s Volkmann tehetségét és tudását mindig védelmezte és kiemelte.

«Nem így Volkmann. A mérges öreg valóságos harci dühvel rontott Liszt műveire. Az ő szemében Liszt nem volt más, mint zenei oltárromboló» — mondja emlékirataiban gróf Zichy Géza.

Liszt idejének Magyarországon legkiválóbb kamarazeneköltője Volkmann Róbert volt. Ez a Magyarországban működött mester idegen szellemű kamarazenét művelt nálunk. Schumann-t tartotta művészeti ideáljának, nem érezte meg a magyar idő közeledő szívverését. Két zongorástriója s hat vonósnégyese éppoly kifogástalan alkotások, mint a többi romantikus mester klassziczáló munkái. Kamarazenéje néhol Schumann magaslatán áll. Tündöklük bennük a tartalom és szerkezet harmóniája. *B-moll zongorás trió*-ja, — melyet Liszt is szívesen játszott, — ma is tartja kamarazeneművészeti népszerűségét.

Vonósnégyesei közül a harmadiknak (*G-dur*, op. 34.) mellékneve: «*Loreley-kvartett*», mert kezdete,

első tételének fő témája egyezik Silcher, német zeneszerző és népdalgyűjtő, Loreley dalával, — anélkül, hogy Volkmann Silcher dalát ismerte volna. A vonós-négyes, mely 1859-ben készült, klasszikus formák szerinti négy tételből áll. Az élénkebb menetű első tételt a daloló lassú (Andante) követi. A szellemes, ötletes Scherzo tündérzenék hangulatában csillog, melyre a művet lezáró Finále következik. — Gyönyörködtető zenélés.

#### MOZART: ESZ-DUR VONÓSNÉGYES. KLARINÉT ÖTÖS

*Mozart* több mint másfélszázada meghalt s műveiben az öt földrész minden pontján él. Ahol nevével találkozunk, egyben a világkultúrával találkozunk.

Salzburgban született. Világhírű csodagyermek volt. Királyok dédelgették. Élete gyors pergésű, nagyszerű dráma, melynek utolsó felvonása végtelenül sötét. Sírját sem tudjuk hol van. Tömegsírba temették, Bécsben — szegénysége miatt.

Alig élt 35 évet. Ez alatt az arasznyi idő alatt rengeteget alkotott. Több mint 500 művet. Ezek közt vagy 50 kamarazene.

Művei: mintha parfömje volna életének. Olyanok, mint egy szép virág, melynek egyéb gondja nincs, csak az, hogy éljen. Ő a zenei szép legnagyobb bajnoka.

\*

A zenetörténet Mozartot a kamaraművészet, az igazi kamarazene, egyik első képviselőjének tudja. Bűbájos érzelmi hangja egyedülálló a zeneirodalomban.



*Esz-dur* vonósnégyes-e 1783 júniusában készült. Mozart műveinek sorszáma szerinti jegyzékében — melyet Köchel Ludwig német zeneíró készített s ezért a neve «Köchel-jegyzék» — a 428-as számot viseli. Négy tételből áll. Az első I. (Allegro ma non troppo) szonáta forma; a második II. (Andante con moto) szintén szonáta forma; a harmadik III. (Menuetto) és a negyedik IV. (Allegro vivace) rondó forma.

A vonósnégyes a Haydn-nak ajánlott hat kvartett közül a harmadik.

Feljegyezték, hogy mikor Grassalkovich Antal herceg a vonósnégyest magának eljátszatta, megpiron-gatta a muzikusokat, hogy hamisan játszottak. A zenészek ellenmondására a herceg dühében széttépte a kótákat.

Igy járnak néha a remekművek...

\*

*Mozart A-dur klarinét ötös-e* vonósnégyesre és klarinéttra készült, 1790-ben, a Mozart halála előtti évben, Stadler Anton kiváló klarinétos számára. Ez a Stadler könnyelmű ember volt, több kellemetlenséget okozott Mozartnak, de a mester szerette, mert hangszerének jeles művésze volt.

Mozart 11 kamaraötöst írt különböző összeállításban. Vonósnégyesre és klarinéttra csak egyet. A mű a Köchel-jegyzékben az 581-es számot viseli. Négy tételből áll. Az első, Allegro (szonáta forma); a második, Larghetto (a kompozíció legszebb és legnépszerűbb része, sokféle átíratban jelent meg külön

is); a harmadik tétel, Menuett s a negyedik, Allegretto, változatokkal.

A műben a klarinét a főszereplő. Főlényesen uralkodik a vonóshangszereken és sajátos, érzéki, külön érzelmvilágban él.

#### MOZART: VERSENYMŰ OBOARA, KLARINÉTRA, KÜRTRE ÉS FAGÓTRA

1788 áprilisban írta Mozart ezt a fúvósművészeti remekművet. Eredeti címe: «*Symphonie cenzerante.*» A Mozart-összkiadásban «*Konzertantes Quartett*» néven szerepel. A zeneköltő Párisban találkozott az akkor híres mannheimi zenekar fuvós művészeivel, akik megkérték őt, hogy írja számukra egy új művet. Így keletkezett ez a versenymű. Sokáig elveszettnek tartotta a zenei irodalom.

Három részből áll. Az első tétel (Allegro) szonáta forma; a második (Adagio) rondo formában épült fel, míg a harmadik tételnek, mint a neve is mutatja (Andantino con variazioni), variációs formát választott a zeneköltő. A műben ne keressünk problémát, vagy valami jelentésbeli értelmet. Az első tételből a szép hangzás feletti öröm tör elő; a második tételben az érzéki témák hódítanak, míg a harmadik rész erőssége a zenekar és a szóló hangszerek bravúros kezelése.

#### SCHUBERT: ESZ-DUR ZONGORÁSTRIO

Schubertnek, a zene első nagy lírikusának kamaraművei között az *Esz-dur zongorástrío* a századik műve. 1827-ben írta, Bécsben, harminc éves korában,



a halála előtti évben. Tobzódó dallam-szépség, de a dallam-áradat lírai hevületéből férfias erő, sőt drámai feszültség érzik. Ez az erőteljesség különbözteti meg az *Esz-dúr trio*-t Schubert más kamarazenéjétől.

A mű négy tételből áll: I. Allegro, II. Andante con moto (gyászinguló-szerű), III. Scherzo, IV. Allegro moderato. Mint csaknem minden zongorás-kamarazenén, úgy itt is a zongora uralkodik a vonóshangszereken. Alig lehet megválni a szépséges zongoradallamoktól. Schubertet hallgatva, sokszor eszünkbe jut Schumann találó mondása:

«Amire a szeme ránézett, amihez a keze hozzáért, abból zene lett.»

#### SCHUBERT: A-MOLL VONÓSNÉGYES

A dal legnagyobb mesterének, *Schubert*-nek, időrendben első remekműve. Huszonkétéves korában írta Zseliz-en, Magyarországon. Ez a község most a Felvidékkel visszakerült az anyaországhoz. Schubert 1818-ban és 1824-ben hónapokat töltött Magyarországon, gróf Eszterházy Károly zselizi kastélyában. Zenetanítója volt a gróf leányainak. Zseliz község Schubert több jelentős művének szülőhelye. Ezek közül is kiemelkedik a 29. opusz számú *a-moll vonósnégyes*.

Négy tételből áll: I. Allegro ma non troppo, szonáta-forma; II. Andante. Kiszélesített dalforma, rondó-szerű és variációs képletekkel. III. Menuetto. Stilizált táncforma. IV. Allegro moderato, magyar ritmusokból és magyaros dallamokból épült mesteri része a vonósnégyesnek. Szembeötlő példája annak,

hogy a zselizi magyar környezet mennyire hatott Schubert lángelméjére.

A vonósnégyes a tiszta zenei romantika levendula-illatú virága.

#### SCHUBERT: B-DUR ZONGORÁS-HÁRMAS

*Schubert* 1826-ban írta, Bécsben huszonkilenc éves korában. Tobzódó dallam-szépség.

A zongoráshármas bemutatója Bécsben egyik emlékezetes, úgynevezett, «Schubertiád»-on volt. «Schubertiád»-oknak nevezték a művészetért hevülő fiatal írók, festők, színészek és hivatalnokok baráti összejöveteleit. A központ természetesen Schubert. A meghitt baráti társaság sokszor muzsikál tisztes polgári otthonokban, szép asszonyok, lányok körében, kis fogadók kertjében. A «Schubertiád»-ok azért neveztetsek, mert Schubert ebben a baráti körben érezte magát legjobban s jórészt ez a társaság termelte ki belőle alkotásait. Ők hallották először azokat a kompozíciókat, melyek a világ szívét simogatják.

A *B-dur triót* is ők hallották először. Bocklet, Schuppanzigh és Lincke adta elő. Bocklet zongoraművész, Schuppanzigh a róla elnevezett vonósnégyes-társaság első hegedőse, Beethoven barátja és Lincke a Schuppanzigh-vonósnégyes jeles kishőgőse.

A Trio négy tételből áll.

#### SCHUBERT: C-DUR VONÓSŰTŐS

A zeneirodalom egyik legszebb kamarazenéjét *Schubert* írta, a dalnak s gyönyörű dallamoknak tündöklő mestere. Halála évében, 1828-ban készült. Huszon-



két évig hevert a mű a zeneköltő hagyatékában, 1850-ben mutatta be Bécsben a Hellmesberger-kvartett. Azóta muzsikuskok és zenekedvelők csodálatos dallam-szépségei miatt az elragadtatás hangján beszélnek erről az alkotásról.

A mű opusz száma 163. Két hegedűre, brácsára és két kisbőgőre készült. Négy tételből áll. Tárgya, tartalma nincs más, mint klasszikus, ismert zenei formákba fogott nemes, romantikus muzsika. Olyan magasztos zene, hogy szavakkal érzékeltetni alig lehet. Az első tétel gyors menetű szonáta. A második felséges, égfelé lebegő fohász (Adagio). A harmadik Scherzo. Táncszerű, néhol kedélyes Presto. A tétel a Trió-ban elkomorodik, majd egyházas színezetű imádsággá terül szét. Mintha az égben orgonálnának. A negyedik tétel Finale. Stilizált tánc.

#### SCHUMANN: D-MOLL ZONGORÁS-TRIO

*Schumann*, a német zenei romantika vezéralakja. Olyan sokrétű művészegyéniég, hogy gondolkodóba ejti az embert, melyik vonását emelje a többiek fölé. Talán legnagyobb mint zeneköltő, de nem áll lejjebb, mint író sem. Magasabb-e a dalban, mint a zongoradarabokban, vagy a kamarazenében? — alig lehet eldönteni.

Sajátságos ember volt, akárcsak a zenéje. Álmodó és energikus, szelíd és vad, kedélyes és szelímes. Fantáziája nem ismert határokat. Német eszeség, számítás és technikai találékonyság tükröződik szerzeményeiben. Minden sora a zseni bélyegét viseli magán.

Kamarazenének ütemei is ezt bizonyítják. Csupa váratlanul előbukkanó zenei szépség. Kiváltképpen azokban a művekben, melyekben a zongora vezet.

Schumann három zongorás-triót írt. *A d-moll zongorashármas-t* 37 éves korában, 1847-ben komponálta.

Négy tételből áll. Érdekfeszítően szép.

#### SZABADOS: D-MOLL VONÓSNÉGYES

*Szabados Béla* finom költészete vonzódott a kamarazene nemes művészetéhez. Első ifjúkori szerzeménye vonósnégyes volt. Feléje fordította a Zeneakadémia tanárainak figyelmét. Négy vonósnégyest írt. Az utolsót, 1929 április 4-én, a Rádióban mutatták be.

A *d-moll vonósnégyes* klasszikus kamarazene formában készült. Tartalma, tárgyköre: a magyar szív daloló kedve. Négy tételből áll. Az elsőben rövid, borongó bevezetés után dacos lendületű, magyar szövésű főtéma lép fel. Rövid átvezető rész után a melléktemához jutunk, mely a magyar zenében igen szokatlan 9/8-os ütem mellett is színmagyar zamatú. A tétel szigorú szonáta-formát mutat, melynek végén a lassított és az első hegedű által erősen «Rubáto» hangoztatott főtéma csendül fel, mint rövid, befejező «Koda». A második tétel megkapó, bánatos, magyar dal három, egymástól lényegesen elütő témával. A harmadik tétel: «Scherzo». Gyors, itt-ott rohamosan neki-lendülő, másutt kedélyesen derűs, frissen perdülő tré-fálkozás. A Scherzo végén a Trio témájának remi-



niszccenciája csendül fel. A negyedik tétel: Rondo-formában készült. Egyik témája duhaj, cigányos. Megkapó ellentétként illeszkedik a tételbe. A gyorsan, lelkesen perdülő tétel az egyik téma «augmentált» hangjaival zárul.

nagyszerű hegedűtrillákkal. Igen hálás és közkedvelt

#### SZENDY: VONÓSNÉGYES

Szendy Árpád, a kiváló zongoraművész, pedagógus és szerző, két vonósnégyest írt. Az első nyomtatásban megjelent, a másik kézirat. 1902-ben komponálta és először Budapesten a Hubay—Popper vonósnégyes-társaság mutatta be. Egy évre rá Bécsben is nagy sikere volt, ahol a Rosé-kvartett játszotta.

Klasszikus kvartettek mintájára készült. Négytétel. Az első (Allegro) tétel markáns főtémájára bájos palotásszerű melléktéma következik. E kettő mesteri szövetéből készült a szabályos szonáta formában tartott tétel. A második tétel szellemes «Scherzo» igen gyors tempóban. Túláradó muzsikáló kedv hajtja a játszi könnyedségű, sziporkázó tételt. A Scherzo Trió-ja lassú, szélesen ívelő, nemes melódia. A harmadik tétel: Andante. Szomorú, sóhajokkal és mély fájdalommal telt magyar siratóének. A szerző maga írta az élére: «Lugubre». A negyedik tétel, a Finále, gyors menetű, víg hangulatú Allegro. Csüddöngölő-szerű pattogóan magyar főtémájára a «Végigmentem az ormódi temetőn» kezdetű népdalra utaló nyugodtabb melódia következik, majd a hangulat vidámságba csap át s hódító, magyar zeneképpé fejlődik.

## TARTINI: ÖRDÖGTRILLA

*Tartini*, olasz hegedűművész, zeneszerző és pedagógus élete egyike a legérdekesebbeknek. Szülei papi pályára szánták, de egy páduai leány iránti heves szerelmében otthagya a papságot, szüleivel összekülönbözött s hogy megkereshesse kenyerét, vívómester, majd vidéki zenekari hegedűs lesz. Éjjel-nappal hegedül és komponál. Negyvenéves korára Európa legkiválóbb hegedűpedagógusa. Távoli országokból a hegedűnövendékek serege kereste fel.

Számos szerzeménye közül leghíresebb: *Ördögtrilla* című hegedű-zongoraszonátája, melynek keletkezéséről legendák keringnek. Hogy a mű utolsó tételének ördögös kettős fogású trilláit álmában, magától az ördögtől hallotta s felriadva, hirtelen lejegyezte stb. E fantasztikus mesék nélkül is értékes alkotás az «*Ördögtrilla*»-szonáta, melynek tételai telítve vannak nagyszerű hegedűtrillákkal. Igen hálás és közkedvelt hegedűdarab ma, születése után jó két és fél évszázaddal is.

## VERDI: VONÓSNÉGYES

*Verdi*, a legnagyobb olasz operaköltő, egyetlen vonósnégyest írt, mely szerzőjéért, szelleméért és értékességéért különlegessége a zeneirodalomnak.

Szerzője miatt azért, mert Verdi az olasz művészetnek Dante és a három reneszánsz lángész óta legtündöklőbb neve. Ki ne volna kíváncsi arra, hogy a *Rigoletto*, *Trubadur*, *Traviata*, *Aida*, *Otello*, *Falstaff* operák alkotója, a dallamoperák Krözüsa, milyen kamarazenét írt?, ahol a formák ridegek, énekelt dal-



lamok nincsenek s a lírai hevületek nem érvényesülnek.

Szelleme miatt azért érdekes ez a vonósnégyes, mert nem törődik a szigorú kamarazene-stílus elvont szabályaival.

És mégis értékes mű a kvartett, mert ő írta, a daloló zseni. Operaszerű témák kergetik egymást a négy húros hangszeren. Megtaláljuk benne a szonáta-formát, a témák ellentétét, azok feldolgozását, az ellenpontot, a fugat s az egész mégsem más, mint egy el nem készült opera kivonata. Kívánczik az ének, a szöveg után.

Különleges kamarazene!

Hatvanéves korában, 1873-ban, írta Verdi *é-moll* vonósnégyes-ét.

Négy tételből áll: I. Allegro, II. Andantino, III. Prestissimo, IV. Scherzo és fuga. Sorozata a szép pillanatoknak.

---

### MEGJEGYZÉS

«Erkel Ferenc származása» és «A Szózat százéves zenéje» című tanulmányomat a «Magyar Zenei Almanach 1944» (Fráter György Sajtószövetkezet kiadása) című kötetemből s «Filtsch Károly, Chopin magyar tanítványa» című tanulmányomat «Muzsika» című kötetemből (Gergely R. könyvkereskedés kiadása, 1935) vettem át a kiadók engedélyével.

P. V.



## TARTALOM

1. Erkel Ferenc származása . . . . .	5
2. Százéves a Himnusz zenéje . . . . .	19
3. Az ismeretlen Erkel . . . . .	31
4. A Szózat százéves zenéje . . . . .	48
5. Aggházy Károly . . . . .	62
Aggházy Károly zeneműveinek jegyzéke . . . . .	73
6. Székács Aladár . . . . .	79
7. Filtsch Károly, Chopin magyar tanítványa . . . . .	84
8. Nietzsche Petőfi-dalai . . . . .	100
9. Wagner Pesten . . . . .	107
10. Haydn nyomában . . . . .	122
11. Hol van Haydn koponyája? . . . . .	136
12. Jeritza . . . . .	145
13. Saljapin . . . . .	161
14. Kamarazene . . . . .	173
<i>Beethoven: F-moll (op. 2) és c-moll (op. 111) zongora</i>	
szonáta . . . . .	178
— «Holdvilág szonáta» . . . . .	180
— G-dur zongora-hegedű szonáta . . . . .	183
— Razumovszkij vonósnégyes . . . . .	184
— «Equale» négy harsonára . . . . .	185
— G-dur zongorás trio . . . . .	185
<i>Brahms: B-dur vonóshatos . . . . .</i>	186
<i>Buttykay Ákos: A-moll zongora-hegedű szonáta . . . . .</i>	187
<i>Grieg: C-moll zongora-hegedű szonáta . . . . .</i>	187
<i>Haydn: G-dur trio . . . . .</i>	189
— C-dur vonósnégyes («Kaiserquartett») . . . . .	189
<i>Két magyar szonáta: (Buttykay Ákos és Végh János</i>	
zongora-hegedű szonáta . . . . .	191
<i>A Liszt Ferenc korabeli magyarországi kamarazene . . . . .</i>	194
<i>Mozart: Esz-dur vonósnégyes, Klaritét ötös . . . . .</i>	200
— Versenymű oboára, klarinéttra, kürtre és fagóra . . . . .	202
<i>Schubert: Esz-dur zongorás trio . . . . .</i>	202
— A-moll vonósnégyes . . . . .	203
— D-dur zongorahármas . . . . .	204
— C-dur vonósötös . . . . .	204
<i>Schumann: D-moll zongorás trio . . . . .</i>	205
<i>Szabados: D-moll vonósnégyes . . . . .</i>	206
<i>Szendy: Vonósnégyes . . . . .</i>	207
<i>Tartini: Ördögtrilla . . . . .</i>	208
<i>Verdi: Vonósnégyes . . . . .</i>	208



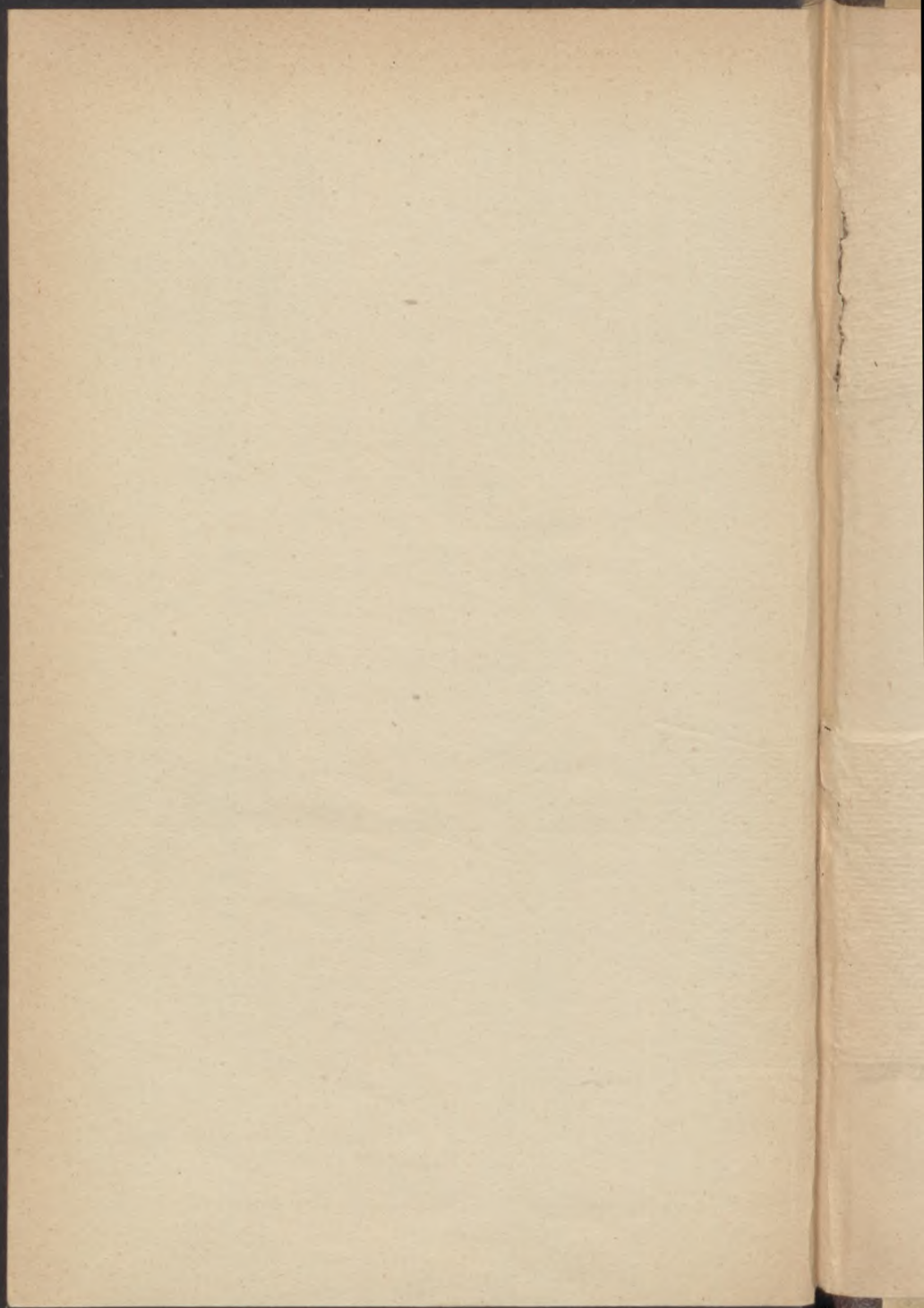
# PAPP VIKTOR

## könyvei:

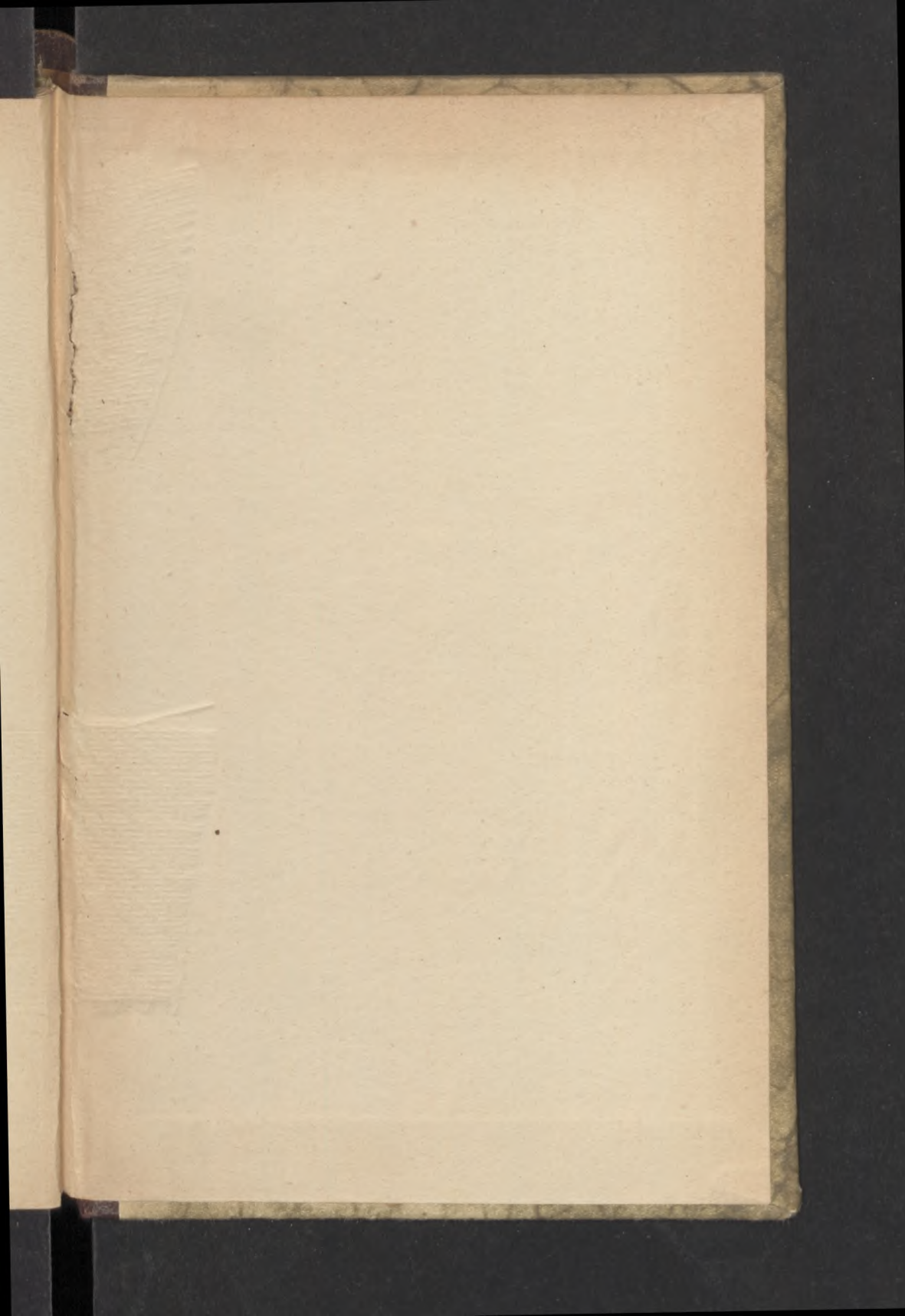
1. «ARCKÉPEK A ZENEVILAGBÓL».  
(1918.) Franklin Társulat kiadása.
2. «BACH JÁNOS SEBESTYÉN ÉLETE ÉS MŰVEI».  
(1921.) Pantheon kiadása.
3. «BEETHOVEN ÉLETE ÉS MŰVEI».  
(1921.) Pantheon kiadása.
4. «BEETHOVEN ÉLETE ÉS MŰVEI». II. bővített kiadás.  
(1927.) Pantheon kiadása.
5. «HAYDN JÓZSEF ÉLETE ÉS MŰVEI».  
(1922.) Pantheon kiadása.
6. «ARCKÉPEK AZ OPERAHAZBÓL».  
(1923.) Stádium kiadása.
7. «ARCKÉPEK A KULFOLDI ZENEVILAGBÓL».  
(1923.) Stádium kiadása.
8. «ARCKÉPEK A MAGYAR ZENEVILAGBÓL».  
(1923.) Stádium kiadása.
9. «DOHNÁNYI ERNŐ».  
(1927.) Stádium kiadása.
10. «BEVÉZETŐ A ZENEMŰVESZETBE».  
(1927.) Vaggenreiter kiadása, Berlin.
11. «BEETHOVEN ÉS A MAGYAROK».  
(1927.) Szerző kiadása.
12. «DOHNÁNYI ERNŐ ES SZEGEDI MISEJE».  
(1930.) Csáthy kiadása.
13. «MUZSIKA».  
(1935.) Gergely kiadása.
14. «LISZT FERENC ÉLŐ MAGYAR TANITVÁNYAI».  
(1936.) Dante kiadása.
15. ZENEKÖNYV. «Operaismertetések».  
(1940.) Stádium kiadása.
16. ZENEKÖNYV. «Arcképek — Életrajzok».  
(1940.) Stádium kiadása.
17. ZENEKÖNYV. «Zenekari esték». I. kötet.  
(1940.) Stádium kiadása.
18. ZENEKÖNYV. «Zenekari esték». II. kötet.  
(1940.) Stádium kiadása.
19. BALÁZS ÁRPÁD EMLÉKEZETE».  
(1943.) Rózsavölgyi kiadása.
20. MAGYAR ZENEI ALMANACH 1944».  
Fráter György Sajtószövetkezet kiadása.
21. ZENEKÖNYV. «Tanulmányok. Kamarazene».  
(1944.) Stádium kiadása.
22. ZENEKÖNYV. «A nóta».  
(1944.) Stádium kiadása.

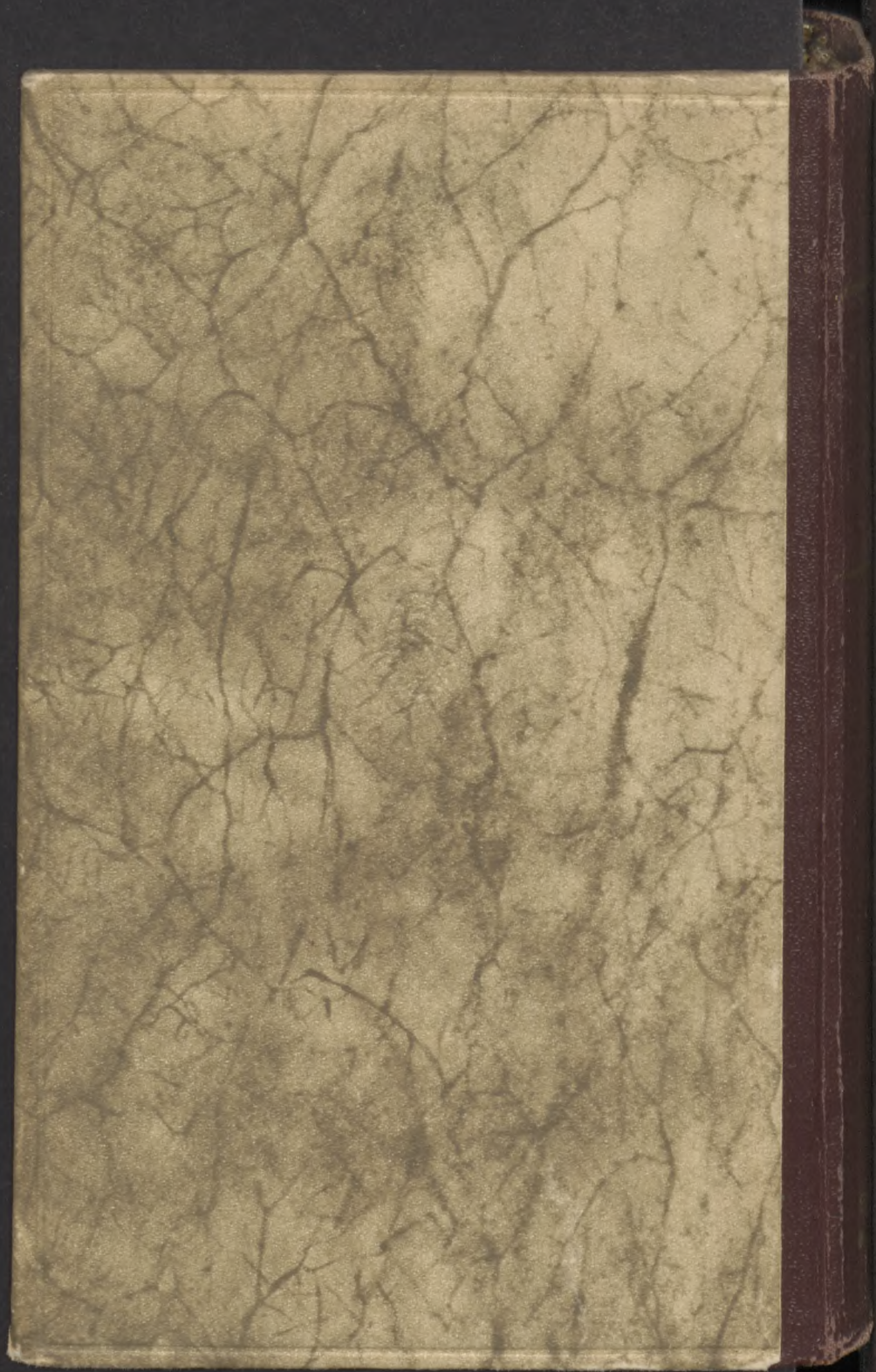


ri:











PAPP VIKTOR  
ZENEKÖNYV  
—  
TANULMÁNYOK  
KAMARAZENE

STÁDIUM  
KIADÁSA